一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４

浅柄Ⅲ遺跡

２０１７年１２月

島根県教育委員会

一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４

浅柄Ⅲ遺跡

２０１７年１２月

島根県教育委員会

序

現在、一般国道９号の出雲市知井宮町から湖陵町三部間は、現道では通過交通と、生活交通が混在し、幹線道路として支障をきたしているうえに、一般国道の代替路線がなく、交通事故等の発生により、日常生活はもとより、地域の経済活動に多大な支障をきたしています。そのため、中国地方整備局松江国道事務所では、緊急時の代替路線の確保、地域経済の振興、救急医療の向上及び生活圏域の連携を促進することを目的として、出雲・湖陵道路を平成 20 年度から事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

本報告書は、平成 28 年度に実施した出雲市知井宮町地内に所在する浅柄Ⅲ遺跡の調査成果をとりまとめたものです。今回の調査では、7 世紀後半の集落跡の一端が見つかり、当時の人々の生活を考える上で貴重な成果となりました。

本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

平成 29 年 12 月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所長　鈴 木 祥 弘

序

山陰自動車道鳥取益田線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づき、均衡ある国土の開発に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、西日本高速道路株式会社中国支社松江高速道路事務所管内においては、松江玉造ＩＣから出雲ＩＣまで供用しています。現在、出雲ＩＣと接続する出雲・湖陵道路の事業が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所により進められており、平成 28 年度から出雲ＩＣ周辺の工事を共に進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

本報告書は、平成 28 年度に実施した出雲市知井宮町地内に所在する浅柄Ⅲ遺跡の調査成果をとりまとめたものです。

この記録調査がはるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を、時代を超えて現代に甦らせ、また、現在に生きる私どもの未来の道しるべとなるとともに、今後の調査研究の資料として活用されることを期待します。

なお、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成 29 年 12 月

西日本高速道路株式会社中国支社

松江高速道路事務所長　坂 根 光 夫

序

本書は島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社から委託を受けて、平成 28（2016）年度に実施した一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

本報告書で報告する浅柄Ⅲ遺跡では、飛鳥時代の建物跡が発見され、古墳時代終末期から中世にかけての遺物が出土しました。

当時の出雲平野西部には『出雲国風土記』に記載される「神門水海（かんどのみずうみ）」が広がっており、両遺跡の立地する出雲平野南岸部には、縄文時代後期から中世にかけての重要な遺跡が多数発見されています。当時の集落の様子を知る上で重要な資料であるとともに、「神門水海（かんどのみずうみ）」南岸部の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本報告書が、この地域の歴史を解明していくための基礎資料として広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の作成にあたりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社をはじめ、出雲市、知井宮地区の方々並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 29 年 12 月

島根県教育委員会

教育長　　鴨　木　　朗

例言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局松江国道事務所及び西日本高速道路株式会社中国支社から委託を受けて、島根県教育委員会が平成 28 年度に実施した一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。
2. 本報告書の発掘調査対象遺跡及び事業年度は下記のとおりである。
   平成 28 年度　　浅柄（あさがら）Ⅲ遺跡（出雲市知井宮町浅柄 1706 外）
   平成 29 年度　　整理等作業・報告書作成
3. 調査組織
   調査主体　　島根県教育委員会
   平成 28 年度事務局　萩　雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）、池淵俊一（管理課長）
   調査担当者　守岡正司（調査第二課長）、阿部智子（同課臨時職員）、片寄雪美（同）
   平成 29 年度事務局　萩　雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋　聡（総務課長）、池淵俊一（管理課長）
   調査担当者　守岡正司（調査第二課長）、宮本　保（同課第二係長）、阿部智子（同課臨時職員）、片寄雪美（同）、岩橋康子（同）、大田晴美（同）
4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については次の機関に委託した。
   平成 28 年度：株式会社トーワエンジニアリング
5. 発掘調査にあたっては、以下の方々から御指導いただいた。（五十音順・肩書きは当時）
   石丸恵利子（広島大学総合博物館研究員）、大橋泰夫（島根大学法文学部教授）、中村唯史（島根県立三瓶自然館課長代理）
6. 発掘調査に際して、以下の方々、関係機関から御協力、御助言をいただいた。（肩書きは当時）
   花谷　浩、坂本豊治、須賀照隆、幡中光輔（出雲市文化財課）、岩橋孝典（島根県古代文化センター）
7. 挿図中の北は測量法に基づく平面直角第Ⅲ系Ｘ軸方向を示し、座標系ＸＹ座標は世界測地系による。レベルは海抜高を示す。
8. 本書で使用した第２・５図は国土地理院発行 1/25,000 地形図（神西湖）を、第３図は出雲市都市計画図（No31）1/2,500 を使用して作成したものである。
9. 本書に掲載する土層名は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修 に従って表記した。
10. 発掘調査に伴って、出土鉄製品の保存処理を次の機関に委託した。
    平成 29 年度：公益財団法人大阪市博物館協会
11. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は守岡・宮本が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浄書は、各調査員・臨時職員・整理作業員が行ったほか、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。

12. 本書の執筆は、第 1 ～ 4 章、守岡が行った。
13. 本書の編集は守岡が行った。
14. 註は各章ごとに連番を振り当該頁下に配置し、参考文献等は各章末にまとめて示した。写真、挿図及び表の番号は全体の通し番号により表示した。
15. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真等の資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町 33 番地）にて保管している。

本文目次

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査にいたる経緯と経過 …… 1
　　１．事業計画の概要 ……1
　　２．埋蔵文化財保護部局への照会と調整 ……1
　　３．法的手続き ……3
　第２節　発掘作業と整理作業の経過 …… 4
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　浅柄Ⅲ遺跡の調査成果 …… 11
　第１節　浅柄Ⅲ遺跡の概要 …… 11
　　１．発掘調査区の設定 …… 11
　　２．調査地区割りの設定 …… 11
　第２節　浅柄Ⅲ遺跡の調査 …… 14
　　１．調査方法 …… 14
　　２．基本層序 …… 14
　　３．検出遺構とその遺物 …… 18
　　４．包含層出土の遺物 …… 53
第４章　総括 …… 61
　第１節　遺構の時期 …… 61
　　１．加工段・土器溜まり８ …… 61
　　２．溝跡 …… 61
　　３．掘立柱建物跡・柵列 …… 62
　　４．杭列 …… 62
　第２節　浅柄Ⅲ遺跡の造り付け竈 …… 62
　第３節　出土遺物の概要 …… 65
　　１．須恵器 …… 65
　　２．土師器 …… 66
　　３．土製品 …… 66
　　４．陶磁器 …… 68
　第４節　まとめ …… 68

挿図目次

第 1 図　浅柄Ⅲ遺跡の位置 …… 1
第 2 図　事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地 …… 2
第 3 図　浅柄Ⅲ遺跡の調査位置図 (S=1:5,000) …… 3
第 4 図　遺跡周辺の微地形分類図 (S=1:150,000)(林 1991 から転載) …… 5
第 5 図　浅柄Ⅲ遺跡と周辺の遺跡 (S=1:25,000) …… 7
第 6 図　浅柄Ⅲ遺跡 調査地区割り図 (S=1:1,000) …… 11
第 7 図　浅柄Ⅲ遺跡 試掘確認調査トレンチ配置図 (S=1:1,000) …… 12
第 8 図　浅柄Ⅲ遺跡 試掘確認調査トレンチ土層図 (S=1:80) …… 13
第 9 図　浅柄Ⅲ遺跡 調査区配置図 (S=1:300) …… 15
第 10 図　浅柄Ⅲ遺跡 土層図 1(S=1:80) …… 16
第 11 図　浅柄Ⅲ遺跡 土層図 2(S=1:80) …… 17
第 12 図　浅柄Ⅲ遺跡 第 1 遺構面検出状況 (平面図 S=1:100 土層図 S=1:40) …… 19
第 13 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 1 実測図 (S=1:60) …… 20
第 14 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 1 遺物出土状況 (S=1:40) …… 21
第 15 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 2 実測図 (S=1:60) …… 22
第 16 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 4 実測図 (S=1:60) …… 23
第 17 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 5 実測図 (S=1:60) …… 24
第 18 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 5 遺物出土状況 (S=1:40) …… 25
第 19 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 6 実測図 (S=1:60) …… 26
第 20 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 6 遺物出土状況 (S=1:40) …… 27
第 21 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 7 実測図 (S=1:40) …… 29
第 22 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 7 竈実測図 (S=1:20) …… 30
第 23 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 7 遺物出土状況 (S=1:40) …… 31
第 24 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 1・5・6・7、SD77・117・127、SK192、Pit87・225 出土遺物実測図 (S=1:3) …… 32
第 25 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 実測図 (S=1:60) …… 33
第 26 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 遺物出土状況 (S=1:40) …… 34
第 27 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 出土遺物実測図 1 (S=1:3,1:4) …… 36
第 28 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 出土遺物実測図 2 (S=1:4) …… 37
第 29 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 出土遺物実測図 3 (S=1:4) …… 38
第 30 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 出土遺物実測図 4 (S=1:4) …… 39
第 31 図　浅柄Ⅲ遺跡 SD77・127・200 実測図 (S=1:200,1:100) …… 41
第 32 図　浅柄Ⅲ遺跡 SD117・134・181・194、SK107・164・171・177・192 実測図 (S=1:60) …… 43
第 33 図　浅柄Ⅲ遺跡 SD248・249、SK55・169・224・270、Pit237 実測図 (S=1:40) …… 45
第 34 図　浅柄Ⅲ遺跡 掘立柱建物跡 1 実測図 (S=1:60) …… 47
第 35 図　浅柄Ⅲ遺跡 掘立柱建物跡 2 実測図 (S=1:60) …… 48

第 36 図　浅柄Ⅲ遺跡 掘立柱建物跡 3 実測図 (S=1:60) …… 48
第 37 図　浅柄Ⅲ遺跡 掘立柱建物跡 4 実測図 (S=1:60) …… 49
第 38 図　浅柄Ⅲ遺跡 掘立柱建物跡 5 実測図 (S=1:60) …… 49
第 39 図　浅柄Ⅲ遺跡 柵跡 1 ～ 4 実測図 (S=1:60) …… 50
第 40 図　浅柄Ⅲ遺跡 柵跡 5 ～ 8 実測図 (S=1:60) …… 52
第 41 図　浅柄Ⅲ遺跡 杭列実測図 (S=1:60) …… 53
第 42 図　浅柄Ⅲ遺跡 遺構外出土遺物・石出土状況 (S=1:300) …… 56
第 43 図　浅柄Ⅲ遺跡 遺構外出土遺物・石出土状況立面図 (S=1:80) …… 57
第 44 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 2(DT02) 出土遺物実測図 1(S=1:3) …… 57
第 45 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 2(DT02) 出土遺物実測図 2(S=1:4) …… 58
第 46 図　浅柄Ⅲ遺跡 包含層出土遺物実測図 1(S=1:3) …… 59
第 47 図　浅柄Ⅲ遺跡 包含層出土遺物実測図 2(S=1:4,1:3) …… 60
第 48 図　浅柄Ⅲ遺跡 遺構の変遷模式図 (S=1:600) …… 63
第 49 図　土製支脚型式分類案 (S=1:6)（岩橋 2003）より転載…… 67

表目次

第 1 表　5 世紀から 9 世紀前半の島根県海岸部の造り付け竈 …… 64
第 2 表　浅柄Ⅲ遺跡 出土遺物観察表（土器・土製品）…… 71
第 3 表　浅柄Ⅲ遺跡 出土遺物観察表（土製品）…… 75
第 4 表　浅柄Ⅲ遺跡 出土遺物観察表（鉄製品）…… 75
第 5 表　浅柄Ⅲ遺跡 出土遺物観察表（石製品）…… 75
第 6 表　浅柄Ⅲ遺跡 出土土器集計表 …… 75
第 7 表　浅柄Ⅲ遺跡 遺構一覧表 …… 76

本文写真目次

写真 1　浅柄Ⅲ遺跡発掘作業風景 …… 4
写真 2　浅柄Ⅲ遺跡の現地説明会風景 …… 4

写真目次

図版 1　遺跡周辺から北方向を望む
図版 1　上空から見た浅柄Ⅲ遺跡（東から）
図版 2　上空から見た浅柄Ⅲ遺跡（北から）
図版 2　上空から見た浅柄Ⅲ遺跡（北東から）
図版 3　浅柄Ⅲ遺跡調査前近景（北から）
図版 3　浅柄Ⅲ遺跡調査前近景（東から）
図版 4　調査区北壁土層（南 から）
図版 4　調査区南壁土層（北から）
図版 5　調査区東壁土層（西から）
図版 5　サブトレンチ 4 南壁土層（北西から）
図版 6　南側調査区完掘状況（東から）
図版 6　南側調査区完掘状況（南から）
図版 7　南側調査区完掘状況（北東から）
図版 7　北側調査区完掘状況（南西から）
図版 8　南側調査区完掘状況（北東から）
図版 8　南側調査区完掘状況（北東から）
図版 8　南側調査区完掘状況（東から）
図版 9　加工段 1 完掘状況（東から）
図版 9　加工段 5 完掘状況（東から）
図版 10　加工段 1 完掘状況（南から）
図版 10　加工段 2・4 完掘状況（東から）
図版 10　加工段 5・6 完掘状況（北東から）
図版 11　加工段 5 溝土層堆積状況（南から）
図版 11　加工段 6 遺物出土状況（東から）
図版 11　加工段 6 遺物出土状況（東から）
図版 12　加工段 7 炭化物検出状況（北東から）
図版 12　加工段 7 完掘状況（南東から）
図版 13　加工段 7 炭化物検出状況（東から）
図版 13　加工段 7Pit273 土層（北から）
図版 13　加工段 7 遺物出土状況（東から）
図版 14　加工段 7 竈検出状況（東から）
図版 14　加工段 7 竈完掘状況（北東から）
図版 14　加工段 7 竈完掘状況（東から）
図版 15　加工段 7 竈焚口横断土層（東から）
図版 15　加工段 7 竈縦断土層（北から）
図版 15　加工段 7 竈内横断土層（東から）
図版 16　加工段 7 焼土 2 土層（東から）
図版 16　土器溜 8 完掘状況（東から）
図版 16　土器溜 8 土層（東から）
図版 17　土器溜 8 土層（南から）
図版 17　土器溜 8 遺物出土状況（東から）
図版 17　土器溜 8 遺物出土状況（東から）
図版 18　土器溜 8 遺物出土状況（北西から）
図版 18　第 1 遺構面完掘状況（東から）
図版 18　土器溜 2 周辺の転石検出状況（北西から）
図版 19　SK55 完掘状況（西から）
図版 19　SK107 完掘状況（北から）
図版 19　SK171 石検出状況（西から）
図版 20　SK164 完掘状況（東から）
図版 20　SK169 完掘状況（西から）
図版 20　SK224 土層（南から）
図版 21　SK192 完掘状況（南から）
図版 21　SD134、SK192 完掘状況（南から）
図版 21　SD117・134・181 完掘状況（南東から）
図版 22　SK270 検出状況（東から）
図版 22　SD77 完掘状況（東から）
図版 22　SD77 完掘状況（南から）
図版 23　SD77 石検出状況（東から）
図版 23　SD77 石検出状況（東から）
図版 23　SD77 石検出状況（東から）
図版 24　SD77 南側土層（南から）
図版 24　SD127 土層（東から）
図版 24　SD248・249 土層（東から）
図版 25　杭列土層（東から）
図版 25　杭 7 土層（東から）
図版 25　杭 5 土層（東から）
図版 26　柵 7 完掘状況（南から）
図版 26　包含層出土遺物出土状況
図版 27　加工段 1･5 出土遺物（第 24 図）
図版 27　加工段 5 出土遺物（第 24 図）

図版 28　加工段 6、SD77・117・127、SK192、Pit87・225 出土遺物（第 24 図）
図版 28　土器溜 8(DT08) 出土遺物 1(第 27 図)
図版 29　土器溜 8(DT08) 出土遺物 2(第 27 図)
図版 29　土器溜 8(DT08) 出土遺物 3(第 28 図)
図版 30　土器溜 8(DT08) 出土遺物 4(第 28 図)
図版 30　土器溜 8(DT08) 出土遺物 5(第 28 図)
図版 31　土器溜 8(DT08) 出土遺物 6(第 29 図)
図版 31　土器溜 8(DT08) 出土遺物 7(第 29 図)
図版 32　土器溜 8(DT08) 出土遺物 8(第 30 図)
図版 32　土器溜 8(DT08) 出土遺物 9(第 30 図)
図版 33　土器溜 2(DT02) 出土遺物 1(第 44 図)
図版 33　土器溜 2(DT02) 出土遺物 2(第 45 図)
図版 34　土器溜 2(DT02) 出土遺物 3(第 45 図)
図版 34　土器溜 2(DT02) 出土遺物 4(第 45 図)
図版 35　包含層出土遺物 1（第 46 図）
図版 35　包含層出土遺物 2（第 46 図）
図版 36　包含層出土遺物 3（第 46 図）
図版 36　包含層出土遺物 4（第 47 図）
図版 37　包含層出土遺物 5（第 47 図）
図版 37　包含層出土遺物 6（第 47 図）
図版 37　包含層出土遺物 7（第 47 図）
図版 38　加工段 5 出土遺物
図版 38　加工段 7 出土遺物
図版 38　土器溜 8(DT08) 出土遺物
図版 39　土器溜 2(DT02) 出土遺物
図版 39　包含層出土遺物 8
図版 40　包含層出土遺物 9
図版 40　加工段 7 竈構築材

第１章　調査の経過

第１節　調査にいたる経緯と経過

１．事業計画の概要

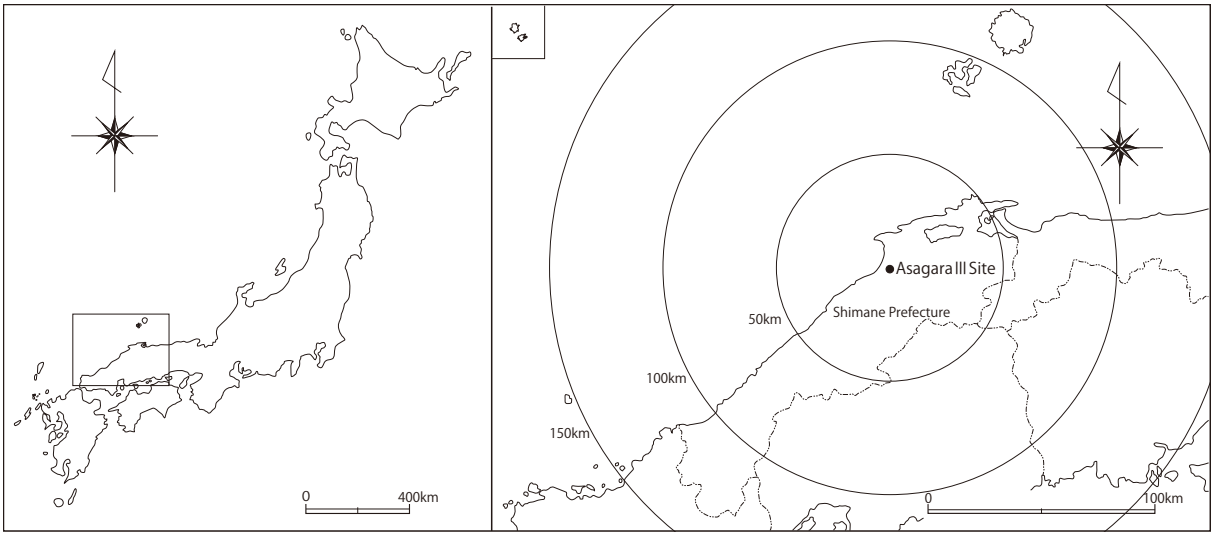
一般国道９号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長距離 750㎞の、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。近年は都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となってきており、その様相は島根県下でも例外ではない。出雲市周辺においては、通過車両と生活車両が混在し、県中西部方面から出雲市中心部への流入部付近で交通混雑が発生しており、交通事故の多発や地域経済活動への悪影響が懸念されている。

こうした状況のもと、現道の渋滞対策や交通危険個所を解消し、一般国道のバイパスとして高速道路の連続性をできるだけ早く確保するために、国土交通省により出雲湖陵道路の事業化が図られ、平成 18 年３月に出雲仁摩線として都市計画決定された。一般国道９号（出雲湖陵道路）は、出雲市知井宮町の山陰自動車道出雲インターチェンジを起点として、同市湖陵町三部の湖陵インターチェンジ（仮称）までを結ぶ延長 4.4㎞の自動車専用道路として、平成 20 年度に事業が着手された。

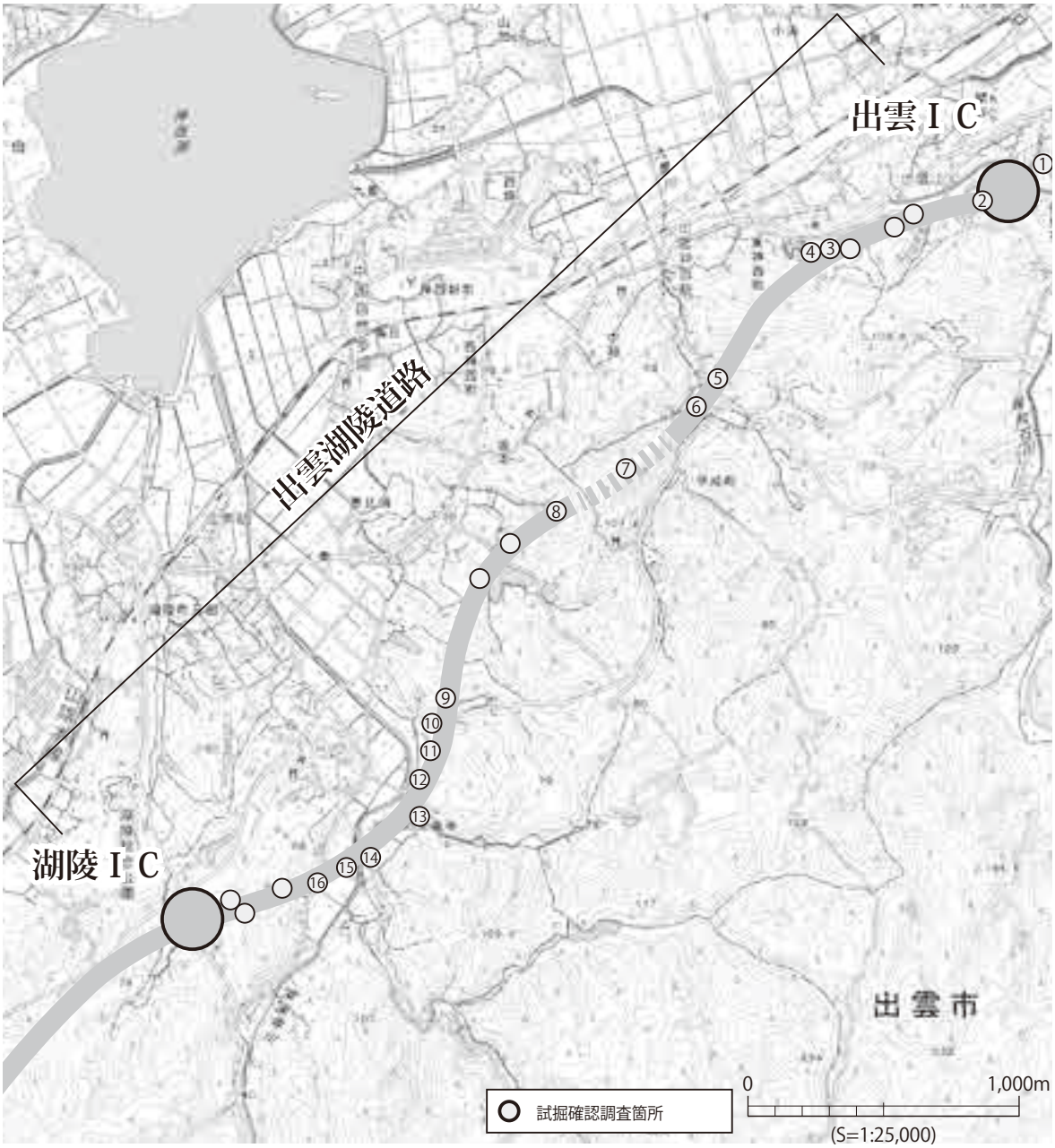
２．埋蔵文化財保護部局への照会と調整

計画策定の段階での重要遺跡の存否照会によって、尼子十旗に数えられる神西城跡がルート上にあることが判明した。島根県教育委員会と国土交通省は協議を重ね、トンネル工法に変更することで保存することが決まった。事業化に際して、国土交通省から島根県教育委員会に対して事業予定地内における埋蔵文化財の有無について照会が行われた。これを受けて島根県教育委員会では出雲市教育委員会の協力のもと、平成 22 年３月に分布調査を実施し、周知の遺跡に加えて試掘確認調査を要する要注意箇所を確認し、発掘調査及び試掘確認調査が必要な旨を平成 22 年５月 25 日付け島教文財第 233 号で回答した。その後も工事用道路や調整池整備等の付帯工事に伴う分布調査を数次にわたって行っている。

島根県教育委員会は国土交通省と協議を重ね、分布調査の結果を踏まえた試掘確認調査を平成



第１図　浅柄Ⅲ遺跡の位置



No.	遺跡名	所在地	種別	調査
1	浅柄Ⅲ遺跡	出雲市知井宮町	集落跡	平成 28 年度
2	柳ノ内Ⅱ遺跡	出雲市知井宮町	古墳	ー (平成 24 年度試掘確認調査)
3	玉泉寺裏遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26 年度
4	九景川遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26 年度
5	中上Ⅱ遺跡	出雲市東神西町	集落跡	
6	麓Ⅱ遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26・27 年度
7	神西城跡	出雲市東神西町	城跡	ー (工法変更)
8	坂本谷遺跡	出雲市西神西町	集落跡	平成 27 年度
9	のの子谷横穴墓群	出雲市湖陵町	古墳・横穴墓	平成 27 年度
10	板高池遺跡	出雲市湖陵町	集落跡	ー (平成 26 年度試掘確認調査)
11	常楽寺柿木田古墳群	出雲市湖陵町	古墳	(一部工法変更)　平成 29 年度
12	柿木田家下遺跡	出雲市湖陵町	散布地	
13	奥ノ谷遺跡	出雲市湖陵町	散布地	ー (平成 29 年度試掘確認調査)
14	御領田遺跡	出雲市湖陵町	集落跡・貝塚	
15	大河原遺跡	出雲市湖陵町	散布地	ー (平成 27 年度試掘確認調査)
16	京田遺跡	出雲市湖陵町	集落跡	平成 27 年度から

第 2 図　事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地

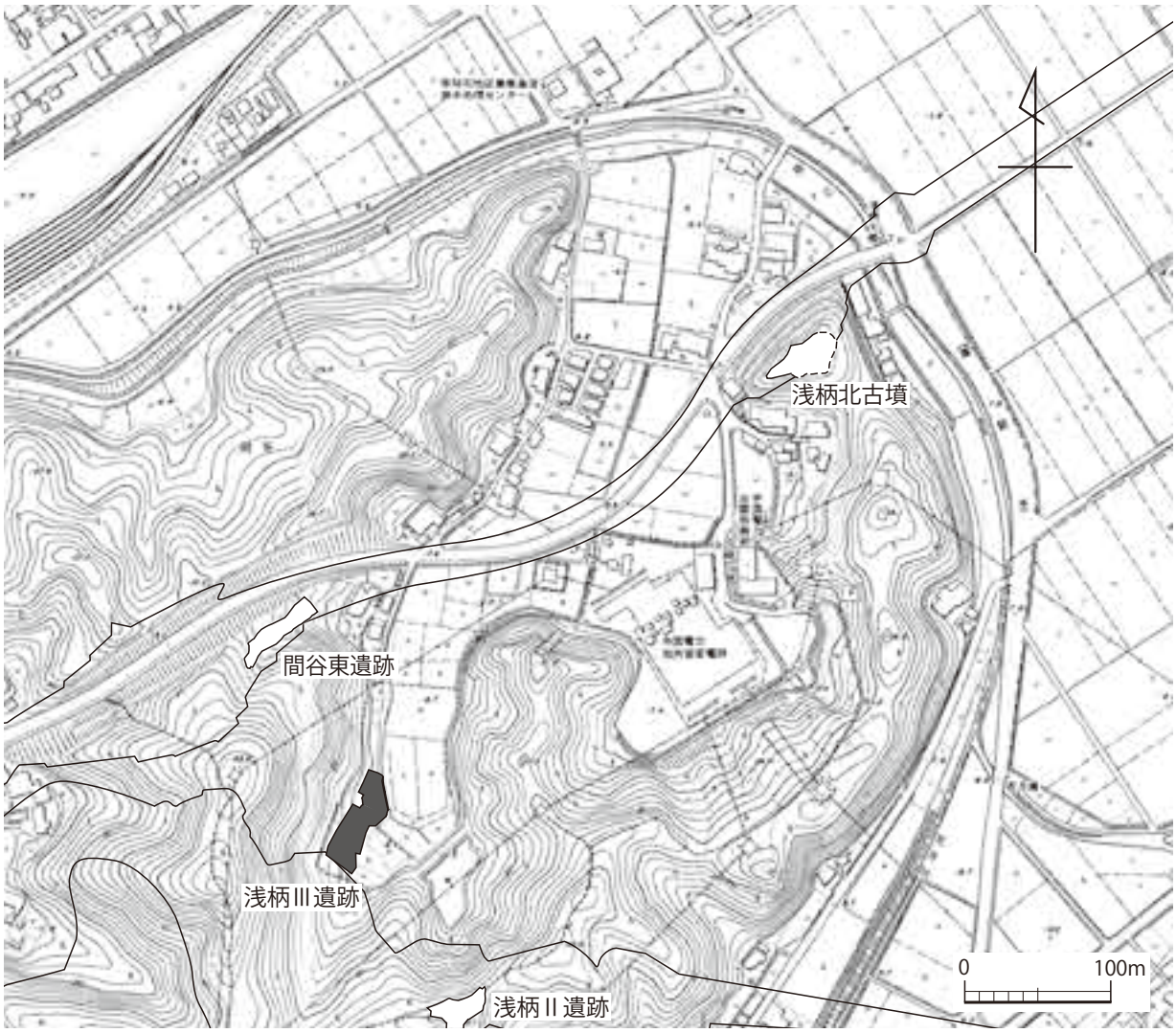
22 年度から国庫補助事業により実施し、以後、予定地内の各埋蔵文化財の調査、取り扱いについて具体的な検討が行われた。浅柄Ⅲ遺跡は平成 27 年 10 ～ 11 月及び平成 28 年 4 ～ 5 月、10 月に試掘確認調査を実施し、本発掘調査が必要な範囲等を定めている。

3．法的手続き

浅柄Ⅲ遺跡は平成 28 年 3 月 4 日付け国中整松調設第 78 号で文化財保護法第 94 条第 1 項の規定による通知が国土交通省から島根県教育委員会教育長あて提出された。それに対して島根県教育委員会は、試掘確認調査の結果を踏まえ、平成 28 年 3 月 10 日付け島教文財第 120 号の 103 で記録作成のための発掘調査の実施を勧告している。

国土交通省及び西日本高速道路株式会社から委託を受け、埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなった。文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による通知は、平成 28 年 6 月 30 日付け島教埋第 200 号により埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あて提出した。

現地調査終了後、遺跡の取扱は記録保存とすることとなり、平成 28 年 12 月 22 日付け島教文財第 793 号により島根県教育委員会教育長から松江国道事務所長あて終了報告を提出した。



第 3 図　浅柄Ⅲ遺跡の調査位置図 (S=1:5,000)

第 2 節　発掘作業と整理作業の経過

発掘作業の概要　調査対象地は、調整池造成予定地である。出雲ＩＣの北東側に位置し、出雲平野の南側丘陵東斜面に立地する。丘陵上方には平坦面が続き、遺跡の広がりが予想される。

浅柄Ⅲ遺跡の発掘作業は、平成 28(2016) 年 7 月 14 日から 12 月 16 日にかけて実施した。調査区は丘陵緩斜面に位置し、調査前は果樹が植えられていた畑地であった。調査廃土が搬出できず、場内処理を行うため、調査区を 2 分割し、南側から調査を行った後、埋め戻し、続いて北側の調査を行った。試掘確認結果から表土層等を重機により除去した後、7 月 28 日より人力による遺物包含層掘削を開始した。包含層からは古代の須恵器や土師器が出土し、一部まとまって出土する箇所も存在した。場所によっては、上方から転落したと考えられる 1 m近い岩が集中する箇所もあった。包含層を除去すると、地山である黄褐色土上から加工段や溝、柱穴等が検出された。確認した遺構については半裁、写真撮影、実測を行った。

調査区の南側は 10 月 20 日に調査が終了した後、直ちに埋め戻しを開始した。10 月 21 日には鳥取県中部を震源とする地震が起こり、出雲市でも震度 4 を観測した。10 月 24 日からは北側調査区の重機による表土掘削を開始し、10 月 27 日から人力による包含層掘削を行った。調査終盤には加工段 7 から造り付け竈が検出され、出雲平野周辺で初の発見となった。12 月 5 日には空中写真撮影を行い、残りの図面作成を継続し、12 月 16 日にはすべての作業を終了した。12 月 26 日には国土交通省及び西日本高速道路株式会社へ現地を引き渡した。

現場作業と並行し、出土遺物の水洗、注記を行った。調査中、9 月 28 日に大橋泰夫氏により、遺跡の時期や性格についての調査指導を受けた。10 月 15 日には現地説明会を行い、晴天に恵まれ約 60 名の参加を得た。また、12 月 8 日には花谷浩氏、坂本豊治氏、須賀照隆氏、幡中光輔氏の現地視察を受けた。平成 29 年度には 6 月 5 日に中村唯史氏から石器石材について、9 月 20 日に石丸恵利子氏から動物遺存体について指導を受けた。

写真 1　浅柄Ⅲ遺跡発掘作業風景

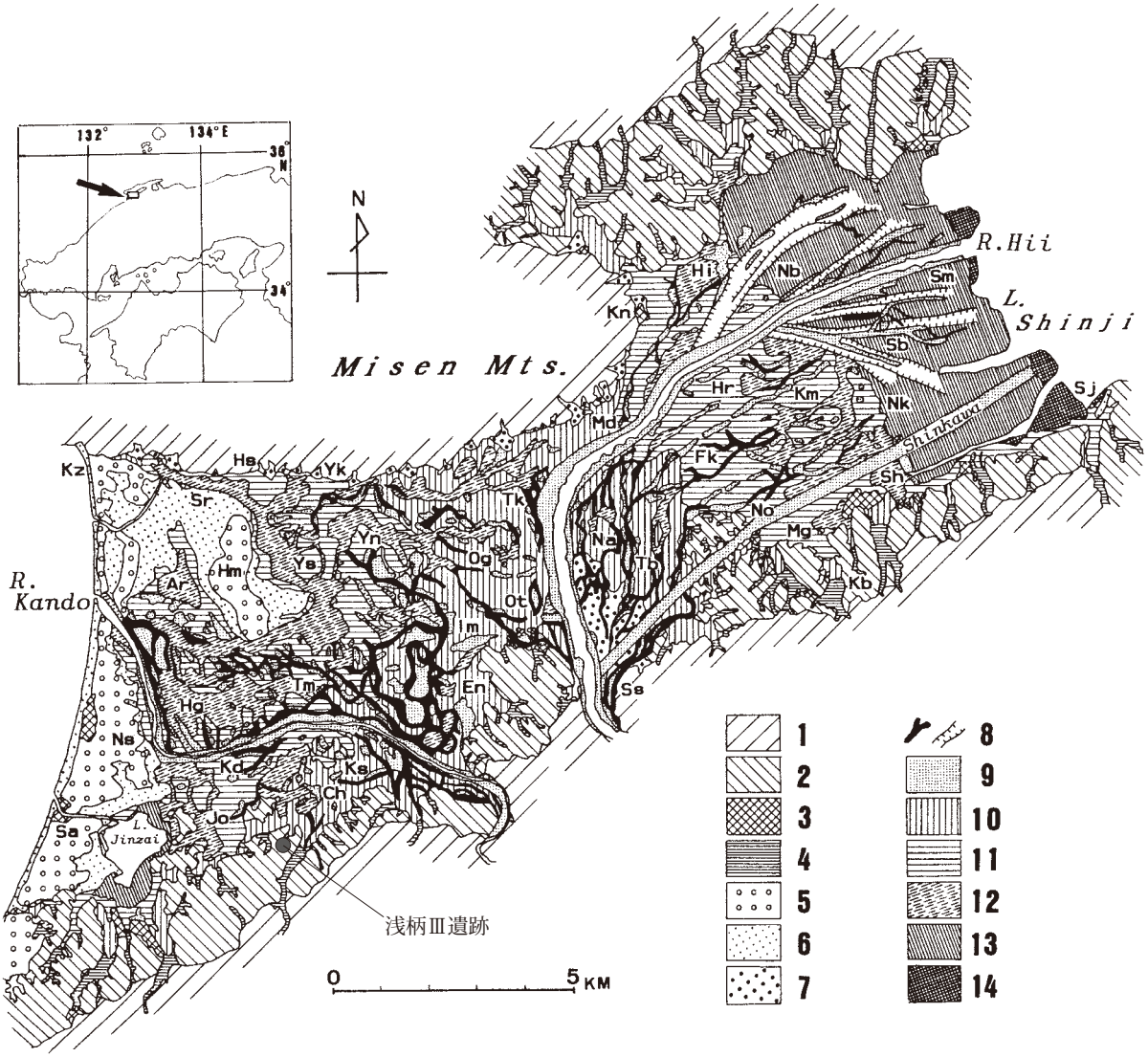
写真 2　浅柄Ⅲ遺跡の現地説明会風景

整理等作業　遺物の水洗・注記・接合作業は現地調査に並行して実施し、冬期は埋蔵文化財調査センターにて前述した作業を継続し、続いて復元・実測等の整理作業を行った。平成 29 年度に浅柄Ⅲ遺跡の出土品を通覧して非掲載品についても分類し、遺跡の全体像が把握できるよう計量を行った。現地調査終了後に整理した図面・写真等の記録類についても、出土品と併せて総合的な整理検討を行い、遺構・遺物のトレース、写真撮影、割付、原稿執筆を行った。画像処理・図版作成・編集等には Adobe 社のソフトを使用した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

本書で報告する浅柄Ⅲ遺跡は出雲平野の南西、出雲市知井宮町に分布し、第４図に示すとおり、丘陵地から谷底平野に立地する。以下、周辺の地理的環境の変遷を概観しておきたい。縄文前期の海進期は、最高海水準が現在より３～４ｍ高く、出雲平野には島根半島を島状に分離する内湾が形成されていたと考えられている。麩Ⅱ遺跡や京田遺跡等で活動が認められる縄文時代後期には海退がはじまり、縄文晩期から弥生時代には、海退によって形成された標高５ｍ以上の三角州Ⅰ面により半島は陸続きとなり、この周辺一帯には後の『出雲国風土記』に「神門水海」（入海）と記載される潟湖が誕生する。その後より低位の三角州Ⅱ面が湾に向かって成長して平野は拡大し、近



1. 山地，2. 丘陵地，3. 段丘，4. 谷底平野，5. 砂丘地，6. 砂州，7. 扇状地・沖積錐，8. 旧河道，9. 微高地，10. 三角州Ⅰ面，11. 三角州Ⅱ面，12. 低湿地，13. 埋立・干拓地Ⅰ，14. 埋立・干拓地Ⅱ
Sm: 島村，Nb: 灘分，Hi: 平田，Kn: 国富，Md: 美談，Sj: 宍道，Sh: 荘原，Nk: 中洲，Sb: 三分市，Km: 黒目，Hr: 原鹿，Fk: 福富，No: 直江，Mg: 三絡，Kb: 神庭，Na: 名島，Tb: 富村，Ss: 出西，Ot: 大津，Og: 荻杼，Tk: 武志，Im: 今市，En: 塩冶，Yn: 矢野，Ys: 八島，Tm: 高松，Ks: 古志，Ch: 知井宮，Kd: 神門，Jo: 神西沖，Hg: 東園，Ns: 西園，Ar: 荒木，Kz: 杵築，Sr: 修理免，Hm: 浜山，Hs: 菱根，Yk: 遙堪，Sa: 差海

第４図　遺跡周辺の微地形分類図 (S=1:150,000)(林 1991 から転載)

世初頭には入海は現在の神西湖にその面影を残す程度にまで埋積されたと考えられている。

第２節　歴史的環境

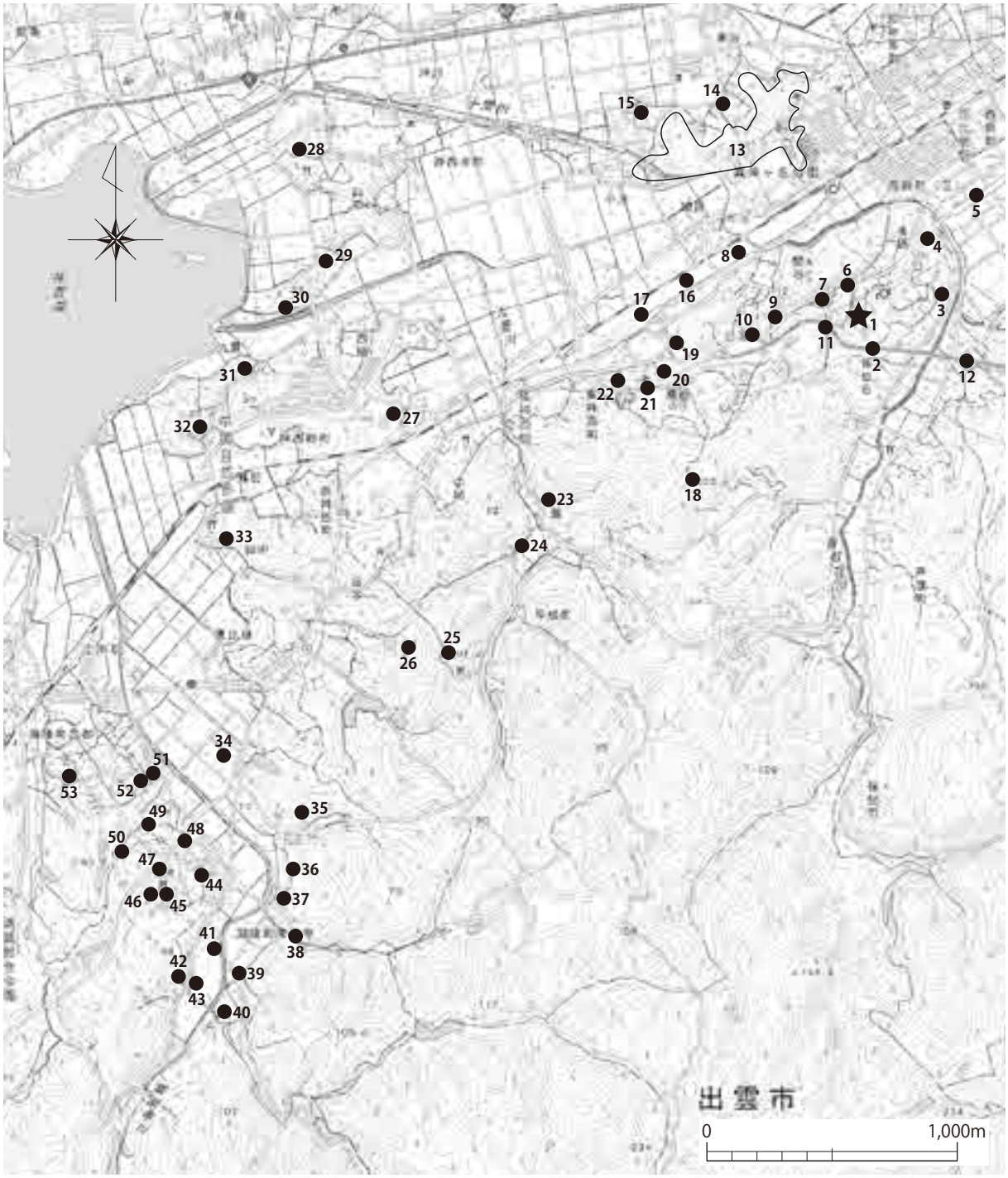
当地域の歴史的展開においては、古来より良好な港湾として利用され、常に外界との接点であった入海地帯と、南から派生する丘陵及びその谷に形成された谷底平野の結節点という地理的特性が大きく作用していたことは論を俟たない。以下、こうした観点から当地の歴史的展開について概観しておきたい。

縄文時代　旧石器時代の遺跡は出雲平野ではまだ確認されていない。縄文時代早期になると菱根遺跡や上長浜貝塚等の遺跡が確認されるようになる (出雲市 1996)。神西湖南岸の御領田遺跡では縁帯文期の方形竪穴住居が検出されている (湖陵町 1994)。当該期の住居址は、出雲山間部では近年のダム関連の調査によって明らかにされつつあるが、平野部では稀有な事例に属する。京田遺跡や麓Ⅱ遺跡では住居址は見つかっていないが該期の遺物がまとまって出土しており、周辺域で発見例が増加する可能性がある。縄文時代晩期になると、出雲平野南部の小支谷では遺構そのものは検出されていないものの、土器や打製石斧等該期の遺物が多数確認されるようになり、この頃出雲平野縁辺部に初期農耕集落が成立していたことを物語る。代表的な事例としては三田谷Ⅰ遺跡 (島根県 2000)、保知石遺跡 (島根県 2005) がある。

弥生時代　出雲平野における弥生時代前期の遺跡としては、原山遺跡、矢野遺跡、三田谷Ⅰ遺跡等がある。遺跡の性格が判明する事例は乏しいが、原山遺跡では前期の配石墓が確認されており、出雲部における砂丘立地の弥生初期墓制として注目される (村上・川原 1979)。当地域周辺では九景川遺跡や保知石遺跡等で該期の遺物が散発的に検出されてはいるものの、集落全体の様相は不明と言わざるを得ない。この地域で遺跡が増加するのは弥生時代中期中葉以降であり、著名な例としては古志本郷遺跡、下古志遺跡、田畑遺跡、知井宮多門院遺跡等があり、当地で古墳時代前期まで継続的に営まれる大規模集落は当該期に開始される例が多い (藤永 2005・米田 2006)。弥生時代後期に入ると出雲平野中央部・北部では姫原西遺跡、山持遺跡、青木遺跡等大規模な遺跡が増加する傾向にある。入海南岸地域周辺では明確な集落は確認できていないものの、調査された遺跡の大半からは当該期の遺物がそれぞれまとまって出土していることから、後期には集落が増加傾向にあったことはほぼ間違いないことと思われる。墳墓は玉泉寺裏遺跡で弥生時代終末期から古墳時代初頭の木棺墓が若干検出されているのみであり、出雲平野中央部・北部にみられる四隅突出型墳丘墓は現在のところ確認できていない。

古墳時代　出雲平野の遺跡は弥生時代中期中葉以降順調な発展を続けてきたが、こうした様相が大きな変化を見せるのが古墳時代前期段階である。従来から指摘されているとおり、当地域においては西谷９号墓に後続する前期前半の有力首長墓を現状では確認できない状況にある (渡邊 1986)。９号墓に隣接する７号墳は近年の確認調査で四隅を削り出す特異な構造が注目されたが (出雲市 2006)、規模的には９号墓と比較すると遥かに見劣りし、かつ築造時期も出土土器から前期後葉まで下る可能性が高い。その他の前期古墳としては、山地古墳、大寺１号墳、浅柄Ⅱ古墳、権現山古墳等が知られるが、時期不明の権現山古墳を除き、いずれも前期後葉に下るものである。

一方、集落遺跡は、従前は古墳時代前期になると減少すると理解されていたが、古志本郷遺跡や



1. 浅柄Ⅲ遺跡　2. 浅柄Ⅱ遺跡　3. 浅柄古墳　4. 浅柄北古墳　5. 浅柄遺跡　6. 間谷東遺跡　7. 間谷東古墳　8. 間谷西遺跡　9. 間谷西Ⅱ遺跡　10. 間谷西古墳群　11. 柳ノ内Ⅰ遺跡　12. 保知石遺跡　13. 神門横穴墓群　14. 東谷Ⅰ遺跡　15. 東谷Ⅱ遺跡　16. 古垣内遺跡　17. 丁ノ内古墳　18. 北光寺古墳　19. 浜井場古墳群　20. 御崎谷遺跡　21. 玉泉寺裏遺跡　22. 九景川遺跡　23. 中上Ⅱ遺跡　24. 麓Ⅱ遺跡　25. 神西城跡　26. 坂本谷遺跡　27. 神待山横穴墓群　28. 佐伯神社古墳　29. 山地古墳　30. 湖東屋山横穴墓群　31. 正久寺横穴墓群　32. 九景横穴墓群　33. 田中谷貝塚　34. 三部竹崎遺跡　35. のの子谷横穴墓群　36. 常楽寺柿木田古墳群　37. 柿木田家下遺跡　38. 奥ノ谷遺跡　39. 御領田遺跡　40. 滝ノ尻遺跡　41. 大河内遺跡　42. 産の岩古墳　43. 京田遺跡　44. 常楽寺遺跡　45. 安子神社横穴墓群　46. 高丸城跡　47. 西蓮寺山古墳群　48. 庭反Ⅰ遺跡・庭反Ⅱ遺跡　49. 雲部Ⅰ遺跡・雲部Ⅱ遺跡　50. 雲部古墳群　51. 森の前古墳群　52. 竹崎遺跡　53. 倉道古墳群

第５図　浅柄Ⅲ遺跡と周辺の遺跡 (S=1:25,000)

中野清水遺跡のように前期中葉頃まで継続的に集落が営まれる事例も存在し、墳墓の動向とは単純にはリンクしないようである (松山 2002)。しかし、小谷式後半期には集落数が減少する傾向は認められるようであり、いかなる要因に基づくものか、その背景が注目される。

古墳時代前期末から中期にかけても出雲平野の様相は今一つ不明確だが、当地域周辺ではいくつか重要な様相が確認できる。一つは、山地古墳、浅柄Ⅱ古墳、間谷東古墳のような礫床を備える古墳の出現である。山地古墳は小規模な円墳でありながら筒型銅器や銅鏡を備える、当地域で豊富な副葬品を有する古墳として位置づけられる。さらに間谷東古墳は奥才型木棺 (鹿島町 2002) と称される棺内礫敷組合式木棺の埋葬施設を備える中期初頭の古墳である。時期は不明ながら神待山 1 号墳も同様な主体部構造の可能性がある (川原 1992)。同タイプの埋葬施設は北部九州から北近畿にかけて分布し、当時の海浜部に立地する中小古墳被葬者層に広域的な地域間交渉が存在していことを物語る。こうした特異な古墳群の出現は対外交渉結節点としての当地域の地理的特性を雄弁に物語るものと言えよう。

古墳時代中期中葉には大形前方後円墳である北光寺古墳が築造される。当古墳は出土遺物や石棺残片から中期前半から中葉に編年され、全長 64m と同時期としては出雲最大の古墳であり、その突発的な出現の背景の解明は出雲平野の地域史を再構築する上で大きな課題である (島根県古代文化センター 2007)。

古墳時代後期になると、出雲平野では大念寺古墳や上塩冶築山古墳等、全国的にも著名な巨石墳が相次いで築かれ、山代二子塚古墳、山代方墳に代表される出雲東部勢力と拮抗関係にあった出雲西部の大首長の奥津城と理解されている (渡邊 1986)。当地域にほど近い神戸川左岸地域でも豊富な副葬品が出土した前方後円墳である妙蓮寺山古墳、圭頭大刀が出土し精美な切石造りの横穴式石室を有する放れ山古墳等が点在する神門古墳群が存在し、大念寺古墳・上塩冶築山古墳等の大首長層を補佐する第２クラスの首長墓域として位置づけられている (大谷 1997)。こうした巨石墳の背景には当然平野の開発の進展が想定されようが、今のところ当該期における大規模な集落は出雲平野では確認できず、白枝本郷遺跡等でその断片を知り得るのみである (角田 2006)。こうした大形古墳の築造が停止されるのとほぼ期を同じくして平野南部の丘陵には上塩冶横穴墓群や神門横穴墓群等の大規模な横穴墓群が営まれるようになる。

古代　浅柄Ⅲ遺跡の位置する神門水海南岸域は奈良時代の神門郡滑狭郷に属す。出雲平野における官衙関連遺跡は近年の発掘調査の進展によりその解明が飛躍的に進み、神門郡家は出雲市古志本郷遺跡 (島根県 2003) が、出雲郡家の関連施設として後谷Ｖ遺跡 (斐川町 1996) が比定されており、その他に神門郡内では天神遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、矢野遺跡、古志遺跡等が官衙関連遺跡である可能性が指摘されている。また、九景川遺跡 (島根県 2008) では、奈良時代から平安時代初期の建物跡や遺物が多数確認されている。なかでも桁行 14m を測る大形の掘立柱建物跡や漆付着土器等は、その性格が注目されるところである。さらに、浅柄遺跡 (出雲市 2000) には７～８世紀にかけての多数の掘立柱建物跡が検出されている。両遺跡が所在する出雲平野南縁部には古代山陰道が通じていたと推定されることから、その関係の解明も今後の調査研究の課題の一つである。

官衙遺跡以外では、瓦出土遺跡として神門寺境内廃寺、長者原廃寺が古くから知られているほか、墳墓としては西日本では稀な蕨手刀が出土した小坂古墳石櫃、方形マウンドを備え石櫃が出土した光明寺３号墓、石製骨蔵器が使用されていた菅沢古墓や朝山古墓等が知られている (出雲市

2000)。

中世　神門水海周辺の中世の遺跡としては、冒頭に述べた上長浜貝塚が特筆される。中世の貝塚としては全国屈指の規模を備え、土錘や鉄製釣針等多数の漁撈具の出土から専業的な漁撈集団の存在が推定される。上長浜貝塚の他にも神門水海周辺では九景川遺跡をはじめ当該期に属する小規模な貝塚が幾つか知られており、その成立要因の一つに当該期における神門水海の拡大といった自然環境変化の要因も今後検討課題として俎上にのせる必要があろう。

出雲平野において括目すべきものとしては蔵小路西遺跡で検出された居館跡が挙げられる。これは一町四方の大溝に囲まれた中に多数の建物を配置する方形居館跡で、出土した陶磁器類から 12 世紀後半から 15 世紀にかけてのものと考えられ、朝山氏または塩冶氏の居館である可能性が指摘されている (島根県 1999a)。室町時代から戦国時代にかけては山城も多数築かれるようになる。神門水海南岸の代表的な山城としては神西氏代々の居城であり尼子十旗に数えられた神西城跡が挙げられ、最近の分布調査に加えて、麓Ⅱ遺跡や坂本谷遺跡の調査では丘陵斜面において防御施設と考えられる柵列状の遺構を確認しており、従前の推定範囲より遥かに広域な縄張りを有する山城であることが明らかになりつつある。また、坂本谷遺跡では 11 世紀から 14 世紀にかけての建物跡を多数検出し、建物規模が小さく遺物もほとんど伴わない小規模な集落遺跡と考えられる麓Ⅱ遺跡の様相と異なる点が注目される。

そのほかの中世集落としては、ミニチュア五輪塔が出土した渡橋沖遺跡 (島根県 1999b)、鍛冶炉等が検出された築山遺跡 (出雲市 2007) 等が挙げられる。墳墓例としては、青磁の優品が出土した荻杼古墓 (近藤 1969) があり、当該期の木棺墓は余小路遺跡や姫原西遺跡、蔵小路西遺跡等で多数確認されている。

【参考文献】

近藤　正 1969「出雲市荻杼発見の骨蔵器について」『考古学雑誌』第 54 巻３号

村上　勇・川原和人 1979「出雲・原山遺跡の再検討」『島根県立博物館調査報告』第２冊

渡邊貞幸 1986「古代出雲の栄光と挫折」『王権の争奪』集英社

林　正久 1991「出雲平野の地形発達」『地理科学』第 64 巻第１号

川原和人 1992「出雲市・神待山２号墳出土の備前壷」『松江考古』第８号

湖陵町教育委員会 1994『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書　御領田遺跡　三部竹崎遺跡』

出雲市教育委員会 1996『上長浜貝塚』

斐川町教育委員会 1996『後谷Ｖ遺跡』

大谷晃二 1997「出雲の大首長」『古代出雲文化展（図録)』朝日新聞社・島根県教育委員会

島根県教育委員会 1999a『蔵小路西遺跡　一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告２』

島根県教育委員会 1999b『渡橋沖遺跡』

出雲市教育委員会 2000『浅柄遺跡』

出雲市教育委員会 2000『光明寺３号墓・４号墳』

島根県教育委員会 2000『三田谷Ⅰ遺跡 vol.3』

鹿島町教育委員会 2002『奥才古墳群第８支群』

松山智弘 2002「古志本郷遺跡の調査について」『八雲立つ風土記の丘館報』№ 170

島根県教育委員会 2003『古志本郷遺跡Ⅴ　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告ⅩⅥ』

島根県教育委員会 2005『畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡』

藤永照隆 2005「遺跡の分布からみた出雲平野の古地理再考」『八雲立つ風土記の丘館報』№ 182

出雲市教育委員会 2006『西谷墳墓群 - 平成 14 ～ 16 年度発掘調査報告書 -』

角田徳幸 2006「白枝本郷遺跡の調査」『中野清水遺跡 (3)・白枝本郷遺跡 一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７』

米田美江子 2006「遺跡分布から見た出雲平野の形成史」『島根考古学会誌』第 23 集

出雲市教育委員会 2007『築山遺跡Ⅱ』

島根県古代文化センター 2007『北光寺古墳発掘調査報告』

出雲市教育委員会 2008『玉泉寺裏遺跡・浜井場 4 号墳・間谷東古墳　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』

島根県教育委員会 2008『九景川遺跡　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』

島根県教育委員会 2009『御崎谷遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳・間谷西Ⅱ遺跡・間谷西古墳群　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』

島根県古代文化センター 2015『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』

第 3 章　浅柄Ⅲ遺跡の調査成果

第 1 節　浅柄Ⅲ遺跡の概要

1．発掘調査区の設定

浅柄Ⅲ遺跡は出雲市知井宮町浅柄に所在し、出雲平野の南側丘陵の小さい谷あいの標高 8 ～ 12m に位置する。丘陵裾部と水田との境界付近の東向き緩斜面について調査を実施した。

本発掘調査の対象は、平成 27 年度と平成 28 年度に実施した試掘確認調査の結果に基づいて決定した。試掘確認調査は平成 27 年度に 27T1 ～ 27T10 を、平成 28 年度に 28T1 ～ 28T14 の計 24 か所を実施している。

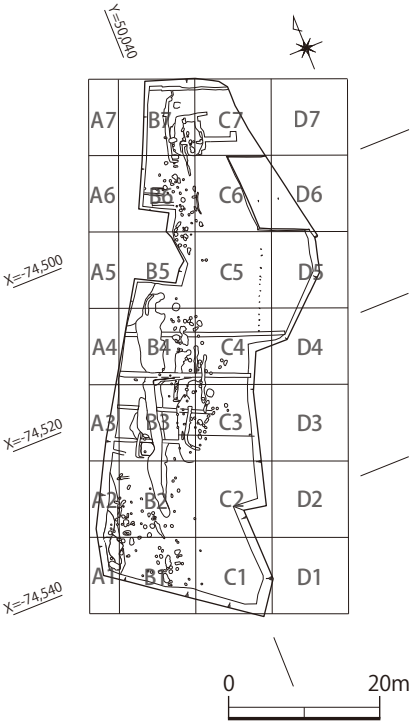
平成 27 年度　27T5 では地表下 0.15 ～ 0.4m から厚さ 20 ～ 50㎝の包含層を、地表下 0.4 ～ 0.8m から地山を検出し、出土した須恵器や土師器片から古代から中世の集落跡の存在が推定された。27T7 では地表下 0.6m から厚さ 30 ～ 70㎝の包含層を確認し、その南側の 27T8 では地表下 0.7 ～ 0.8m から厚さ 60㎝の包含層を確認した。特に 27T4 や 27T7 では遺物の出土量が多かった。27T9 と 27T10 では 1 ～ 1.2m の造成土や黒色土が水平堆積し、遺物は少量出土するが、下層は水性層と考えられる灰色粘土層が検出され、遺構は確認できなかった。結果、開発予定地の南西部分の丘陵裾部に遺物が集中していることが判明した。

平成 28 年度　平成 27 年度に試掘確認調査ができなかった丘陵部北側及び水田部の調査を実施した。結果、丘陵北側では、削平部分が多く、遺構や遺物が検出できず、前年度に遺物等が集中的に出土した場所に近い範囲からのみ遺構や加工段を検出した。28T7 では地表下 0.5 ～ 1.1 mから厚さ 60㎝の包含層を、28T10 では地表下 0.2 ～ 0.5m から厚さ 70㎝ほどの包含層を検出した。水田部の 28T12 ～ T14 では、地表下 0.8 ～ 1.1m から青灰色粘土層を確認し、遺物も出土しなかった。

各年度の試掘確認調査によって当該区域において古代から中世にかけての加工段や遺物包含層が確認され、事業地内における発掘調査が必要な範囲が定められた。

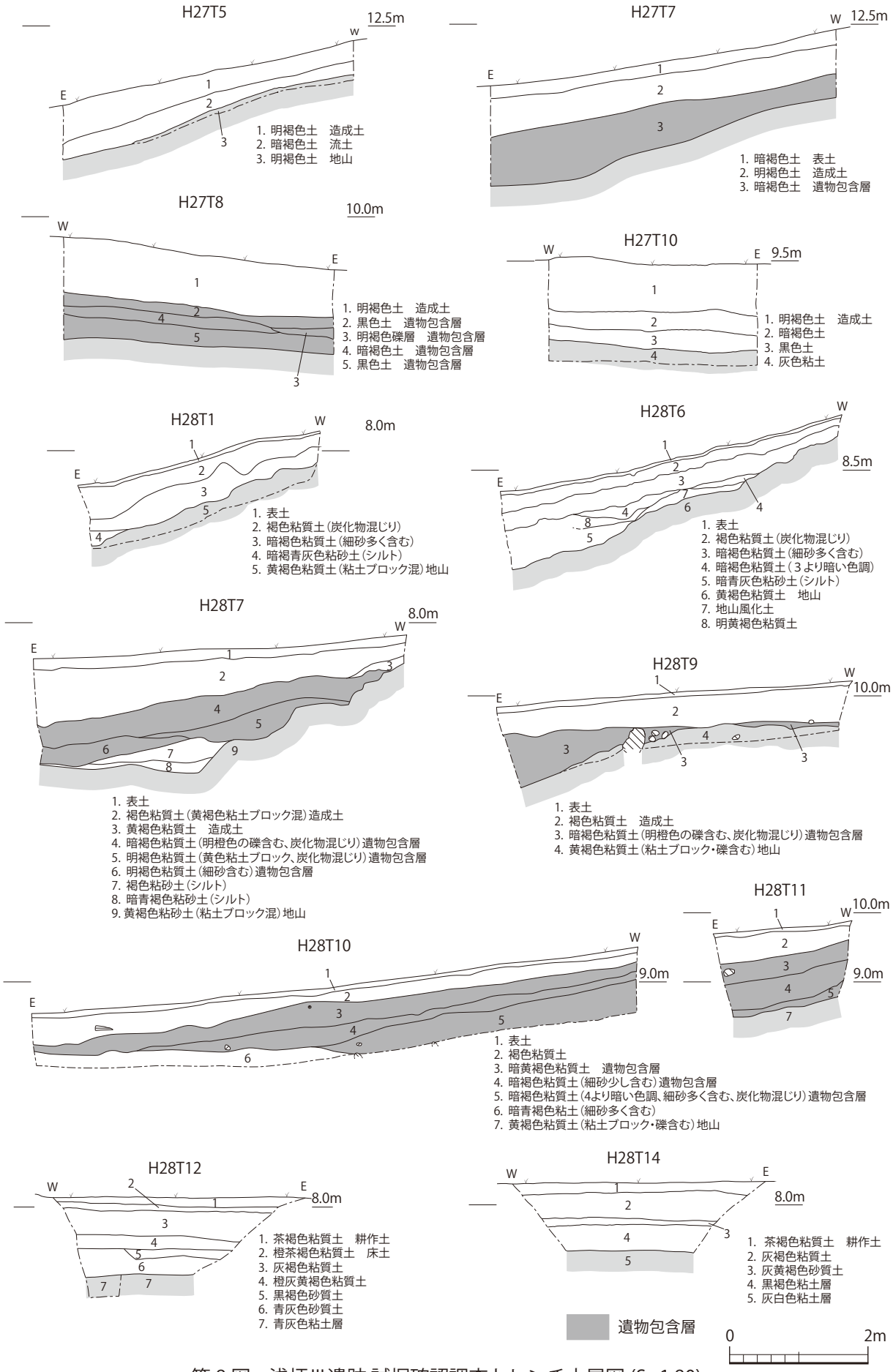
2．調査地区割りの設定

調査にあたり、重機掘削の後、調査区の長軸の中央付近を基準に、10m 四方のグリッドを設定した。北に向けアラビア数字順、東に向けアルファベット順に呼称した。それぞれの区画は各交点の南西端をもってグリッド名称とし、遺構等に伴わない遺物はグリッドで取り上げを行った。



第 6 図　浅柄III遺跡 調査地区割り図 (S=1:1,000)

第７図　浅柄Ⅲ遺跡 試掘確認調査トレンチ配置図 (S=1:1,000)



第 8 図　浅柄Ⅲ遺跡 試掘確認調査トレンチ土層図 (S=1:80)

第２節　浅柄Ⅲ遺跡の調査

１．調査方法

調査前の現地の状況は、丘陵緩斜面を利用した畑地と果樹園として造成されていた平坦地であった。試掘確認調査の結果に基づいて、包含層や遺構面までバックフォーを用いて表土及び造成土を取り除く必要があった。

重機掘削は、バケットに平爪を装着して、少しずつ漉き取るようにして面的に掘り下げた。土層観察を行いながら、包含層あるいは遺構面まで若干余裕を持たせたところで掘削を停止した。その後はベルトコンベアーを設置し、スコップ・ジョレンを用いた人力による掘削を行った。

遺物包含層についてはスコップを用いて人力で掘り下げたが、遺物が集中する箇所については移植ゴテ・草削りにより掘り下げた。出土状況の有意性が低いものは、取り上げに際してはグリッド名と層位の記録のみを行った。遺構検出は、ジョレンにより大雑把に精査した後、草削りを用いて丁寧に削り、遺構の検出に努めた。出土する遺物の粗密に応じて適宜移植ゴテ等の道具を併用し、遺構検出にはジョレン・草削りを使用した。

遺構の埋土掘削には移植ゴテ・草削りを使用した。掘削にあたっては基本的にベルトを設定するか半裁をし、土層観察を行いつつ掘り下げた。土層断面については写真撮影を行い、必要に応じて断面図を作成した。遺構からの出土遺物については、必要に応じて出土状況を記録した後、取り上げ№を振って取り上げた。

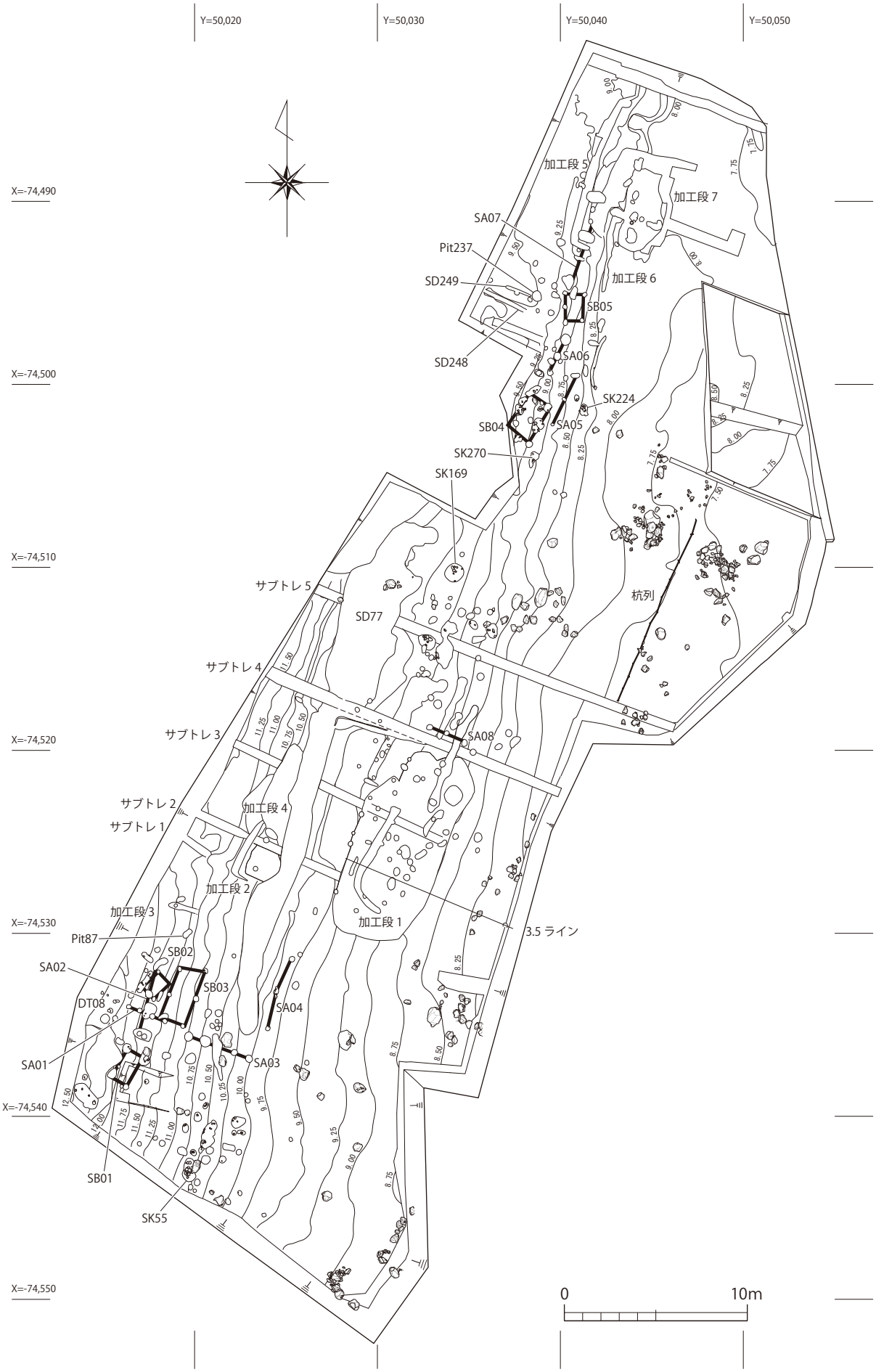
遺構の平面図は、コンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量を行い、高低差のある壁面については平面図と同様に調査システムを用いた記録作成を行った。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは６×７判フィルム (モノクロネガ・カラーポジフィルム) による撮影を行い、それ以外はデジタルカメラで撮影した。

現地調査期間は平成 28 年 7 月 14 日から 12 月 16 日、調査面積は 1,300㎡、調査体制は調査員 1 名と調査補助員 2 名である。

２．基本層序

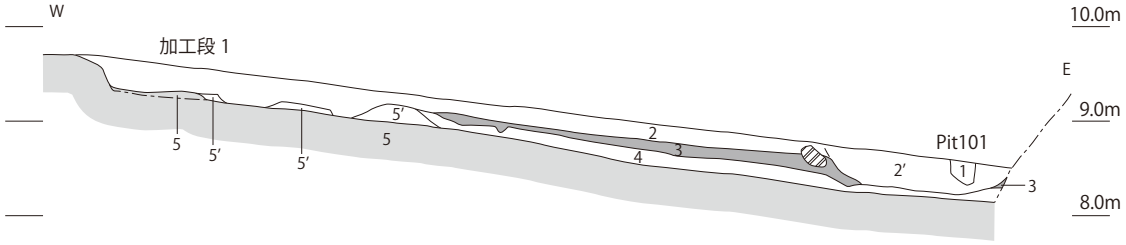
第 8 図は試掘確認調査時の土層である。地表（標高 8 ～ 12m）の下に、1･2 層が表土や造成土、3 ～ 5 層が遺物包含層である暗褐色系土層、その下に明黄褐色土の基盤層（地山）が堆積している。3 ～ 5 層は暗褐色系の粘質土、暗黄褐色粘質土等が、厚いところで 1m ほど堆積していた。また､斜面上方からの転落と考えられる石が現在水田として使用されている､谷中央に近い平坦地（調査区の東側）から確認されている（第 9 図)。第 11 図調査区北壁土層図では、調査区西側（山側）が道路や屋敷地の法面建設等により地山まで削平され、その土砂が東側（水田側）に造成され、二次堆積していることが観察される。

水田での試掘確認調査では 28T12 や 28T13 では 7.4m 付近で、28T14 では 7.7m で、調査区北壁では 7.8m で灰白色や青灰色の粘土層が確認できた。これらからは遺構や遺物がなく、水性堆積土層であった。



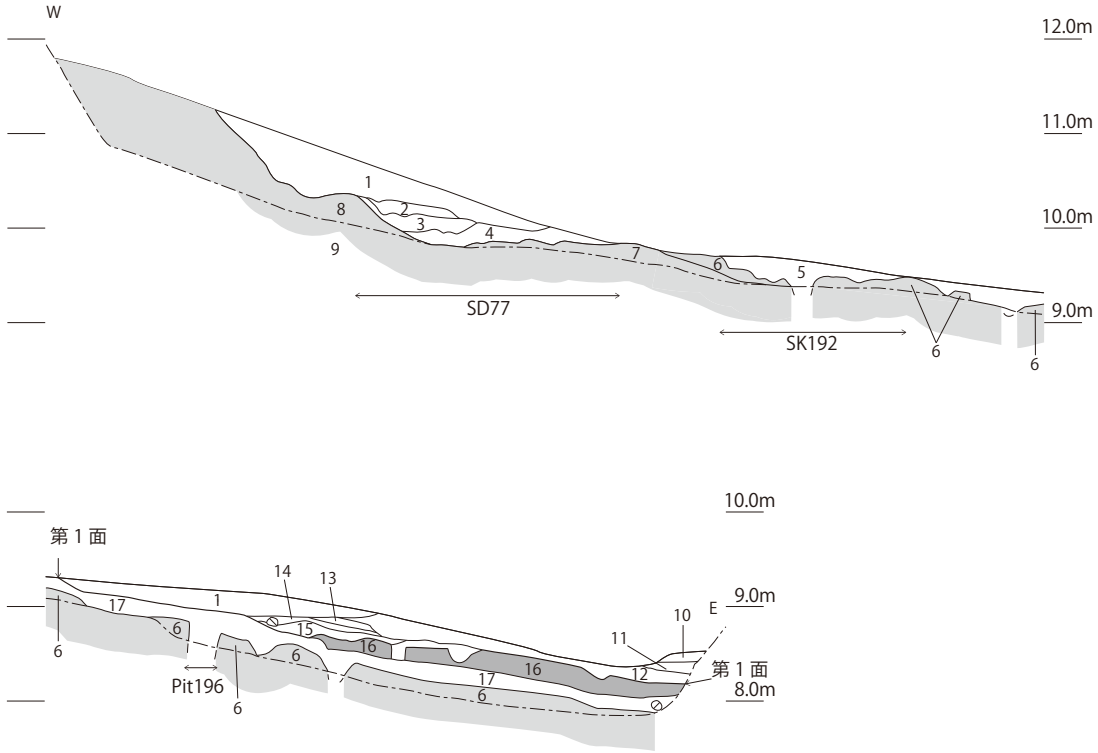
第 9 図　浅柄Ⅲ遺跡 調査区配置図 (S=1:300)

3.5 ライン土層図



1. 黒色粘質土（しまりあり。粘性あり。赤色ブロックを少し含む。）ピット埋土
2. 黒褐色粘質土（赤色・白色・黄色ブロックを含む。）包含層
2′. 黒褐色粘質土（黄色・白色・赤色ブロックを含む。）遺構埋土の可能性あり　3 層を切っている
3. 褐色粘質土（黄白色・白色ブロックを多量に含む。）地山の崩落土あるいは盛土か
4. 黒褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。白色・黄色・赤色ブロックを少し含む。）
5. 明黄褐色粘質土　地山
5′. 明黄褐色粘質土　地山風化土

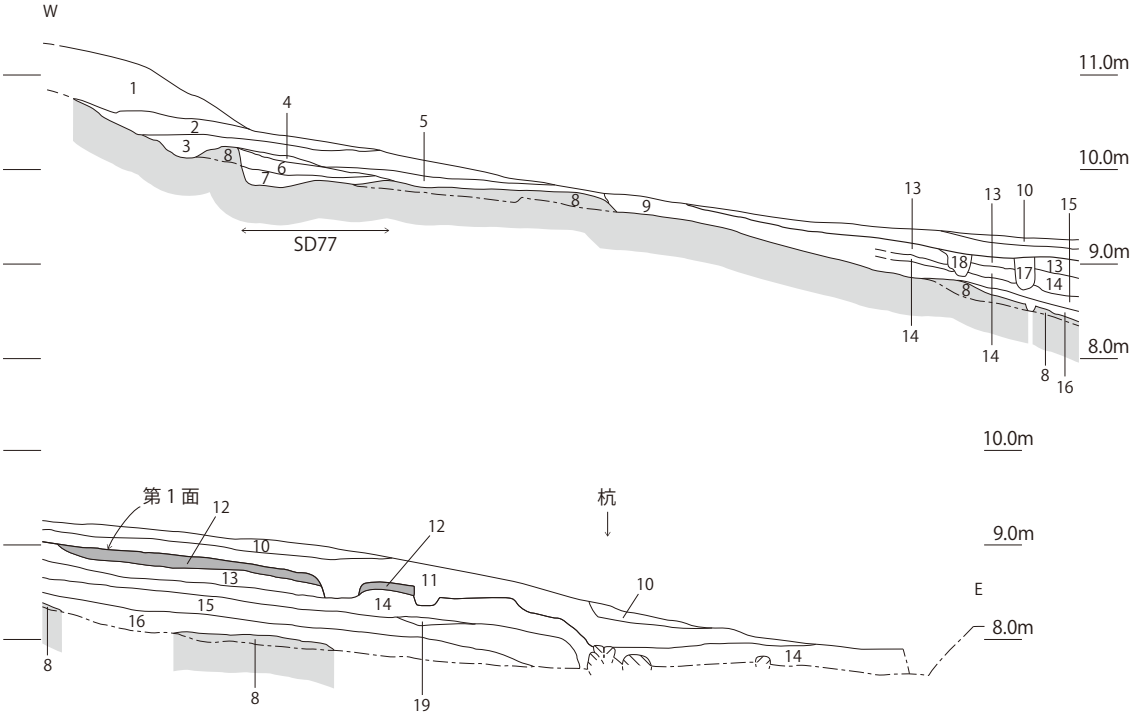
サブトレンチ 4 土層図



1. 褐灰色砂質土（しまりない。粘性なし。混ざりもの少ない。）
2. 黒褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。黄色・白色ブロックを含む。）
3. 黄褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。黄色・白色ブロックを含む。）　SD77 埋土
4. 暗褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。混じりなし。）
5. 褐灰色砂質土（しまりなし。粘性なし。）SK192 埋土
6. 黄褐色粘質土　地山風化土
7. にぶい黄褐色砂質土（しまりあり。粘性なし。）地山
8. 褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。白色・黄色ブロックを少し含む。）地山
9. 黄褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。白色・黄色ブロックを少し含む。）地山
10. 黒褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。赤色ブロックを少し含む。）
11. にぶい黄褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。黄色ブロックを含む。）
12. 灰黄褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。黄色ブロックを少し含む。）
13. にぶい黄褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。黄色・白色ブロックを多く含む。）
14. 褐灰粘質土（しまりあり。粘性あり。黄色ブロックを少し含む。）
15. 灰黄褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。黄色・白色ブロックを少し含む。）
16. 黄褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。黄色・白色ブロックを多く含む。）
17. 黒褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。黄色ブロックを少し含む。）

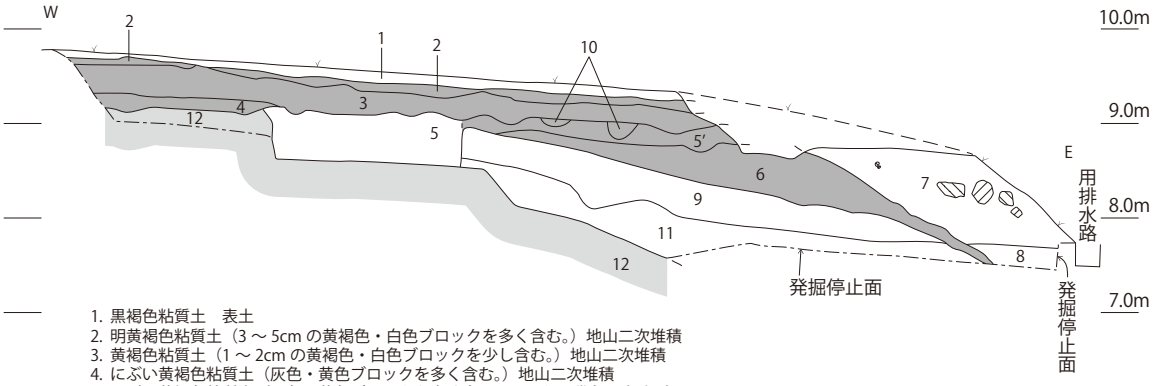
第 10 図　浅柄Ⅲ遺跡 土層図 1(S=1:80)

サブトレンチ 5 土層図



1. 灰褐色粘質土（しまりなし。粘性なし。遺物なし。）
2. 灰黄褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。黄色・白色ブロックを多く含む。）
3. 黒褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。）
4. 明黄褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。）
5. 暗灰褐色粘質土
6. 灰褐色砂質土（3 ～ 8cm 程度の礫・黄色ブロックを多く含む。） SD77 埋土
7. 暗灰褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。赤色ブロックを含む。）SD77 埋土
8. 明黄褐色粘質土　地山
9. 黒褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。黄色・白色ブロックを多く含む。）
10. 明茶褐色粘質土
11. 茶褐色粘質土（しまりなし。粘性あり。赤色ブロックを少し含む。）
12. 黄褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。5 ～ 10cm の礫を含む。）
13. 茶褐色粘質土（赤色ブロックを含む。しまり、粘性あり。）
14. 黒褐色粘質土（2 ～ 5 cm の礫を含む。しまり、粘性あり。）
15. 茶褐色粘質土（しまりあり。粘性あり。4 層より明るい。）
16. 暗茶褐色粘質土（6 層より暗い。しまり、粘性あり。）
17. 灰黄褐色粘質土　遺構埋土
18. 灰黄褐色粘質土　遺構埋土
19. 灰褐色粘質土（黄色・赤色ブロックを多く含む。）

調査区北壁土層図



1. 黒褐色粘質土　表土
2. 明黄褐色粘質土（3 ～ 5cm の黄褐色・白色ブロックを多く含む。）地山二次堆積
3. 黄褐色粘質土（1 ～ 2cm の黄褐色・白色ブロックを少し含む。）地山二次堆積
4. にぶい黄褐色粘質土（灰色・黄色ブロックを多く含む。）地山二次堆積
5. にぶい黄褐色粘質土（灰色・黄色ブロックを多く含む。4 層より礫多い。）埋土
5′. にぶい黄褐色粘質土（5 層に似る。）
6. 明黄褐色粘質土（3 ～ 5cm の黄褐色・灰色ブロックを多く含む。）地山二次堆積
7. 灰黄褐色粘質土（土留、石垣あり。黄褐色ブロックを含む。）造成土
8. 褐灰粘質土（8 層の還元したもの。黄褐色ブロックを含む。）造成土
9. 灰黄褐色粘質土（1cm 以下の赤色・黄色ブロックを含む。粘性強い。）遺物包含層
10. 黒褐色粘質土（しまりなし、粘性あり。）
11. 灰黄褐色粘質土（9 層より淡く明るい。やや黄味が強い。黄色ブロックを含む。）遺物なし
12. 明黄褐色粘質土　地山

第 11 図　浅柄Ⅲ遺跡 土層図 2(S=1:80)

３．検出遺構とその遺物

調査の結果、加工段、土坑、溝、ピット等 280 近くの遺構を確認した（第 7 表）。遺構の多くは、地山上で検出したが、調査区東側の一部で、黄褐色粘質土（第 10 図サブトレンチ 4 土層図の 16 層、第 11 図サブトレンチ 5 土層図の 12 層）の造成土上面（第 1 遺構面）で確認した。

第 1 遺構面検出遺構（第 12 図）

C4・C5 グリッド付近からピット 6 基、土坑 1 基、溝跡 1 基を検出した。標高 8.5 ～ 9.25m と東側に向かって傾斜しているがほぼ平坦である。ピット（Pit93、94、96 ～ 99）は径 22 ～ 66㎝を測り、深さは 7 ～ 22㎝と浅いが、Pit96 が 34㎝、Pit94 が 42㎝とやや深い。建物として復元できなかった。土坑（SK100）は、長さ 1.34m、幅 0.68m、深さ 27㎝を測り、皿状の断面を呈する。

これらの北側からは直線状の溝跡（SD126）を検出した。検出長 6m、幅 0.36m、深さ 20㎝を測り、単層で黄褐色砂質土が堆積している。

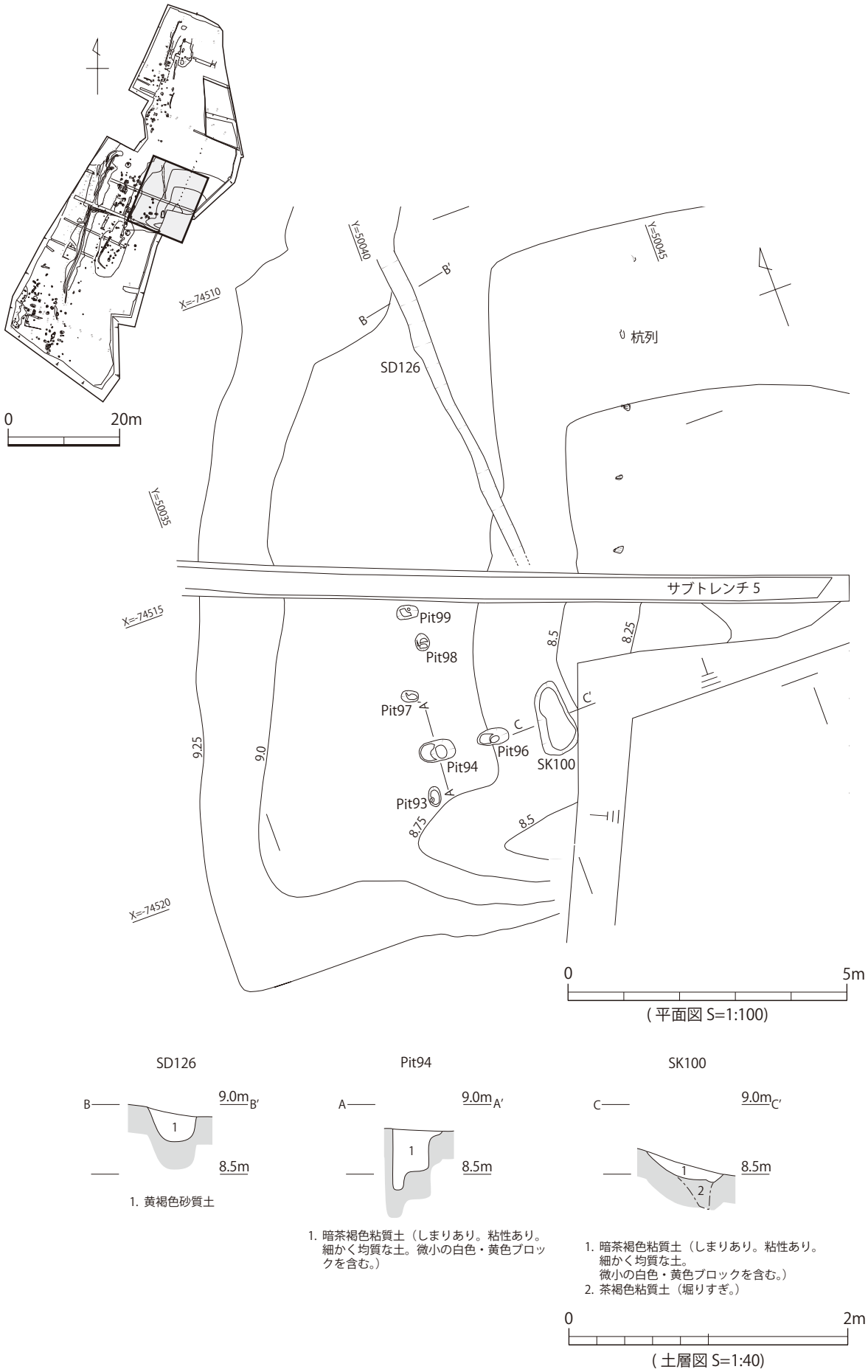
加工段 1（第 13・14 図）

加工段 1 は調査区中央の B3・C3 グリッド付近に位置する。平坦面は南北 11.1m、東西 5.04m の長方形を呈し、山側は 40㎝の段差がある。床面には山側端から約 50 ～ 110㎝離れた場所に、幅 50㎝、深さ 20㎝、長さ 7m の L 字形の溝（SD155）がある。床面からはピットは検出されているが、建物を復元することはできなかった。山側の落ち込み際には Pit116、Pit120、Pit130、Pit203 の径 20 ～ 30㎝、深さ 10㎝程度の柱穴がある。周辺には SD117、SD123、SD134、SK107 がある。SD117 や SK107 は切り合い関係より加工段 1 より新しい遺構と考えられる。SD123 との前後関係は不明である。SD134 は一連の遺構である SK192 から中国製青磁が出土していることから中世であり、加工段 1 より新しい遺構である。

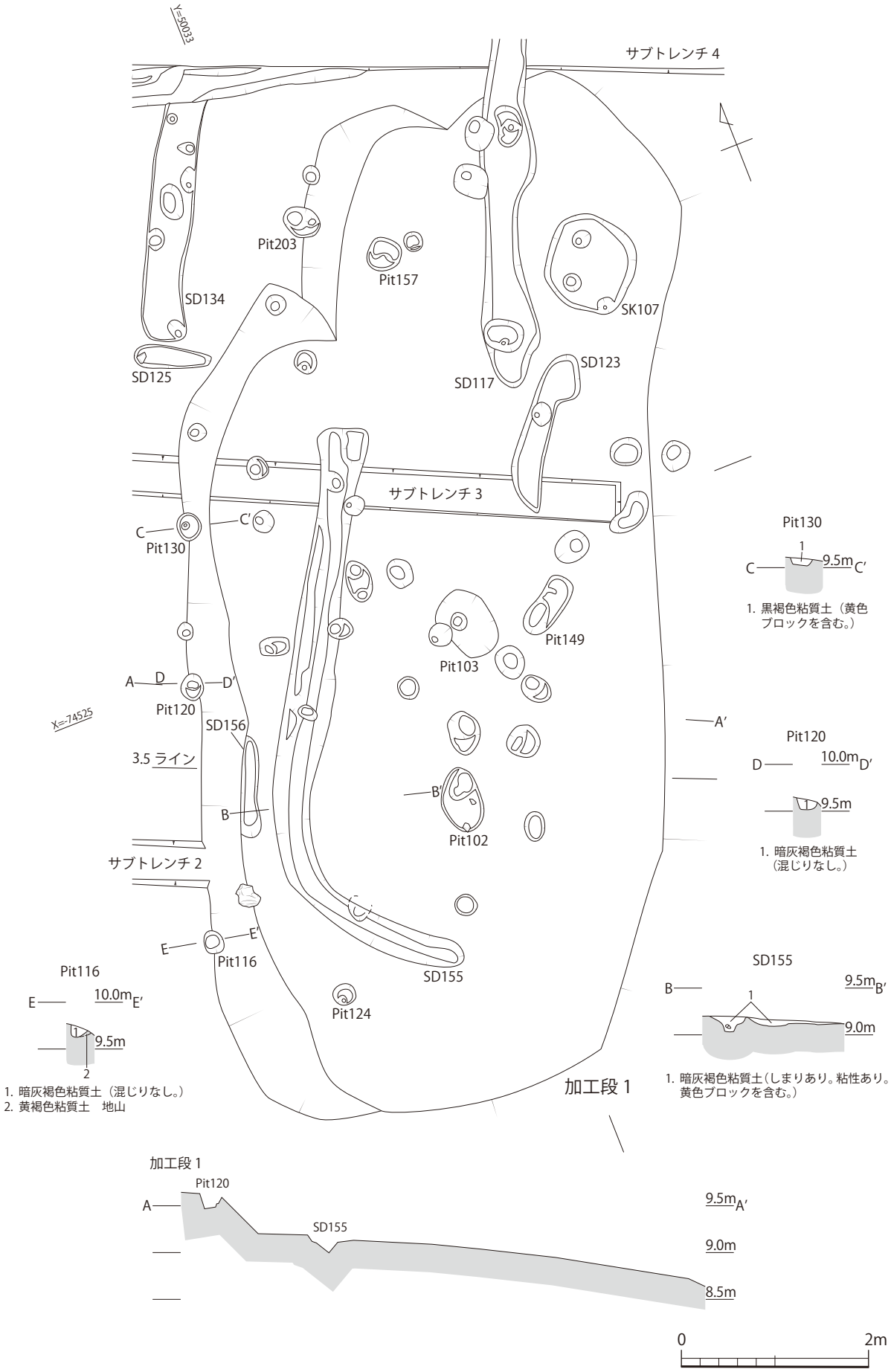
山際の壁と SD155 と間の床面から須恵器と土師器甕が出土した。土師器甕はやや大型の破片がまとまって出土した。SD155 の北端からは土師器坏（第 24 図 2）が出土している。山際にある SD156 内からは土師器甕（第 24 図 3）が出土した。

加工段 1 出土遺物（第 24 図 1 ～ 5）

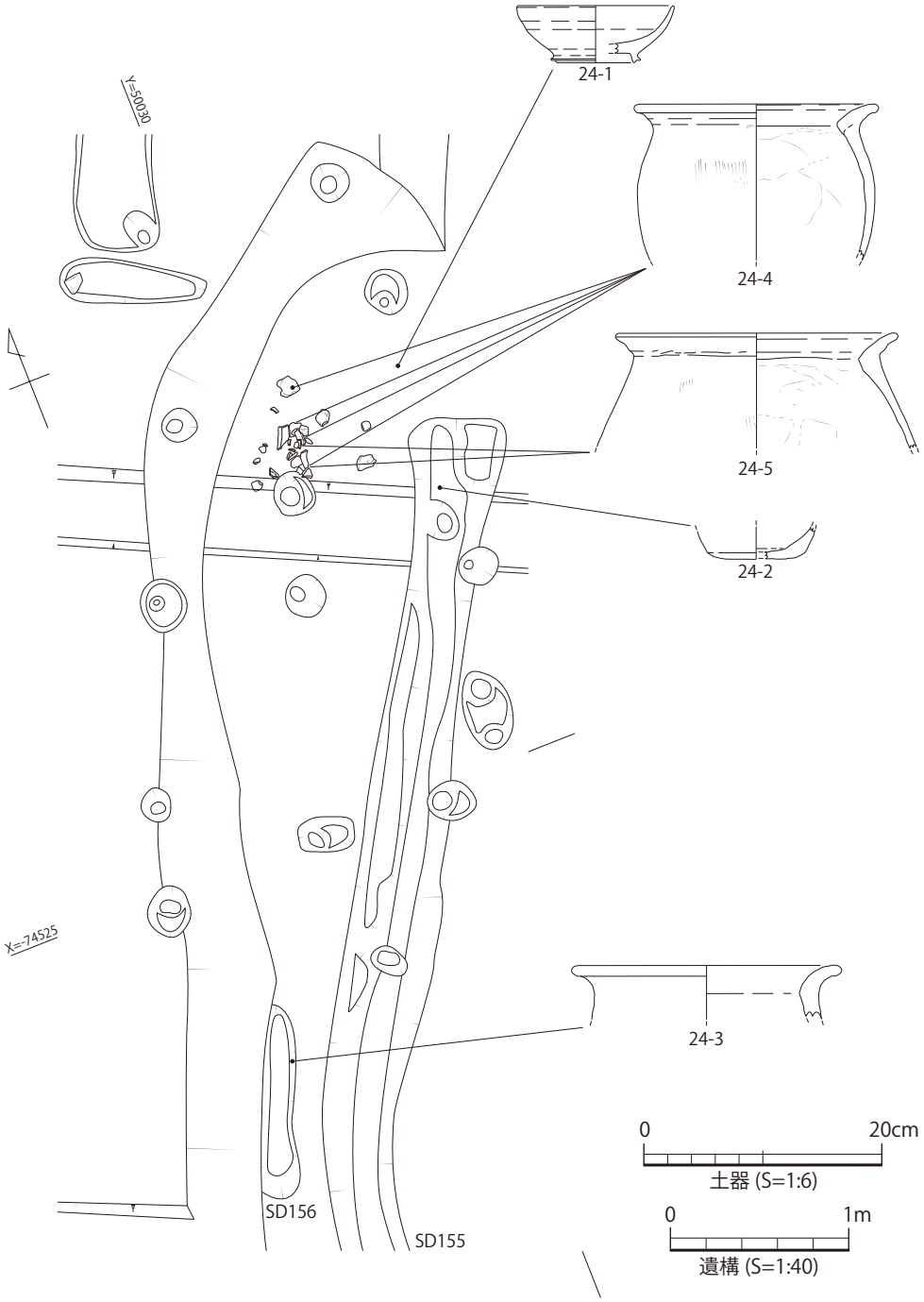
第 24 図 1 は須恵器高台付坏である。体部は高台から湾曲しながら立ち上がる。高台脇には直径 8㎝の重ね焼き痕が残る。高台端部の平坦は凹む。2 は土師器坏で、底径 5㎝の小型である。外面に黒斑がある。3 ～ 5 は土師器甕である。3 の内面は、口縁部と体部の境が明瞭である。口縁部外面は横方向に大きく広がる。4 の口縁部は横方向に広がり、端部はやや肥厚する。内面は体部が外側に向け大きく湾曲し丸みを持ち、口縁部との境は明瞭である。外面の頸部から体部上方にかけて煤状の黒色物が付着する。5 は口縁部外面に段を持ち、口縁部と体部の接合痕跡の可能性がある。内面は体部と口縁部の境が明瞭であるが、ヘラケズリ調整の最上部は、口縁部と体部の境より一段下がった体部側にある。



第 12 図　浅柄Ⅲ遺跡 第 1 遺構面検出状況 (平面図 S=1:100 土層図 S=1:40)



第 13 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 1 実測図 (S=1:60)



第 14 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 1 遺物出土状況 (S=1:40)

加工段２（第 15 図）

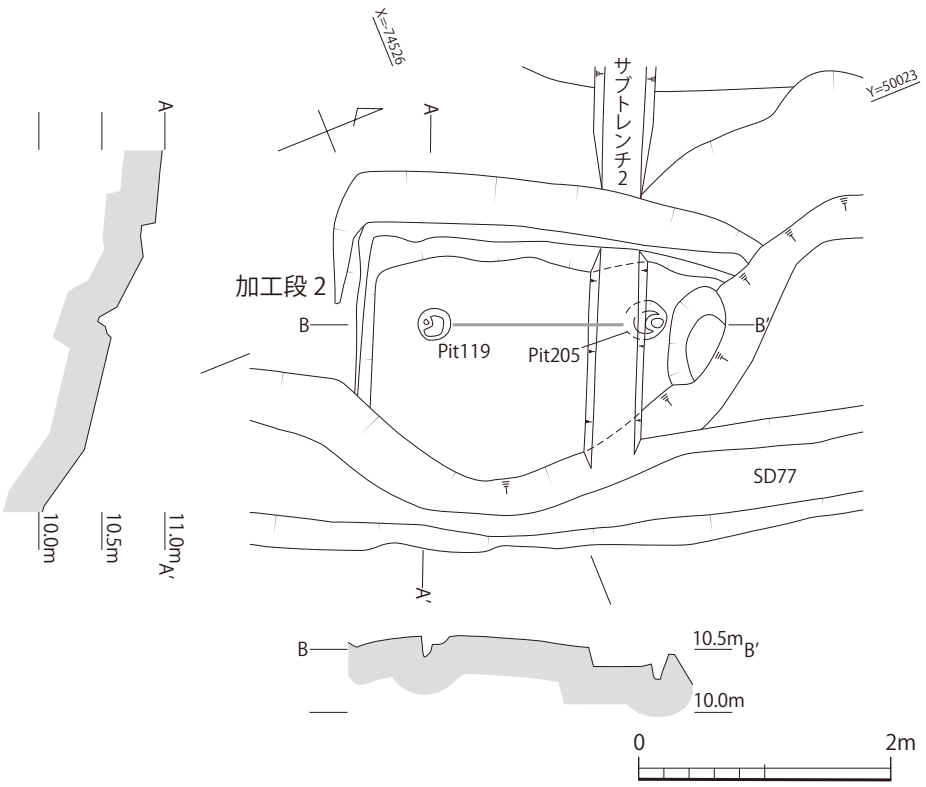
加工段２は加工段１の西側の丘陵上方、B3 グリッドに位置する。東側は SD77 に、北側は加工段４によって削平されている。残存する規模は上端で南北 3.42m、東西 2.4m を測り、床面と考えられる平坦面の規模は南北 2.5m、東西 1.7m である。床面には山側に幅 25㎝、深さ 10㎝の溝が L 字形に廻る。床中央に径 25㎝、深さ 15㎝ほどの Pit119 と Pit205 が存在し、間隔は 1.68m である。遺物は出土していない。

加工段３（第９図）

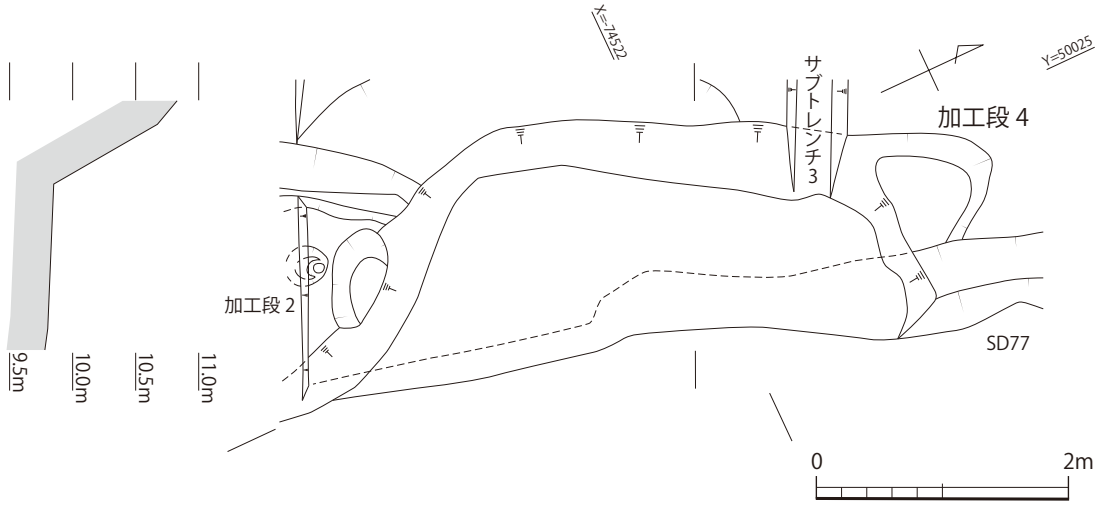
加工段３は調査区の南西端、A1、A2 グリッド付近に位置する。調査区外に広がっている。検出した範囲は南北 4.5m、東西 1.0 ～ 1.6m を測る。加工段３の北側には土器溜まり８（DT08）がある。

加工段４（第 16 図）

加工段４は加工段１の西側の丘陵上方、B3 グリッドに位置する。東側は SD77 によって削平されている。南側には加工段２があり、加工段４が加工段２を削平している。残存する規模は上端で南北 4.86m、東西 2.32m を測り、床面と考えられる平坦面の規模は南北 3.60m、東西 1.15 ～ 1.3m である。遺物は出土していない。



第 15 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段２実測図 (S=1:60)



第 16 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 4 実測図 (S=1:60)

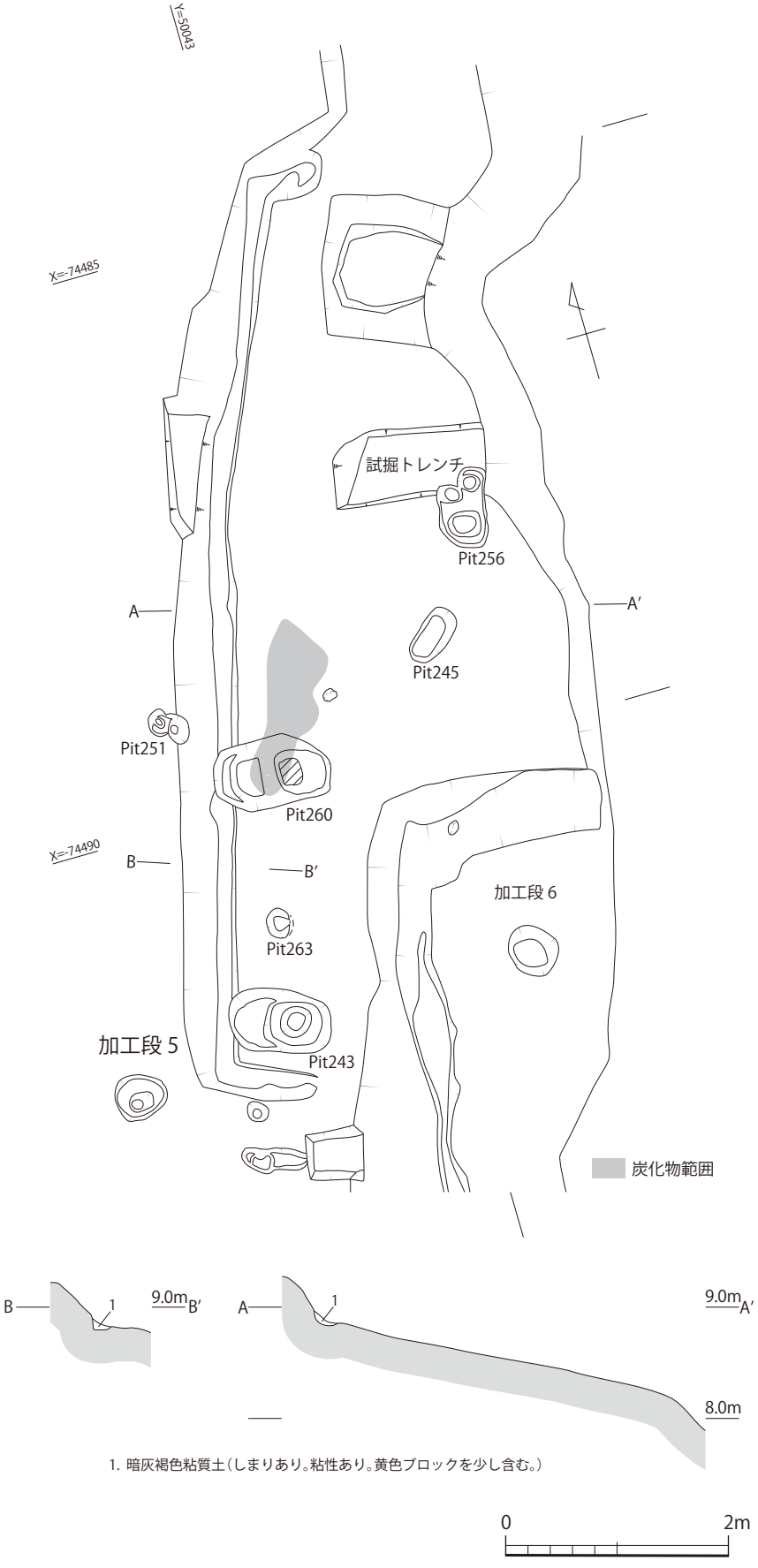
加工段 5（第 17・18 図）

加工段 5 は調査区北西の B6・B7 グリッド付近に位置する。平坦面は南北 8.6m、東西 3.6m の長方形を呈し、山側の床面には幅 22㎝、深さ 15㎝、長さ 9.35m の L 字形の溝があり、山際は 43㎝の段差となる。加工段の南東側は加工段 6 により削平されている。東側も全面削平されているため、加工段の当初の奥行きの規模は不明である。床面中央の山際から 33㎝離れた場所から長さ 155㎝、幅 46㎝の範囲にわたって薄く炭化物が検出された。

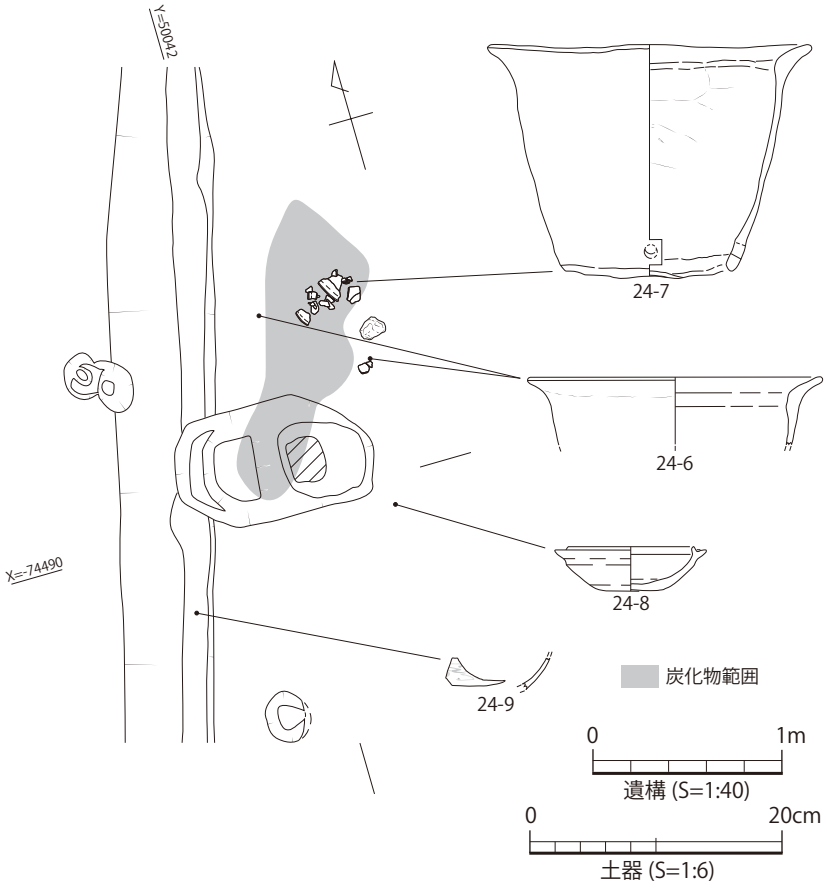
床面からは Pit243 と Pit260 の大型のピットと Pit245、Pit256 、Pit263 の小型のピットが検出された。Pit243 と Pit260 は柵跡 7 を構成する柱穴である。Pit263 は径 27㎝、深さ 9㎝程度のピットである。床面からはピットは検出されているが、建物を復元することはできなかった。炭化物の周辺から土師器甑（第 24 図 6・7）のやや大きめの破片が出土した。その南から須恵器坏身が出土している（第 24 図 8）。山際の溝からは肥前磁器が出土した（第 24 図 9）。溝跡は 7 世紀の加工段に伴うと考えていることから、肥前磁器の出土は上層からの掘り込みがあり、混入した可能性が考えられる。

加工段 5 出土遺物（第 24 図 6 ～ 9）

第 24 図 6 は体部が直線状になることから土師器甑と考えたが、甕の可能性もある。口縁部は上方に広がり、端部は丸みを持つ。外面には黒斑がある。体部の器壁は薄くなる。7 は土師器甑である。把手は残存しないが、端部に径 1㎝の円孔がある。体部の器壁は薄く、口縁部は上方に開く。口縁部の作りが第 24 図 6 と類似する。口縁部と体部の境付近が最も器壁が厚くなる。8 は口径 10㎝の須恵器坏身である。口縁部の立ち上がりは低く、底部はナデ調整である。9 は加工段 5 の溝から出土した肥前系磁器である。外面は無文で、内面に文様を描く。混入か。



第 17 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 5 実測図 (S=1:60)



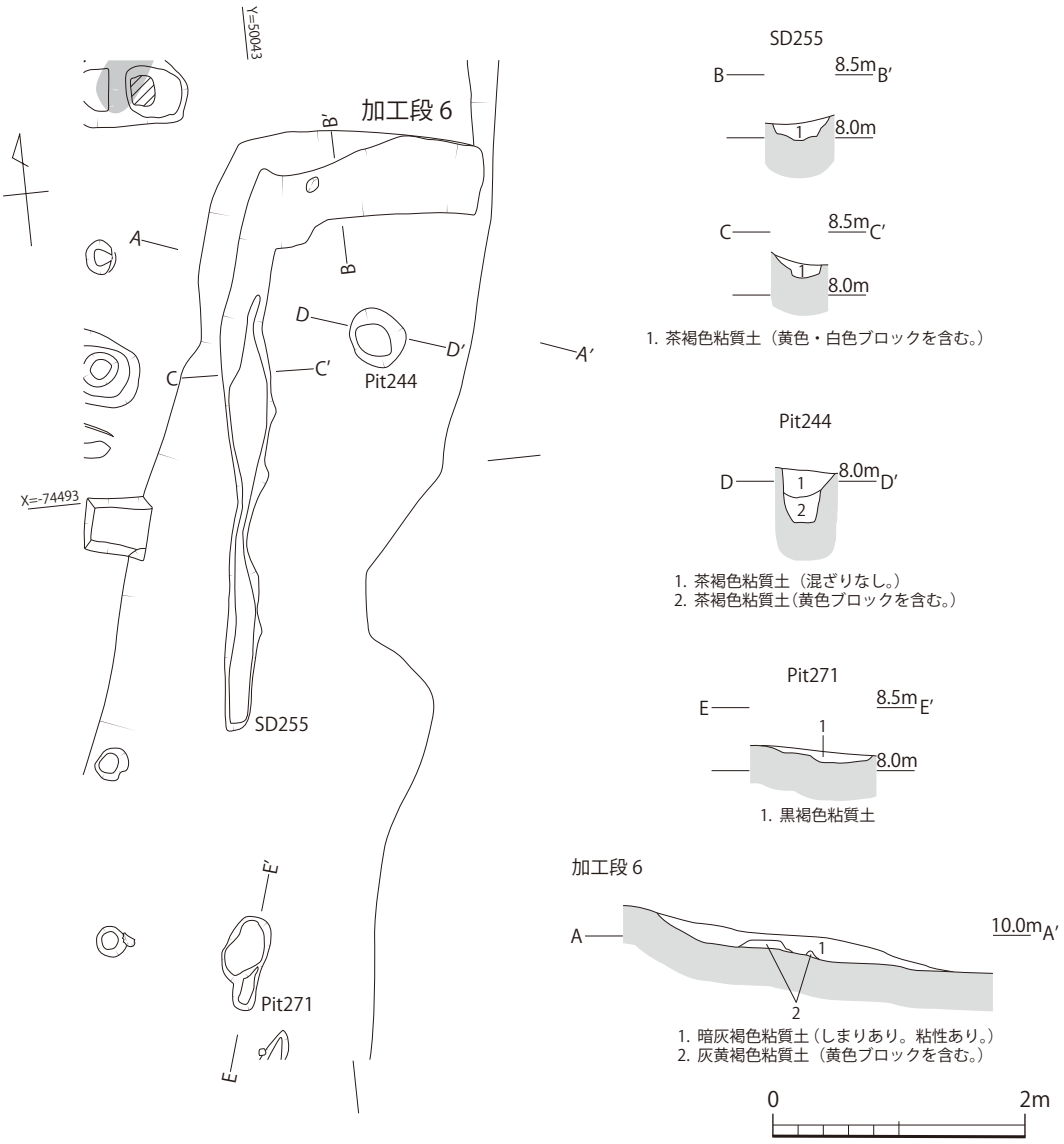
第 18 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 5 遺物出土状況 (S=1:40)

加工段 6（第 19・20 図）

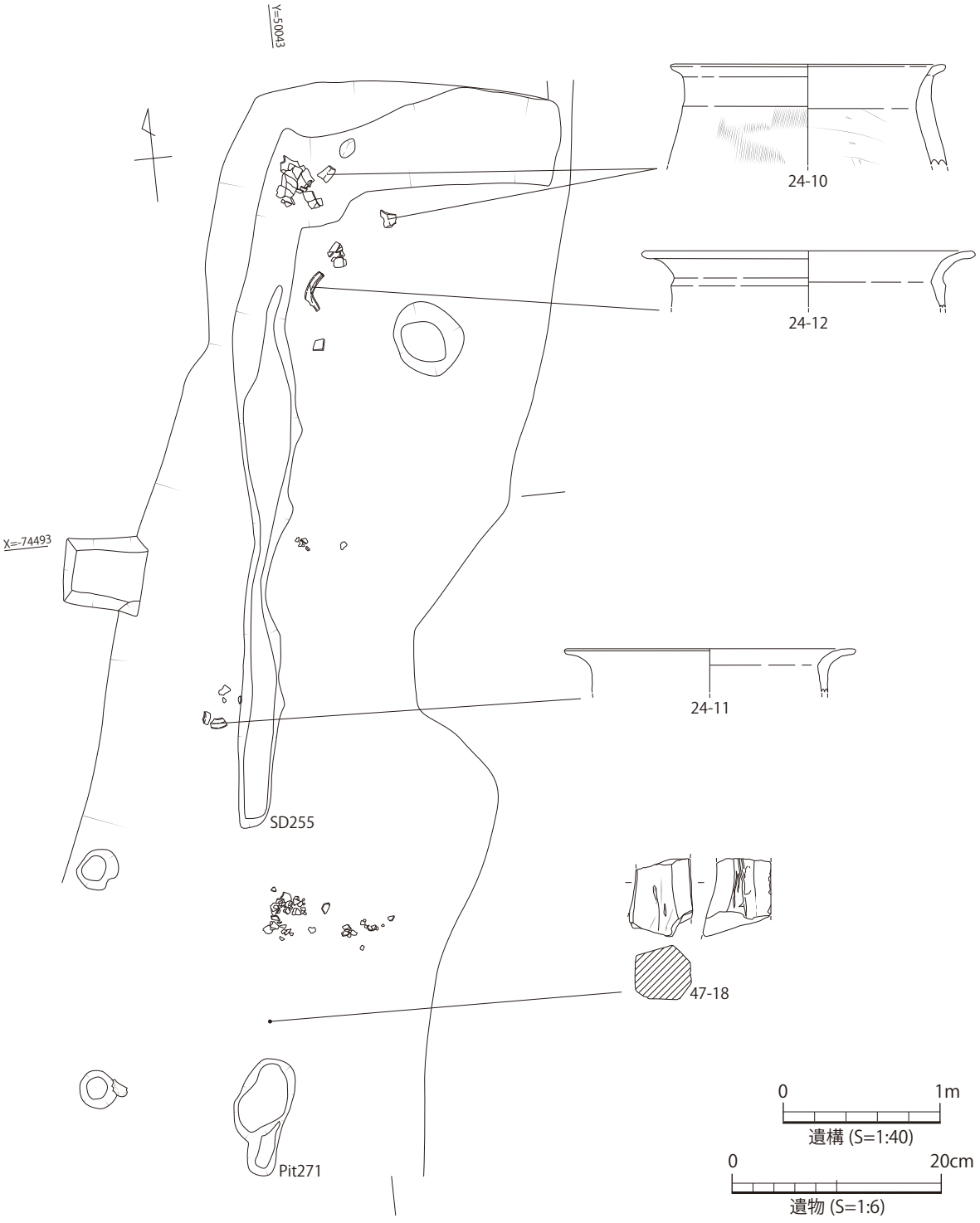
加工段 6 は調査区北西の B6・B7 グリッド付近に位置する。山側の床面には長さ 5.9m、幅 0.2 ～ 0.3m、深さ 13㎝の L 字形の溝（SD255）があり、山際と床面の比高は 28㎝である。SD255 の南には主軸が合う溝状の Pit271 がある。Pit271 は長さ 0.74m、幅 0.34m、深さ 8㎝を測り、SD255 の一連の溝の可能性がある。Pit271 を含めると平坦面は南北 7.0m、東西 1.4 ～ 2.0m の長方形を呈する。東側は全面削平されているため、加工段の当初の奥行きの規模は不明である。床面からは Pit244 が検出された。Pit244 は径 42 ～ 48㎝、深さ 41㎝を測る。床面からはピットは検出されているが、建物を復元することはできなかった。SD255 の北隅から土師器甕（第 24 図 10）が潰れた状態で出土した。周辺からは移動式竈と考えられる破片（第 24 図 12）が出土した。SD255 と Pit271 の間からは砥石（第 47 図 18）が出土している。加工段として取り上げておらず、包含層からの出土として掲載した。

加工段 6 出土遺物（第 24 図 10 ～ 12）

第 24 図 10 は土師器甕で、口縁部が広がらず、端部のみ外反する。口縁端部は上面に平坦面を持つ。内面は体部と口縁部の境は不明瞭である。11 は体部が直線状になることから甑と考えたが、甕の可能性がある。内面では体部と口縁部の境は明瞭である。12 は復元口径が 31.8㎝を測り、移動式竈の可能性がある。口縁部は長く、大きく外反する。内面では口縁部と体部の境は明瞭で、外面の境は突帯状になる。その他、25g の鉄滓が 1 点出土。



第 19 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 6 実測図 (S=1:60)



第 20 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 6 遺物出土状況 (S=1:40)

加工段７（第 21 ～ 23 図）

加工段７は調査区北西の B7 グリッド付近に位置する。上端で幅 4.5m、長さ 2.2m の範囲を方形に掘り窪め、床面と考えられる平坦面を南北 4.1m、東西 2.08m に造り出している。一番深いところで、0.64m の高低差がある。

西側の山側には造付竈を築き、北西側及び南側壁際には溝を伴う。北西側の溝は長さ 2.8 m、幅 5 ～ 15㎝、深さ 10㎝で、溝がやや歪な L 字形に廻る。南側の溝は長さ 0.96 m、幅 5 ～ 10㎝、深さ 10㎝である。

造付竈は山側の地山を長さ 0.8 ～ 1.0m、幅 0.35m を掘り煙道としている。また、地山の土を用いて、壁際から北側で 46㎝、南側で 52㎝の袖を造り出している。南側の袖には芯となるように石材を 1 つ用いている。石材（写真図版 40）は上面が平坦で、下は地山に掘り込んでいた。石材の規模は最大幅 18㎝、厚さ 17㎝、重さ 4050g のスコリアである。煙道は袖を含めて長さ 1.4m、幅 0.4 ～ 0.5m を測る。袖の前方に焼土２があり、焚き口になると考えられる。袖の内面は硬く焼け締まっていた。硬く締まっていた範囲は、奥行きは南壁で 62㎝、北壁で 40㎝を測る。硬化した袖の間は狭くなり幅 9㎝を測る。硬化した高さは床面から 12㎝であり、その上方の壁は炭化物が付着していた。煙道床面には焚き口から 90㎝の所に３～ 4㎝ほどの段差があった。土層を観察すると焼土面（8 層）の上層（5 層）は焼土片や炭化物が多量に含まれ、上面に炭層が存在した。また、4 層も炭化物が多量に含まれ上面に炭層が存在した。使用時期が異なる２面あったか、掻き出しによる堆積か、確定することはできなかった。1 層や 2 層は地山に似ることから天井部の崩落の可能性があり、当初は天井部が存在した可能性が高い。

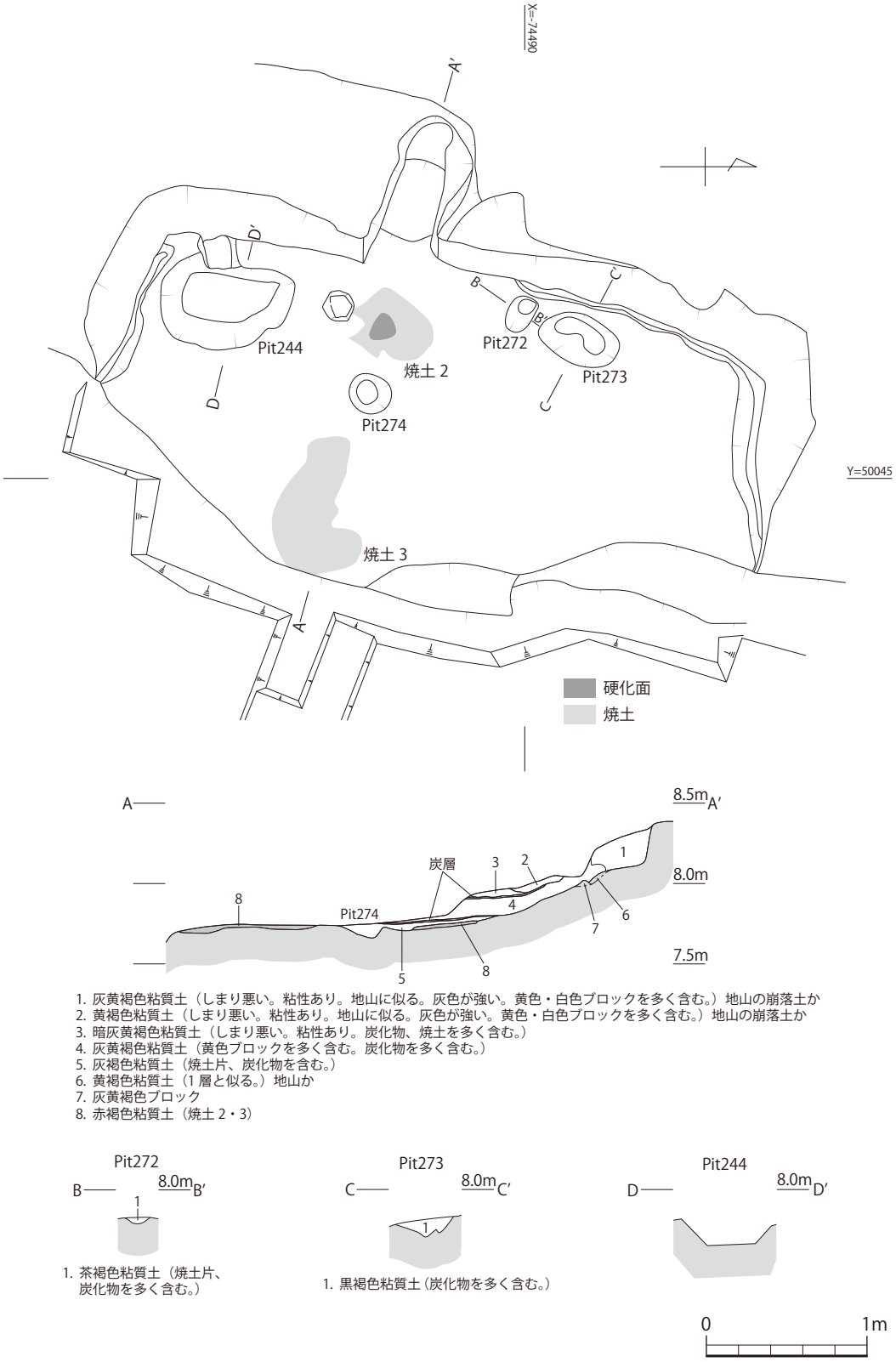
床面には 4 カ所のピットがある。Pit244 は南西側の壁際にあり、長さ 0.85m、幅 0.5m、深さ 15㎝を測り、東側壁から口縁部を下にした土師器甕（第 24 図 14）が出土した。Pit272 と Pit273 は西側壁際から検出された。Pit272 の規模は 16 × 26㎝、深さ 4㎝と浅く、土師器小片が出土した。Pit273 の規模は 31 × 50㎝、深さ 12㎝である。Pit273 からは口縁部を上にした須恵器高坏（第 24 図 13）が出土した。竈の前方、床面の中央には Pit274 があり、規模は 24 × 27㎝、深さ 9㎝である。床面からはピットを検出したが、建物上屋を構成するピットか確定できなかった。

床面には焼土が３カ所確認された。焼土 1 は Pit244 の北側で、15 × 34㎝の範囲が赤褐色に焼けていた。焼土２は造付竈の焚き口前である。規模は 44 × 47㎝の範囲が赤褐色を呈し、その中央の 15 × 17㎝の範囲がより赤く焼けていた。焼土３は竈と焼土２を結んだ延長線状に位置する。長さ 87㎝、幅 30 ～ 57㎝とやや広い範囲が被熱し、赤褐色を呈する。

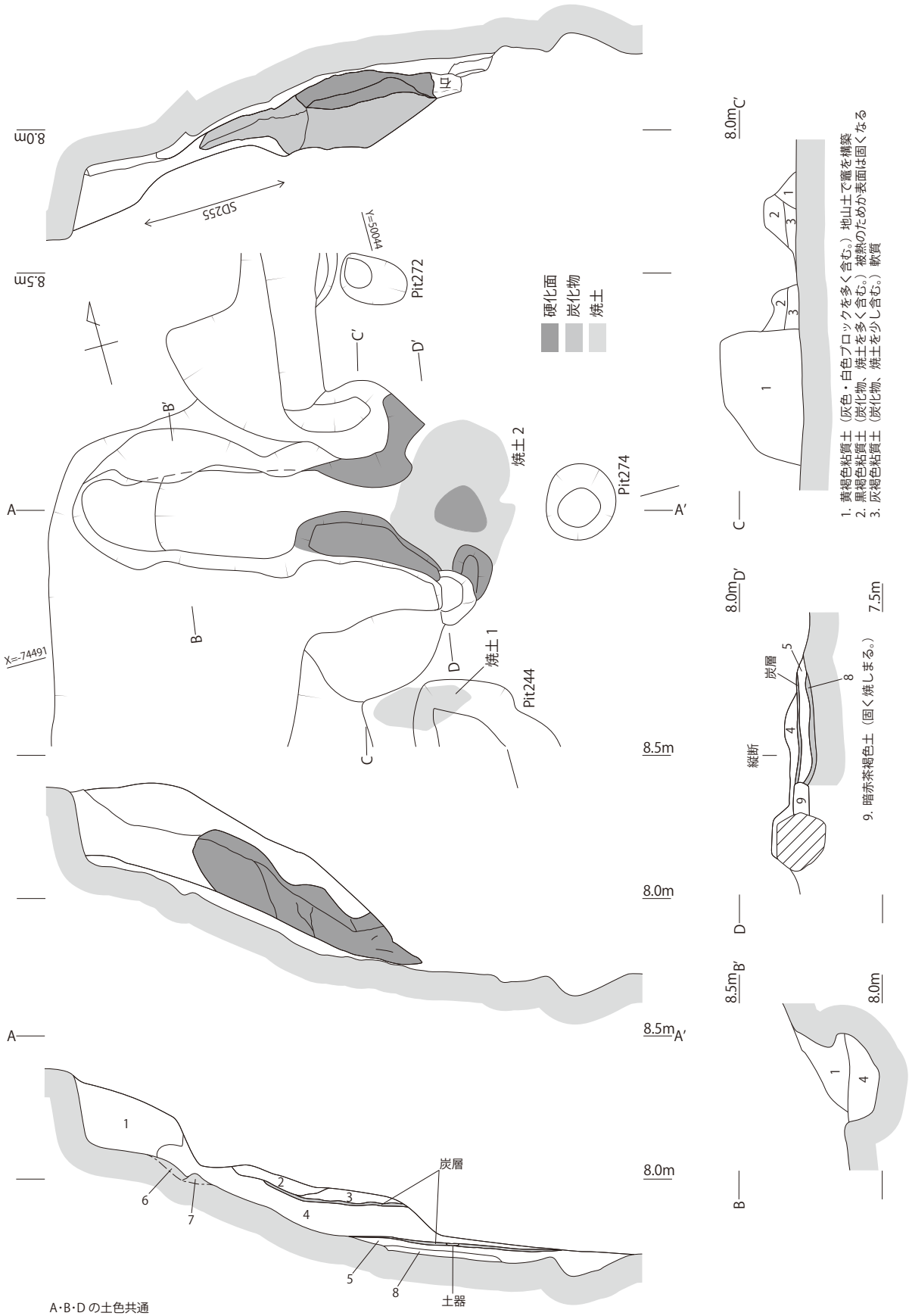
北西側の床面及び壁面を中心に炭化物を検出した。Pit273 周辺には多く、大きいもので長さ 40㎝、幅 10㎝ほどの炭化物もあった。幅 10㎝の板状の炭化物が床面から検出され、壁に立っていたものが倒れた可能性もある。壁面から長さ 10 ～ 20㎝の棒状の炭化物が検出された。

加工段７出土遺物（第 24 図 13・14）

第 24 図 13 は須恵器高坏である。短脚で、透かしはない。脚端部は下方に引き出す。坏部は内湾しながら立ち上がる。14 は土師器甕である。口縁部の器壁は厚く、端部がやや外反する。体部は丸みを持つ。



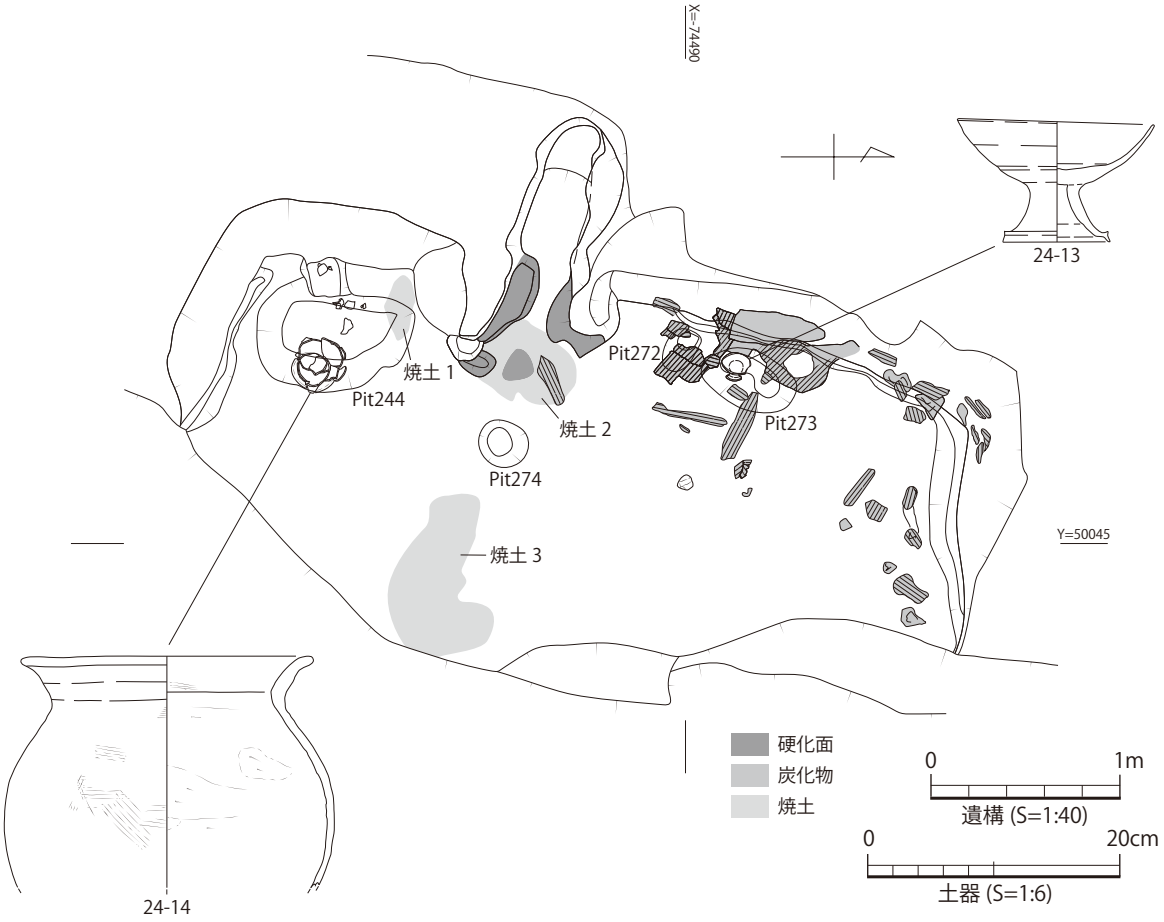
第 21 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 7 実測図 (S=1:40)



A･B･D の土色共通
1. 灰黄褐色粘質土（しまり悪い。粘性あり。地山に似る。灰色が強い。黄色・白色ブロックを多く含む。）地山の崩落土か
2. 黄褐色粘質土（しまり悪い。粘性あり。地山に似る。灰色が強い。黄色・白色ブロックを多く含む。）地山の崩落土か
3. 暗灰黄褐色粘質土（しまり悪い。粘性あり。炭化物、焼土を多く含む。）
4. 灰黄褐色粘質土（黄色ブロックを多く含む。炭化物を多く含む。）
5. 灰褐色粘質土（焼土片、炭化物を含む。）
6. 黄褐色粘質土（1 層と似る。）地山か
7. 灰黄褐色ブロック
8. 赤褐色粘質土（焼土 2）

0　1m

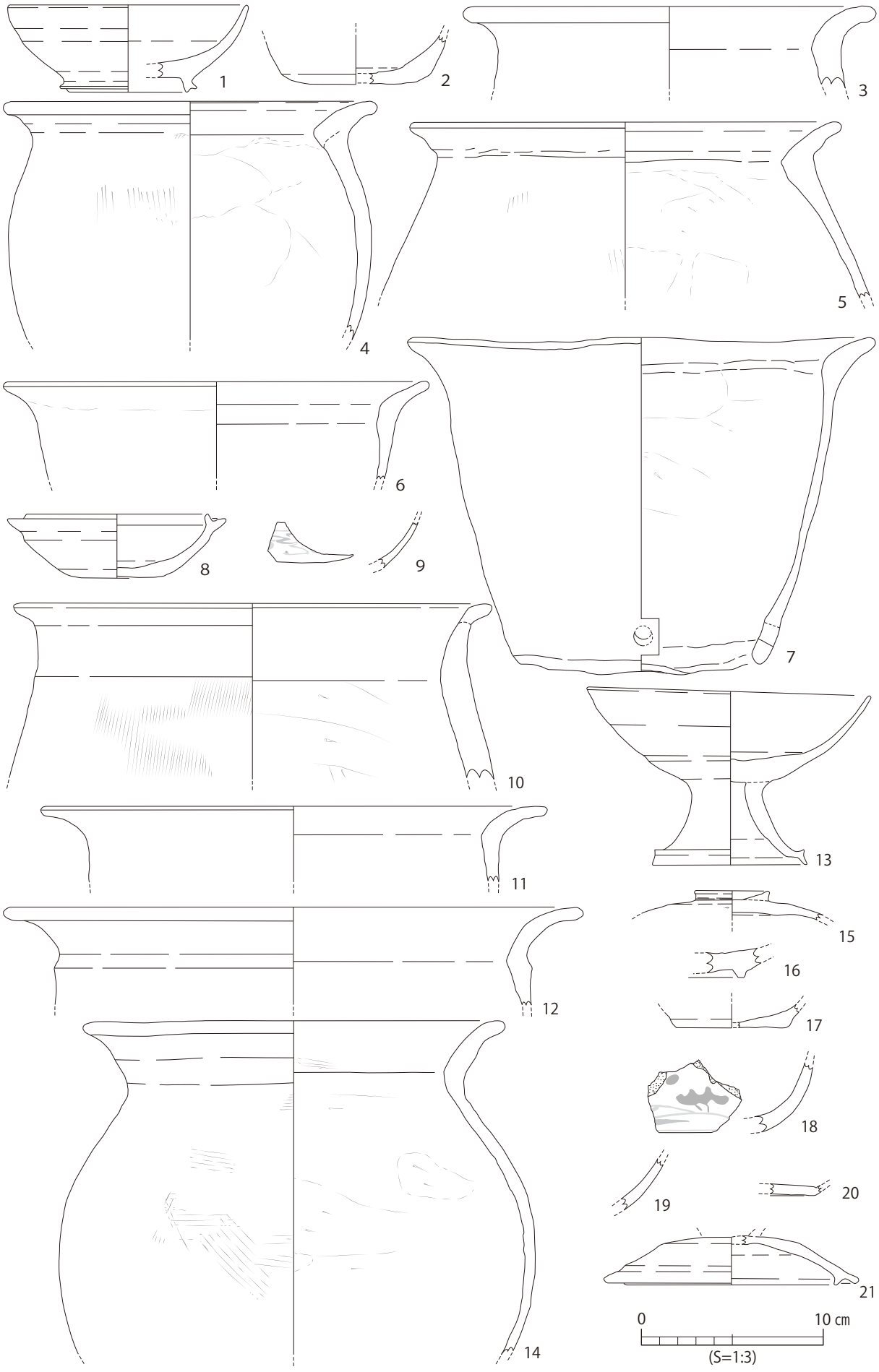
第 22 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 7 竈実測図 (S=1:20)



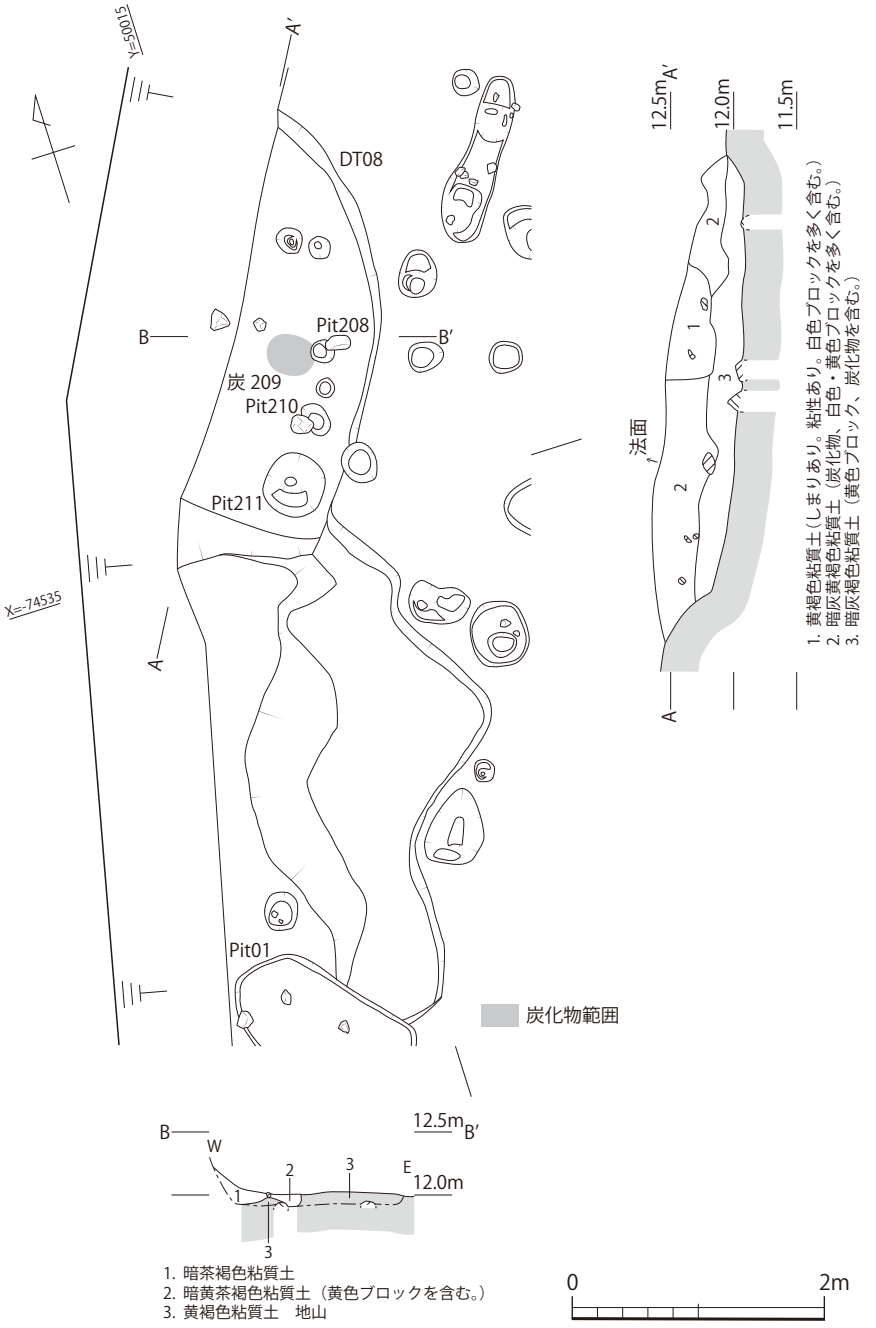
第 23 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 7 遺物出土状況 (S=1:40)

土器溜 8（DT08）（第 25・26 図）

DT08 は調査区南西端に位置する加工段 3 から検出した土器溜まりである。土師器甕や甑、移動式竈、須恵器蓋坏等が幅 51㎝、長さ 315㎝の範囲から折り重なるように出土した。一部調査区外に続くため規模は広がる可能性がある。土器を取り除くと床面は東側で深さ 15㎝の凹みとなる。凹みは北側と南側にあり、北側は長さ 3.05m、幅 1.05m、南側は長さ 3.20m、幅 1.83m を測る。遺物は 2 つの凹みにかかるように出土しており、遺物の出土状況は下層から検出した 2 つの凹みに対応していない。北側の凹みからは Pit208 ～ 211 を検出した。Pit208 に接して 37 × 32㎝の範囲（炭 209）に炭化物が広がっていた。



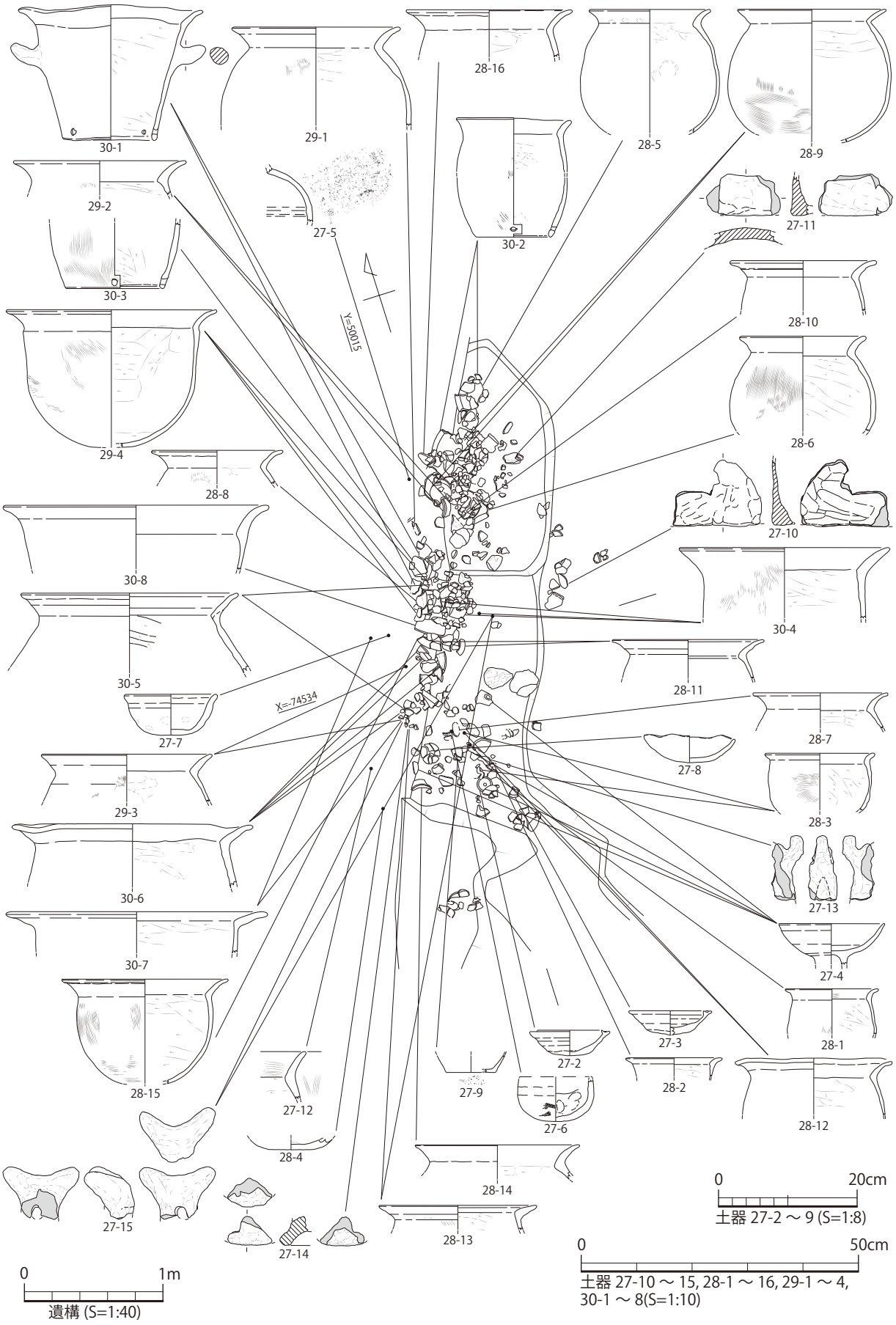
第 24 図　浅柄Ⅲ遺跡 加工段 1･5･6･7、SD77･117･127、SK192、Pit87･225 出土遺物実測図 (S=1:3)



第 25 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 実測図 (S=1:60)

土器溜 8 出土遺物（第 27 図 1 ～ 15、第 28 図 1 ～ 16、第 29 図 1 ～ 4、第 30 図 1 ～ 8）

1 ～ 5 は須恵器である。1 は坏蓋で、口縁部は欠損する。つまみ径は 3.4㎝を測る。天井部はヘラケズリ後ナデ調整である。2、3 は小型の坏身で、口径は 2 が 9.2㎝、3 が 9.6㎝である。口縁部の立ち上がりが低い。底部外面はヘラ切り後ナデ調整である。4 は高坏の坏部で、湾曲しながら立ち上がる。底部内面は摩滅する。5 は壺と考えられる破片で、外面には自然釉が付着する。外面にはカキ目が確認できる。6 ～ 9 は土師器である。6、7 は深みのある坏である。6 は器壁が厚く、造りは雑である。内面には指頭圧痕が残り、外面は粗いハケ目調整である。外面に赤色顔料が塗布される。7 は口縁部がわずかに外反し、底部は平坦である。内外面とも指頭圧痕が残る。内外面に赤色顔料が塗布される。8 は浅い坏である。口縁部は歪み、雑な作りである。全体に風化が著しい。



第 26 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 遺物出土状況 (S=1:40)

丸底。9 は土師器皿で、底部糸切りである。中世と考えられ、混入の可能性がある。

10 ～ 15 は土製品である。10 ～ 12 は移動式竈と考えられる。10、11 は断面が三角形を呈し、接地面が広がる。上方の器壁は薄い。外面には指頭圧痕が残り、内面はヘラケズリ調整と思われる。12 は大型の口縁部で、竈の受部の口縁部と考えられる。口縁部は長く、大きく外反する。

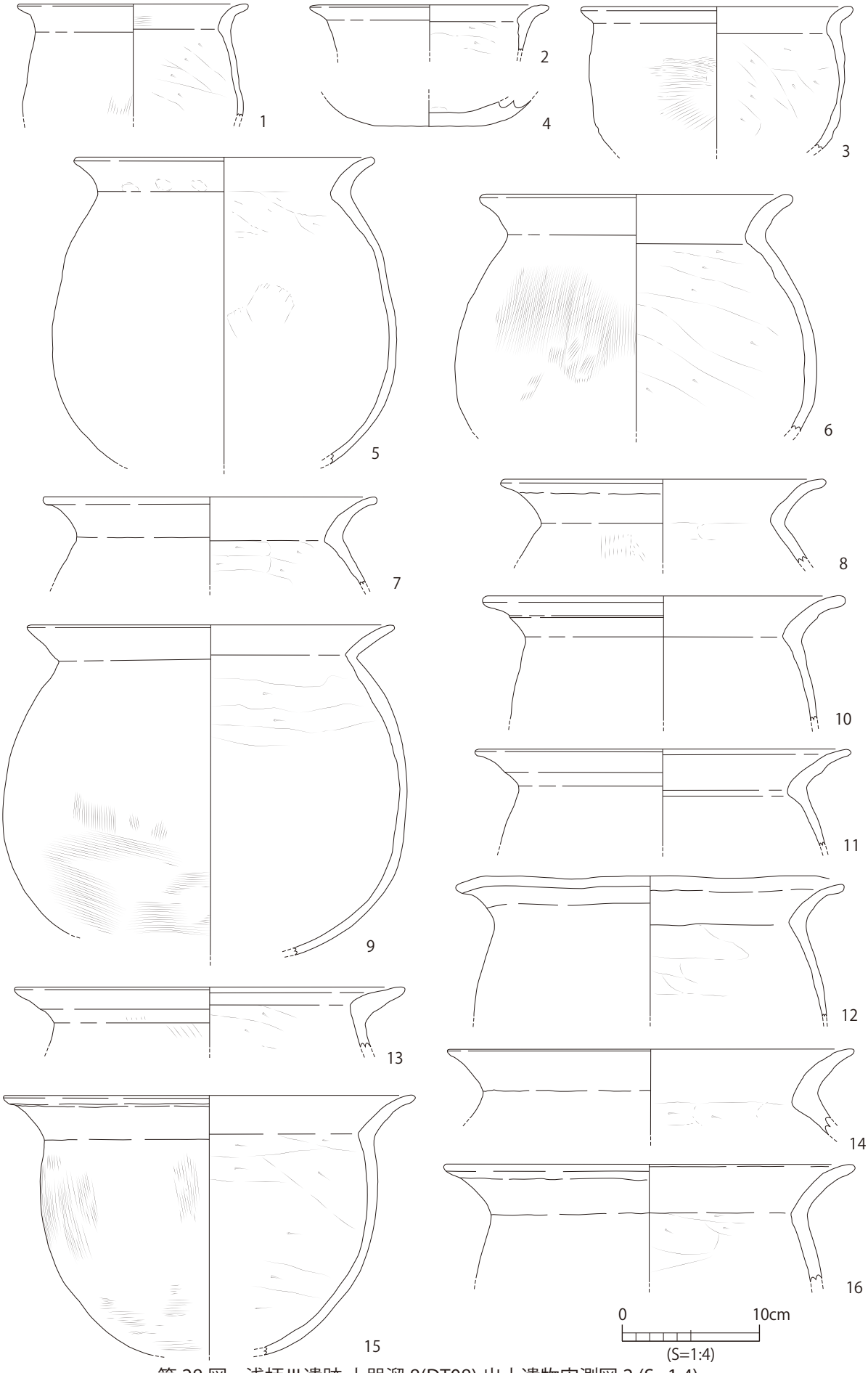
13 ～ 15 は土製支脚である。13 は小型で、作りが雑で表面には指頭圧痕が多く残る。前方の突起は失われ、後方の突起が 1 つ残存し、3 方向に突起があったと考えられる。後方突起は途中で上方に L 字状に折れ曲がる。底部は残存しないが、残存長で 4㎝の孔が底部から続く。14 は底部の破片で、浅い凹みを持つ。復元底径は 11㎝。15 は二方向の前方突起が残る。突起下方の支脚内側にあたる部分の一部は黒変している。背面には復元径 2㎝の非貫通孔がある。

第 28 図 1 ～ 16、第 29 図 1 ～ 4 は土師器甕である。1 ～ 3 は小型である。体部が下膨れで、頸部外面に、わずかな屈曲やアクセントがある。内面では、口縁部と体部の境は明瞭で、器壁が口縁部は厚いが体部はヘラケズリにより薄くしている。1 と 3 は似る。4 は底部片と考えられ、平底状を呈する。内面は指頭圧痕が残り、外面はハケ目調整である。5 は短い口縁部が外反する。頸部外面には指頭圧痕が残り、周辺に煤が付着する。内面下方に黒斑がある。最大径は体部下半にあり、下膨れを呈する。6 は短い口縁部が外反し、体部外面に煤が付着する。最大径は体部下半にあり、下膨れを呈する。7、8 は器壁が薄く、長い口縁部が大きく外反する。8 は口縁部途中でわずかに屈曲する。9 は体部中央に最大径があり、丸みを持つ体部である。口縁部は直線状に外反する。10 ～ 16、第 29 図 1 ～ 3 は口縁部が長く、外反する。10 の口縁部から頸部外面に煤が付着する。10、11 の口縁部は外面中央付近が膨らむ。12 の口縁部は歪みが著しい。13 の口縁部は厚く、断面が三角形を呈する。口縁部外面に煤が付着する。14 の口縁部は器壁が厚く、外反する。15 は口縁部が長く外反し、体部中央付近に最大径を持ち、底部に向け急速に窄まり、鉢状を呈する。外面に煤が付着する。16 は口縁部が長く、湾曲しながら外反する。第 29 図 1 ～ 3 の内面は、口縁部と体部の境は明瞭である。1 は体部が丸みを持ち、体部中央に最大径がある。4 は第 28 図 15 と同形態である。口縁部下部を強くヨコ方向にナデることにより、頸部外面に突起状に出っ張りができる。内面は口縁部と体部の境は明瞭である。内外面体部下半から底部にかけて黒斑がある。

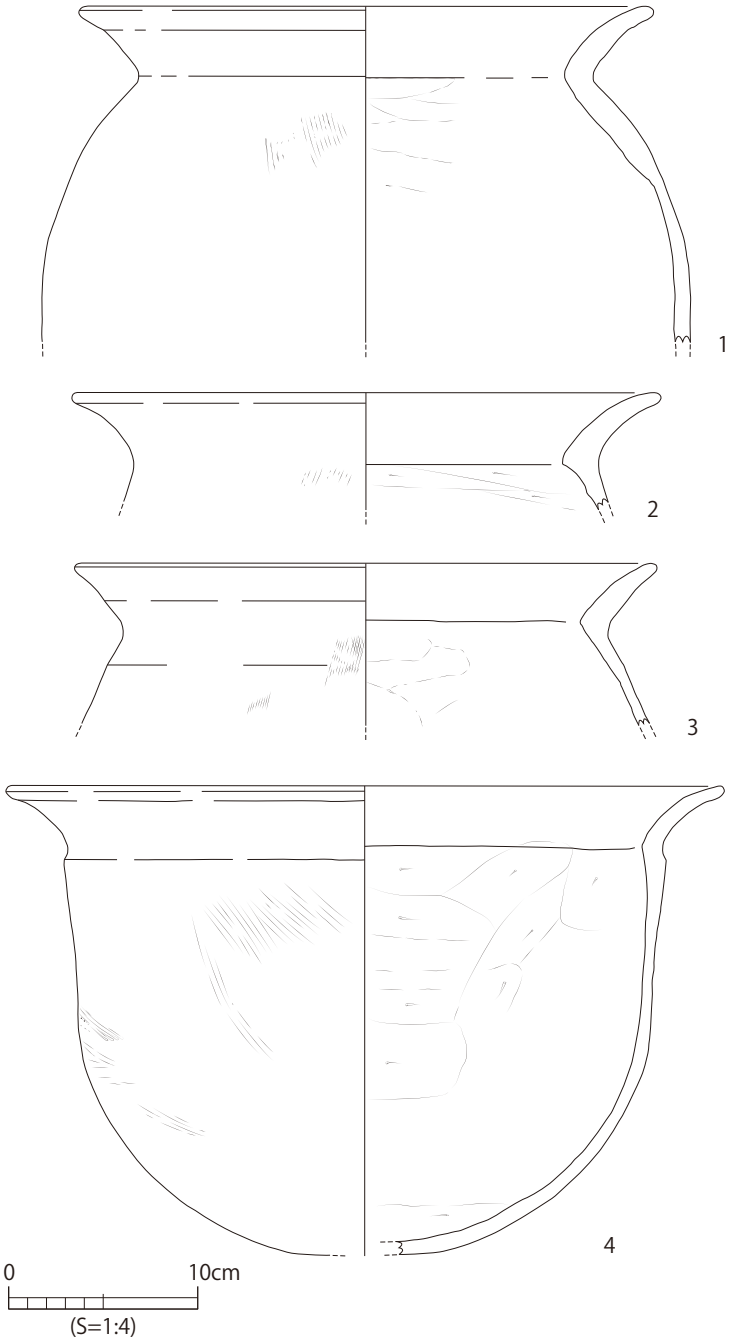
第 30 図 1 ～ 4 は土師器甑である。1 はかなり歪んでいるが、ほぼ全形が復元できる。口縁部は上方に広がり、体部内面のヘラケズリ調整により、口縁部と体部の境を明瞭にしている。把手は二方向にあり、断面は楕円形を呈する。先端はやや窄まる。底部端部には二方向に径 1㎝程度の円孔が開く。円孔は把手の真下ではなく、ずれている。2 にも本来は把手があると思われるが接合する破片がなかった。口縁部と底部の 2 つの破片を図上復元しているため、器高は復元である。底部端部には円孔が開く。口縁部は短く、上方に伸びる。3 は底部の破片で、底部端部に径 1㎝弱の円孔が開く。4 は直線的な体部で、甑と判断したが、口径から移動式竈の受部や甕の可能性もある。長く器壁の厚い口縁部が上方に広がる。

5 ～ 8 は口径が大きいことから移動式竈の受部の口縁部と判断したが、甕や甑も可能性がある。5 の口縁部は長く、器壁が薄く、斜め上方に広がる。体部がハの字に広がる。6 は口縁部が歪んでいるが、外側に広がり、端部は水平になる。7 は長い口縁部がほぼ水平に広がる。内面は口縁部と体部の境が明瞭である。口縁部外面に黒斑がある。体部が直線上で、甑の可能性も高い。8 は口縁部の器壁が厚く、内面はヘラケズリ調整により、体部との境を明瞭にしている。

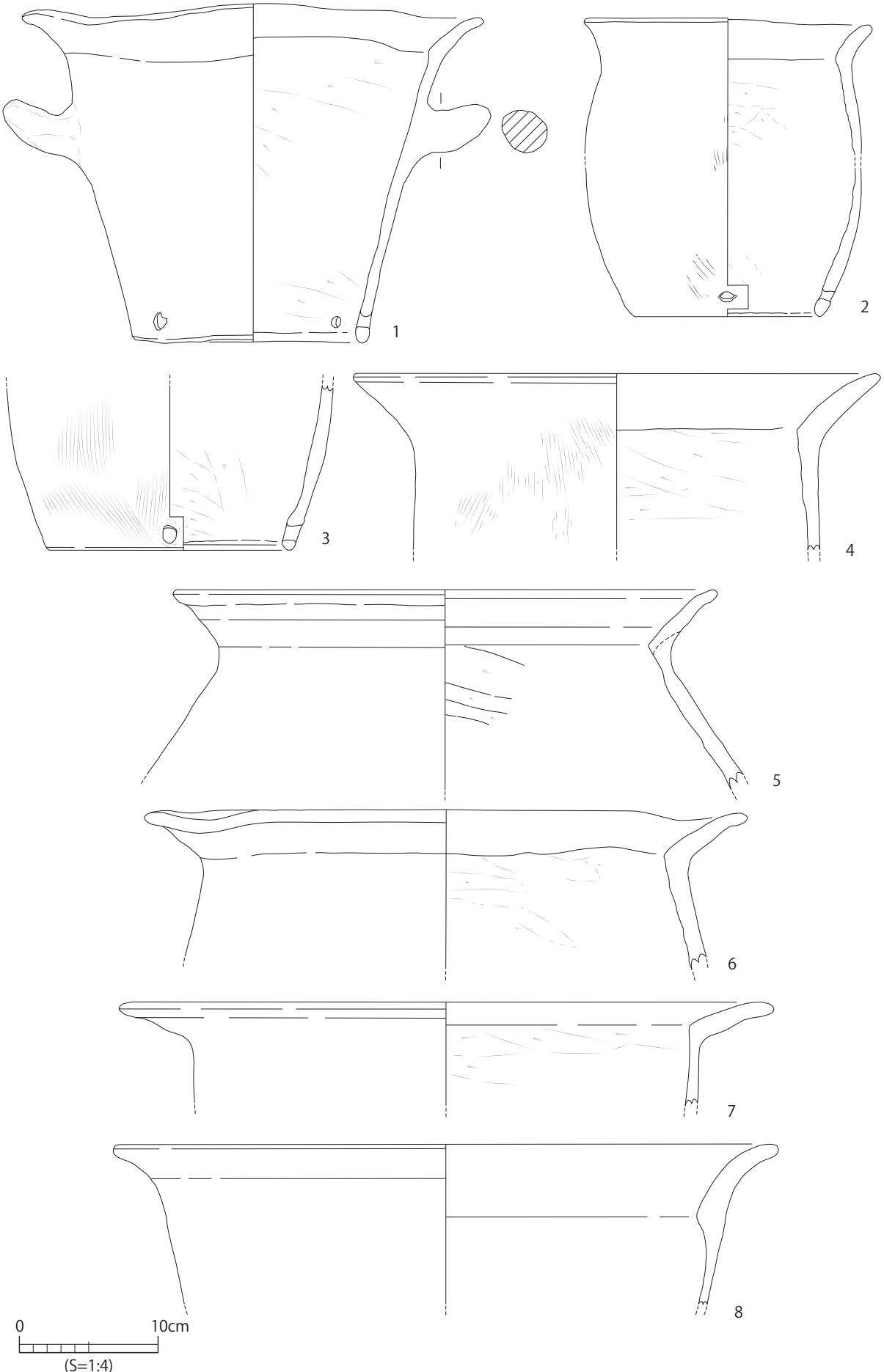
第 27 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 出土遺物実測図 1 (S=1:3,1:4)



第 28 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 出土遺物実測図 2 (S=1:4)



第 29 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 出土遺物実測図 3 (S=1:4)



第 30 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 8(DT08) 出土遺物実測図 4 (S=1:4)

SD77・SD127・SD200（第 31 図）

SD77 は加工段 3・4 の東側の斜面、B2 ～ B5 グリッドに位置する溝跡である。等高線に沿って、幅 1 ～ 1.5m、長さ 29m にわたり検出した。山側（西側）を L 字状に掘削し、溝状にするため水田側（東側）の深さは基本的に浅い。北側は複雑になり、山側に SD200 が掘削され、2 段堀状を呈する。SD200 は長さ 180㎝、幅 44㎝、深さ 11㎝を測る。また SD77 の途中から東側に浅い溝（SD127）が分岐する。SD127 は残存長 560㎝、残存幅 49㎝、深さ 12㎝と浅く、東側に向け低くなる。覆土は灰褐色粘質土が堆積していた。SD127 からは陶胎染付（第 24 図 18）が出土した。

SD77 からは 4 カ所の石の集積箇所が確認できた。一番南側は高さ 40㎝、長さ 3.2m に渡り、西側の斜面に貼り付けるように石材が確認できた。大きい石は 68 × 40㎝を測り、小さい石は 2 段に積み上げていた。その石列の北側から、12㎝ほどの拳大の石が 1.28 × 0.8m の範囲から確認できた。石の周辺を精査したが、堀方は確認できなかった。その集石の約 3m 北側からは 16㎝ほどの拳大の石が 1.26 × 0.64m の範囲から確認できた。石の周辺を精査したが、堀方は確認できなかった。最も北側、SD200 の下段には溝の一番深い場所から 60 × 50㎝ほどの石が一列に並んで確認できた。さらに SD77 が広がっている場所にも床面から石材が確認できた。一列に並んでいた石は暗渠の蓋の可能性も考えられるが、これら集積の石の詳細な性格は不明である。

SD77 の覆土は灰褐色粘質土（1 層）があり、シルト質であった。最下層には灰褐色砂質土（4 層）のシルト質であり、流水があったと考えられ水路等の用途であった可能性が思量される。溝内からは須恵器（第 24 図 15）や肥前陶器（第 24 図 16）が出土して江戸時代には埋没していたと考えられる。

SD77・SD127 出土遺物（第 24 図 15・16・18）

SD77 からは 15・16 が、SD127 からは 18 が出土した。第 24 図 15 は須恵器坏蓋である。つまみ径は 3.8㎝である。16 は肥前陶器皿である。高台内は露胎で、高台に砂目がある。内面は輪状釉剥ぎされ、中央のみ施釉が残る。17 世紀後半。

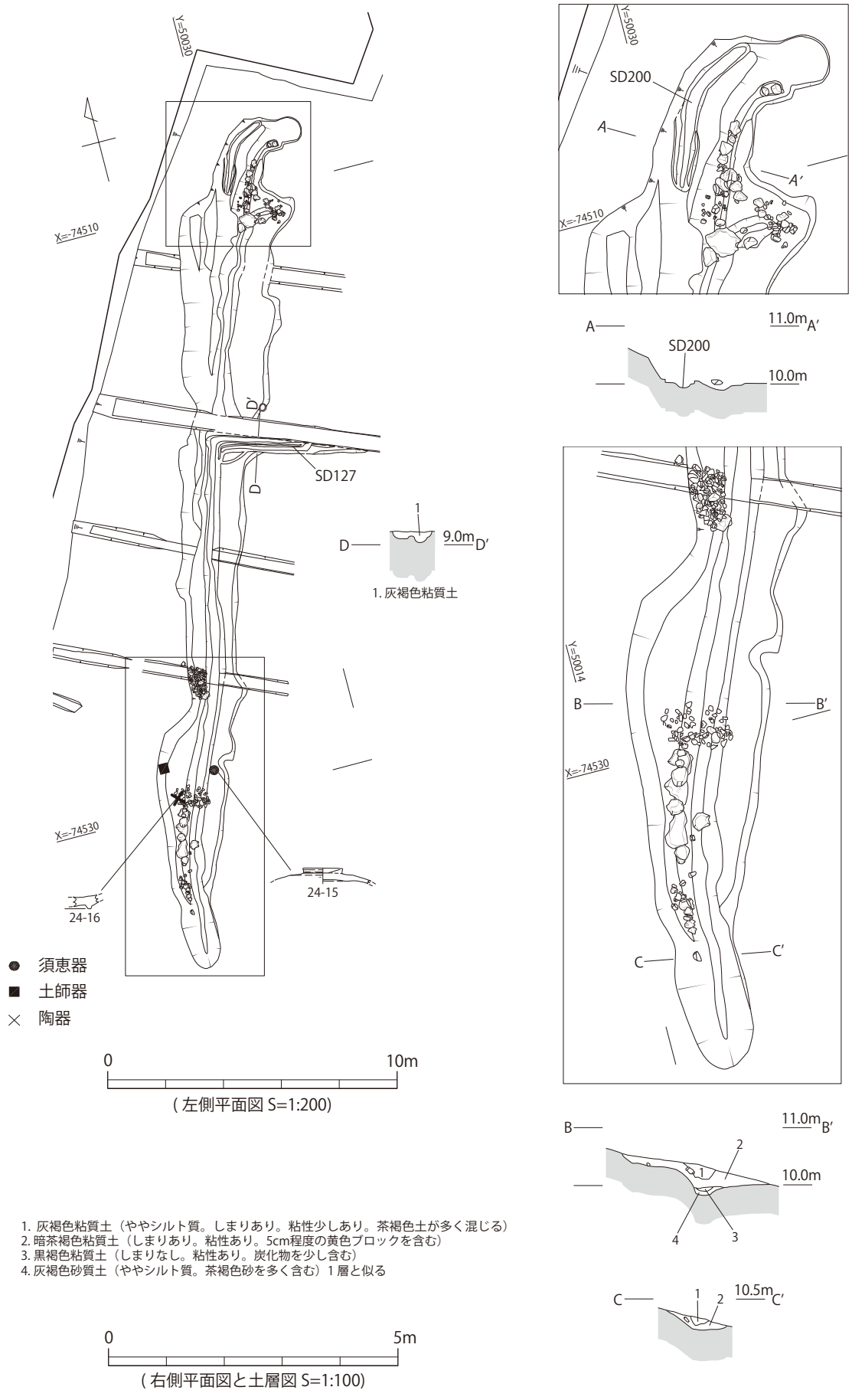
第 24 図 18 は陶胎染付碗である。全面施釉され、外面に崩れた草花文を描く。17 世紀末から 18 世紀。

SD117・SD194（第 32 図）

SD117・SD194 は一連の溝で、C3・C4 グリッドに位置し、加工段 1 と重なって検出された。溝は加工段 1 を切り込み、長さ 6.36m、幅 35 ～ 60㎝、深さ 13 ～ 21㎝を測る。溝内は平坦であるが、ピットが検出された場所もある。遺構の性格の詳細は不明であるが、本来は建物の山側に掘削した排水溝の可能性がある。溝内からは中世の土師器皿（第 24 図 17）が出土した。なお、調査を 2 段階で行ったため、トレンチより北側は別の遺構名（SD194）として検出した。

SD117 出土遺物（第 24 図 17）

第 24 図 17 は土師器皿であり、全面風化しているため調整は不明。底部中央の器壁が薄くなる。



第 31 図　浅柄Ⅲ遺跡 SD77・127・200 実測図 (S=1:200,1:100)

SD123（第 13 図）

SD123 は C3 グリッドに位置し、加工段 1 と重なって検出された。溝は加工段 1 を切り込み、長さ 174㎝、幅 44㎝、深さ 8㎝を測る。溝内は平坦であるが、底面からピットが 1 カ所検出した。遺構の性格の詳細は不明である。溝内から遺物は出土しなかった。

SD181（第 32 図）

SD181 は C4 グリッドに位置し、SD117 の西側に並行するように検出された。長さ 364㎝、幅 56㎝、深さ 8㎝を測る。覆土は暗灰褐色の粘質土が堆積していた。溝内からの出土遺物はない。

SD134・SK192（第 32 図）

SD134 は B3・B4 グリッドに位置し、加工段 1 の西側に位置する。SD117 や SD181 と並行に掘削されている。調査を 2 段階で行ったため、トレンチより北側は別の遺構名（SK192）として検出したが、SD134 と SK192 は一体のものと考えられる。長さ 6.38m、幅は南側で 48㎝、北側で 1.16m、深さ 15㎝を測る。北側の幅がやや広い。SD127 により中央部が削平されている。北側では拳大の石が溝から出土した。溝内からはピットが検出された箇所もある。遺構の性格の詳細は不明である。溝内からは中国製青磁碗（第 24 図 19）が出土した。

SK192 出土遺物（第 24 図 19）

第 24 図 19 は中国製青磁無文碗である。全面施釉され、緑灰色を呈する。15 世紀頃か。

SK107（第 32 図）

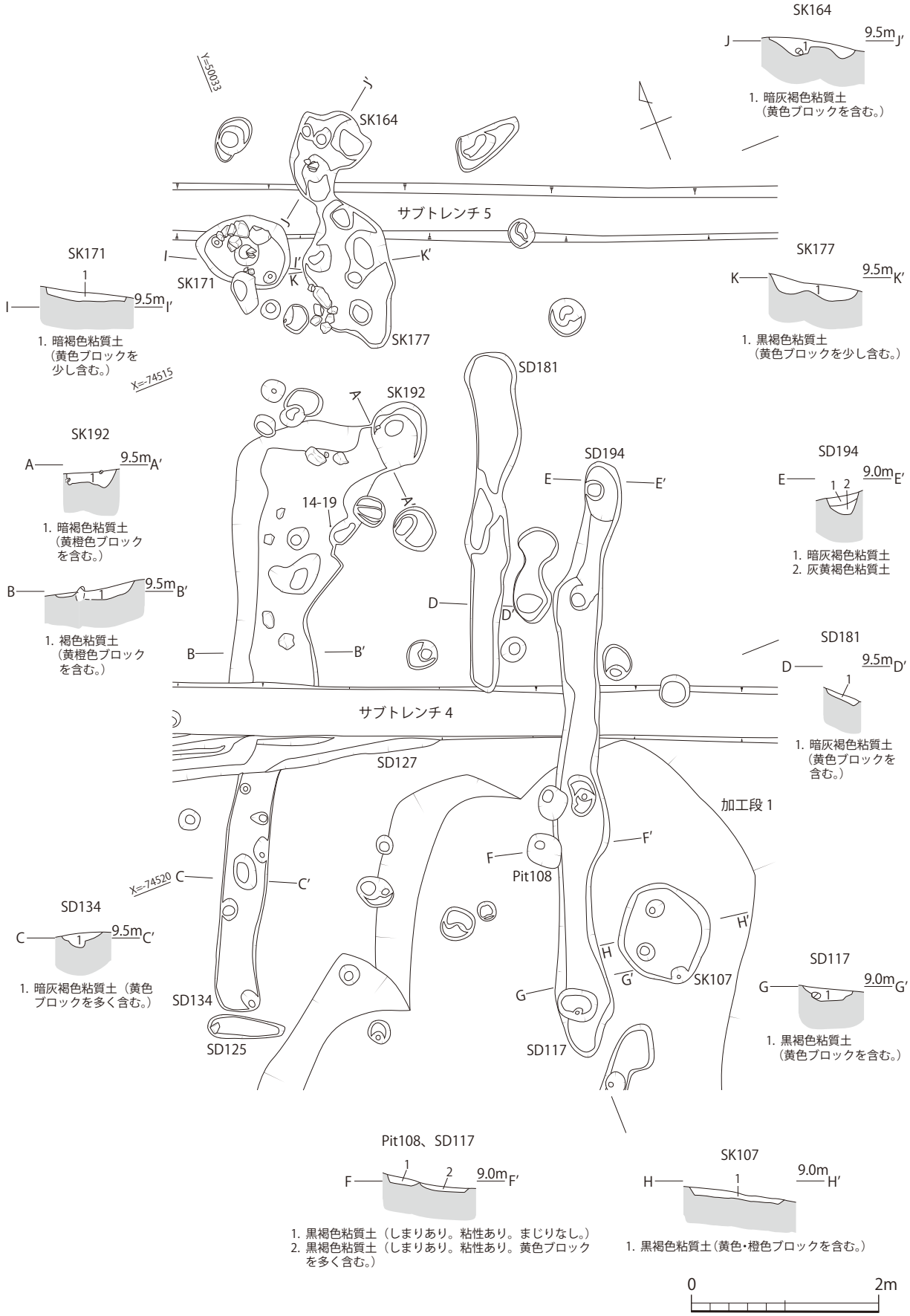
SK107 は C3 グリッドに位置し、加工段 1 と重なって検出された土坑である。土坑は加工段 1 を切り込み、長さ 111㎝、幅 102㎝、深さ 9㎝を測る。平面形は円形である。土坑内からはピットが検出された箇所もある。遺構の性格の詳細は不明である。覆土は黒褐色土が堆積していた。土坑内から遺物は出土しなかった。

SK164（第 32 図）

SK164 は B4 グリッドに位置し、加工段 1 の北側に位置する。周囲には SK171、SK177 がある。SK164 は不整形で、長さ 102㎝、幅 79㎝、深さ 19㎝を測る。床面には二段堀状のピットが 4 カ所確認できた。覆土は暗灰褐色土が堆積していた。土坑内から遺物は出土しなかった。

SK171（第 32 図）

SK171 は B4 グリッドに位置し、加工段 1 の北側、SK164 の西側にある。SK171 は楕円形で、長さ 102㎝、幅 74㎝、深さ 10㎝を測る。床面中央には径 28㎝のピットがある。土坑内からは拳大から人頭大の石が北壁に沿って並ぶように検出された。覆土は暗褐色土が堆積していた。土坑内から遺物は出土しなかった。



第 32 図　浅柄Ⅲ遺跡 SD117・134・181・194、SK107・164・171・177・192 実測図 (S=1:60)

SK177（第 32 図）

SK177 は B4 グリッドに位置し、加工段 1 の北側に位置する。SK164 との切り合いは明確ではなかった。SK177 は不整形で、長さ 170㎝、幅 94㎝、深さ 16㎝を測る。床面には二段堀状のピットが確認できた。南西壁からは石が 6 個集中して出土したが、性格は不明である。覆土は黒褐色土が堆積していた。土坑内から遺物は出土しなかった。

SD248・SD249（第 33 図）

SD248・SD249 は調査区西端、加工段 6 の西側、B6 グリッドに位置する。この周辺は後世に削平されており、遺構の一部のみ残存していると考えられる。SD248 は調査区外に続いており、検出長 246㎝、幅 26㎝、深さ 5㎝を測る。SD249 は SD248 の北側 0.6m に位置し、長さ 148㎝、幅 18㎝、深さ 4㎝を測る。両溝とも浅く、覆土は暗灰褐色土が堆積していた。溝内から遺物は出土しなかった。

Pit237（第 33 図）

Pit237 は SD249 の東側、B6 グリッドに位置する。この周辺は後世に削平されており、遺構の一部のみ残存していると考えられる。Pit237 は円形で、長さ 58㎝、幅 49㎝、深さ 18㎝を測る。14 × 8㎝の石が北東側から検出された。覆土は暗茶褐色土が堆積していた。ピット内から遺物は出土しなかった。

SK55（第 33 図）

SK55 は調査区南側、加工段 3 の東側、B1 グリッドに位置する。周辺の斜面にはピットや小さい土坑があった。SK55 は長方形で、長さ 130㎝、幅 76㎝、深さ 36㎝を測る。土坑内には 10㎝程度の石が詰まっていた。東側には長さ 72㎝、幅 42㎝、深さ 22㎝を測る上面が平らな石材があった。覆土は黒褐色土が堆積していた。土坑内から遺物は出土しなかった。

SK169（第 33 図）

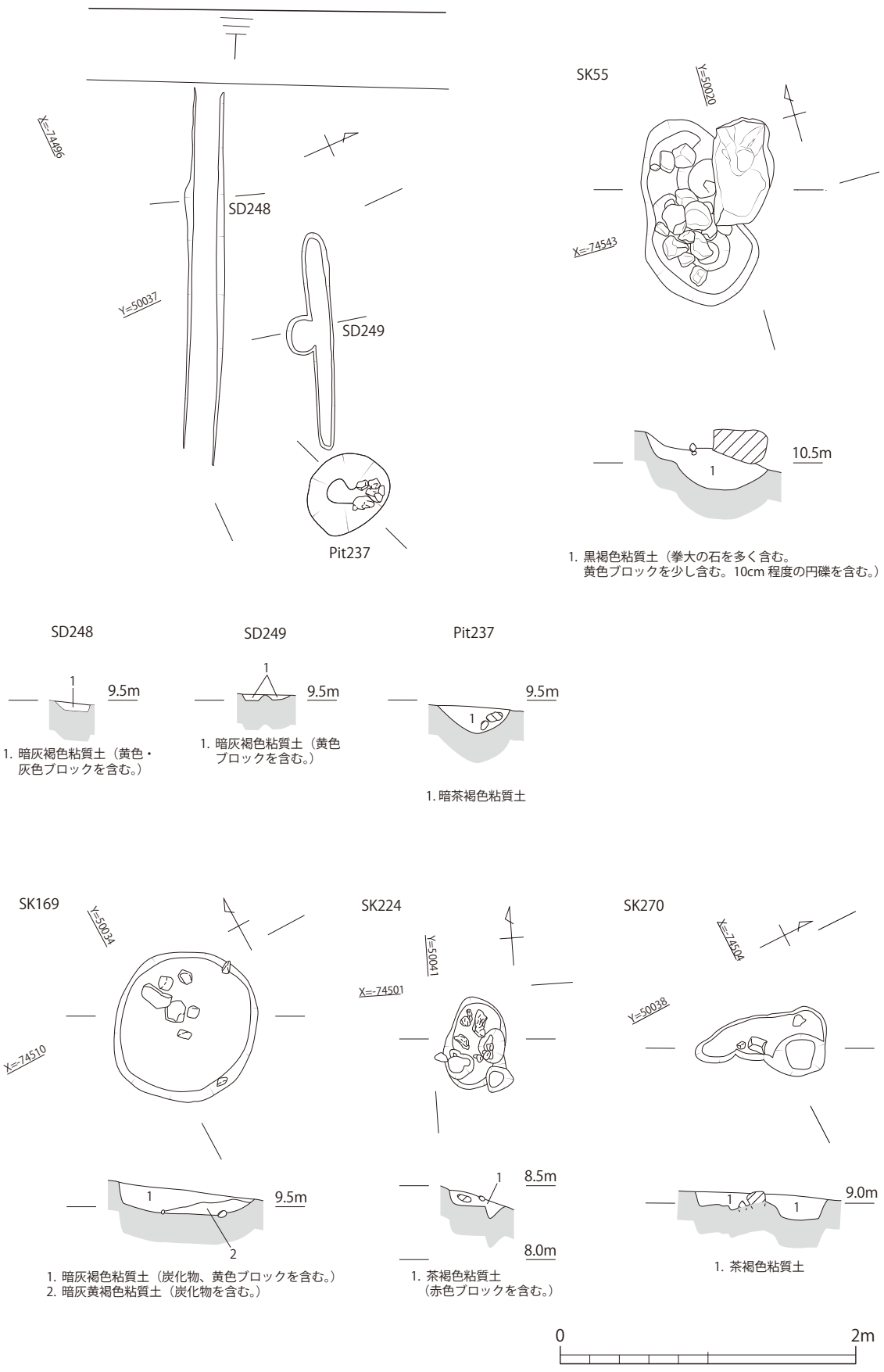
SK169 は調査区中央、SD77 の東側、B4・B5 グリッドに位置する。SK169 の平面形は円形で、長さ 102㎝、幅 96㎝、深さ 16㎝を測る。土坑内には 8 ～ 20㎝程度の石があった。覆土は暗灰褐色土と炭化物を含む暗灰黄褐色土が堆積していた。土坑内から土師器甕の小片が出土した。

SK224（第 33 図）

SK224 は調査区北側中央、DT02 の西側、C6 グリッド付近に位置する。SK224 は楕円形に近く、長さ 62㎝、幅 46㎝、深さ 11㎝を測る。土坑内には 4 ～ 18㎝程度の石があり、一部の石は被熱していた。石の 1 つは長さ 18㎝、幅 8㎝、厚さ 6㎝のスコリアである。底面はピットが重複し凸凹であった。覆土は茶褐色土が堆積していた。土坑内から遺物は出土しなかった。

SK270（第 33 図）

SK270 は調査区中央、DT02 の西側、B5 グリッドに位置する。SK270 は不整形で、長さ 88㎝、



第 33 図　浅柄Ⅲ遺跡 SD248・249、SK55・169・224・270、Pit237 実測図 (S=1:40)

幅 48㎝、深さ 16㎝を測る。土坑内には５～ 12㎝程度の石があり、底面はピットが重複し、二段堀状を呈する。覆土は茶褐色土が堆積していた。土坑内から遺物は出土しなかった。

Pit87（第９図）

Pit87 は B2 グリッドに位置し、加工段２の南西斜面に位置する。ピットは、長さ 59㎝、幅 31㎝、深さ 10㎝を測る。覆土は黒褐色土が堆積していた。ピット内から遺物が出土した。

Pit87 出土遺物（第 24 図 20）

第 24 図 20 は中国製白磁皿である。全面施釉され、内面底部と体部の境は沈線状になる。大宰府分類皿Ⅸ類（太宰府市 2000）。

掘立柱建物跡１（第 34 図）

掘立柱建物跡１は加工段３の東側の斜面、B1 グリッドに位置する。１×１間の構造である。Pit04、Pit06、Pit10、Pit12 からなり、規模は南北 1.68m、東西 1.08m を測る。覆土は黒褐色の粘質土が堆積していた。Pit12 は長軸 1.0m、短軸 0.58m とやや大きく、二段堀状を呈し、下段の直径 34㎝を測る。ピット内には根固めのためか 30 × 22㎝の石材があった。建物の性格は不明である。柱穴内から遺物の出土はない。周辺の出土遺物から古代から中世と推測できる。

掘立柱建物跡２（第 35 図）

掘立柱建物跡２は加工段３の東側の斜面、掘立柱建物跡１の北側、B2 グリッドに位置する。１×１間の構造と推測される。Pit24、Pit31、Pit88 からなり、南東柱は確認できなかった。規模は南北 1.2m、東西 1.02m を測る。覆土は暗灰から黒褐色の粘質土が堆積していた。Pit88 は Pit89 を完掘後に確認できたことから、Pit89 が新しいと判断した。各柱穴は直径 30㎝程度で、Pit24 は深さ 6㎝と浅く、建物の柱としては貧弱である。後世に上層が削平される等が考えられる。建物規模も小さく、簡易的な施設であった可能性がある。柱穴内から遺物の出土はない。周辺の出土遺物から古代から中世と推定できる。

掘立柱建物跡３（第 36 図）

掘立柱建物跡３は加工段３の北東側の斜面、B2 グリッドに位置する。掘立柱建物跡２と重なり合うように存在する。１×２間の構造と推測される。Pit21、Pit26、Pit33、Pit36、Pit35、Pit34 からなり、Pit33 と Pit34 を結んだ短軸が長軸とずれているため、建物として復元できるかやや疑問が残る。規模は南北 3.3m、東西 1.26m を測る。覆土は灰から黒褐色の粘質土が堆積していた。各柱穴は直径 25 ～ 30㎝程度で、Pit34 は深さ 4㎝と浅く、建物の柱としては貧弱である。後世に上層が削平される等が考えられる。建物規模も小さく、簡易的な施設であった可能性がある。柱穴内から遺物の出土はない。掘立柱建物跡１と主軸の方位が近い。周辺の出土遺物から古代から中世と推定できる。

掘立柱建物跡 4（第 37 図）

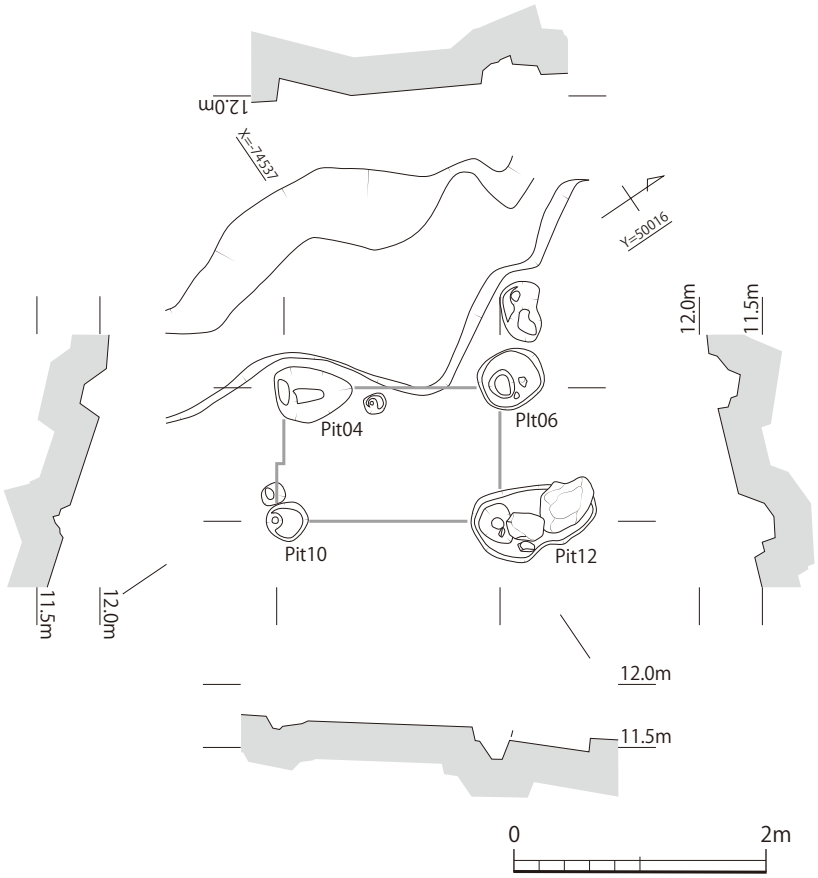
掘立柱建物跡 4 は加工段 5 の南側の斜面、B5・B6 グリッドに位置する。1 × 2 間の構造と推測される。Pit214、Pit219、Pit216、Pit225、Pit220 からなり、南西隅の柱跡は未確認である。規模は南北 2.4m、東西 1.2m を測る。覆土は茶褐色から黒褐色の粘質土が堆積していた。各柱穴は直径 40 ～ 60㎝程度で、深さが 9 ～ 12㎝である。Pit219 は 62 × 86㎝の楕円形で二段掘り状を呈し、深さ 21㎝を測る。Pit225 は 42 × 96㎝と楕円形で、深さ 29㎝を測る。Pit225 から須恵器や被熱した石が出土した。周辺の出土遺物から古代から中世と推定できる。

Pit225 出土遺物（第 24 図 21）

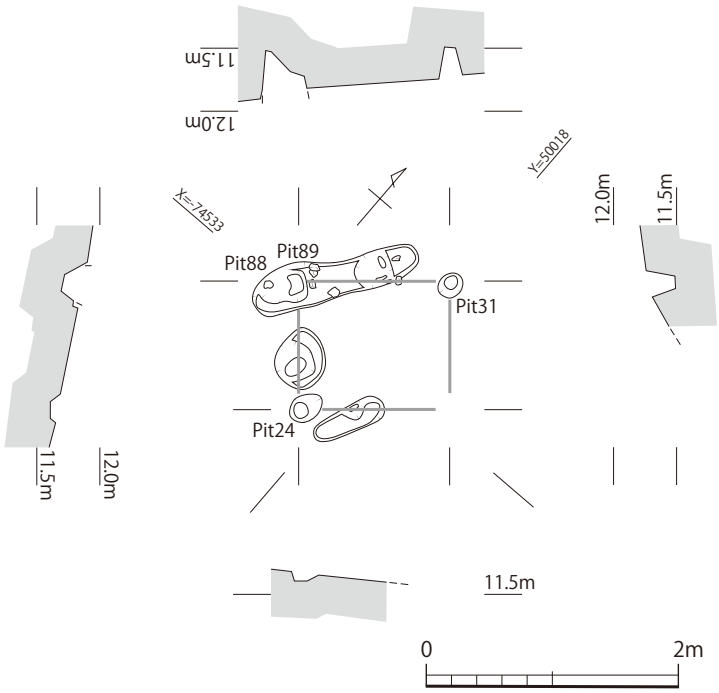
第 24 図 21 は須恵器坏蓋で、つまみは残存しない。口縁部は受部を持ち、口縁部内外面には自然釉がかかる。つまみ付近まで天井部は回転ナデ調整である。

掘立柱建物跡 5（第 38 図）

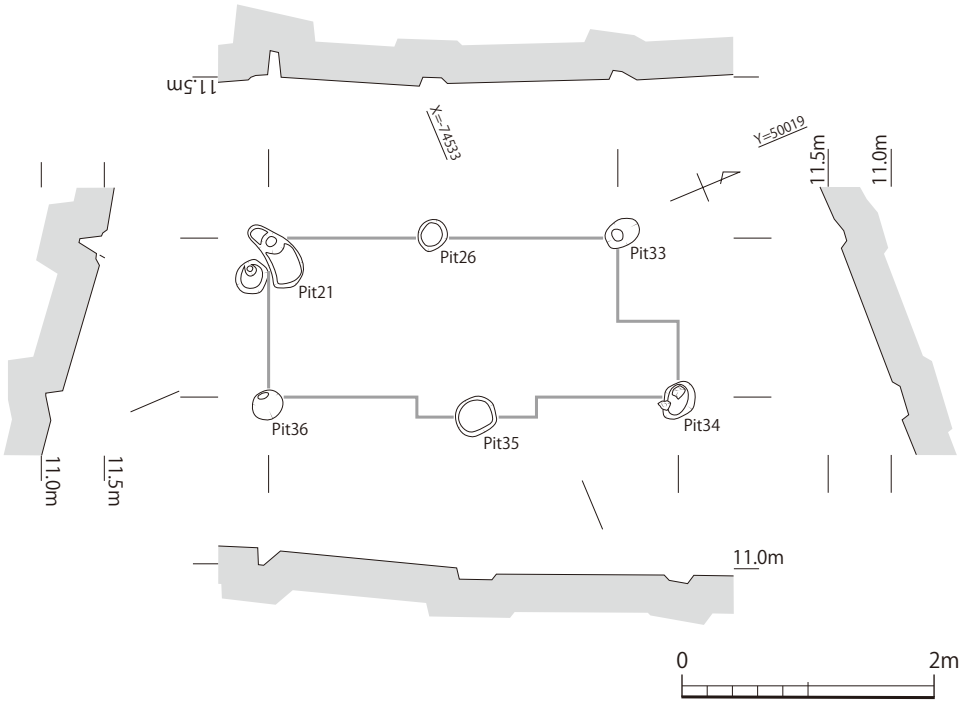
掘立柱建物跡 5 は加工段 5 の南側の斜面、B6 グリッドに位置する。掘立柱建物跡 4 の北側にある。梁間 1 間、桁行が西側は 2 間、東側は 1 間となり、掘立柱建物跡として復元することは難しいが、西側の柱間が通っていたので、強引であるが復元した。Pit232、Pit254、Pit240、Pit262、Pit236 からなり、Pit232 と Pit236 を結んだ短軸は長軸とずれている。規模は南北 1.68m、東西 1.08m を測る。覆土は茶褐色の粘質土が堆積していた。各柱穴は直径 20 ～ 30㎝程度で、Pit240



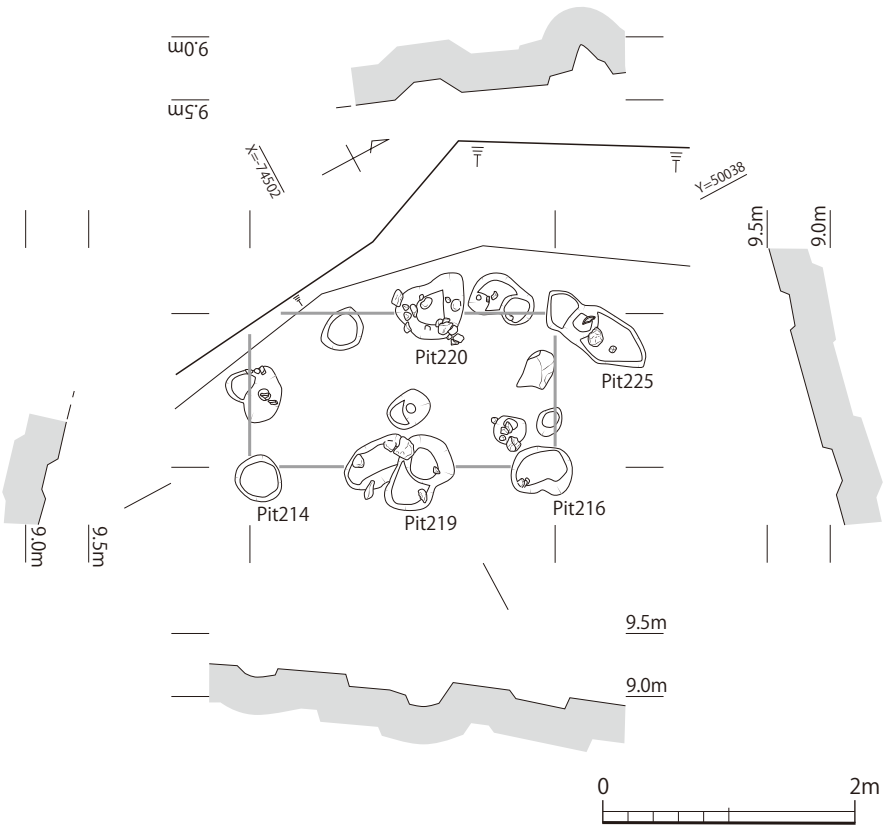
第 34 図　浅柄Ⅲ遺跡 掘立柱建物跡 1 実測図 (S=1:60)



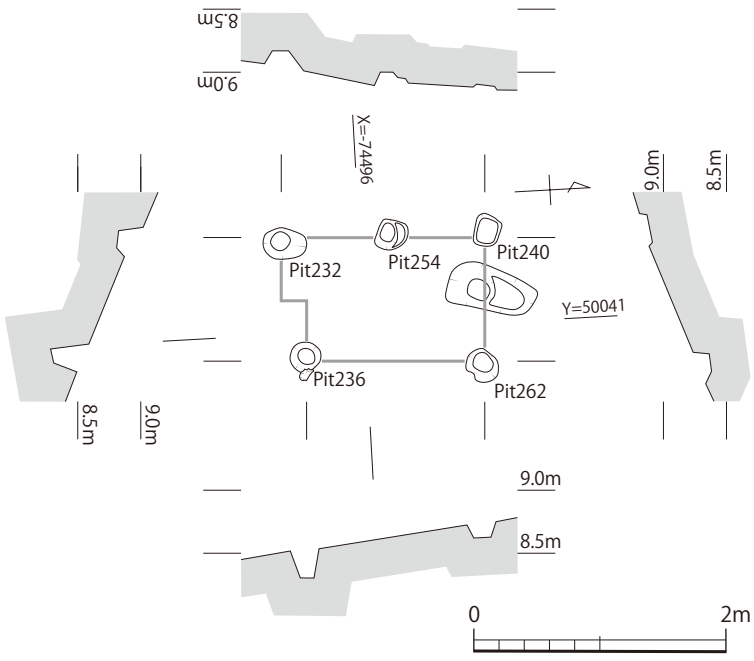
第 35 図　浅柄Ⅲ遺跡 掘立柱建物跡 2 実測図 (S=1:60)



第 36 図　浅柄Ⅲ遺跡 掘立柱建物跡 3 実測図 (S=1:60)



第 37 図　浅柄Ⅲ遺跡 掘立柱建物跡 4 実測図 (S=1:60)



第 38 図　浅柄Ⅲ遺跡 掘立柱建物跡 5 実測図 (S=1:60)

は深さ 5㎝と浅いが、他は 10 ～ 26㎝の深さがある。Pit236 から土師器甕の小片が出土した。周辺の出土遺物から古代から中世と推定できる。

柵跡 1（第 39 図）

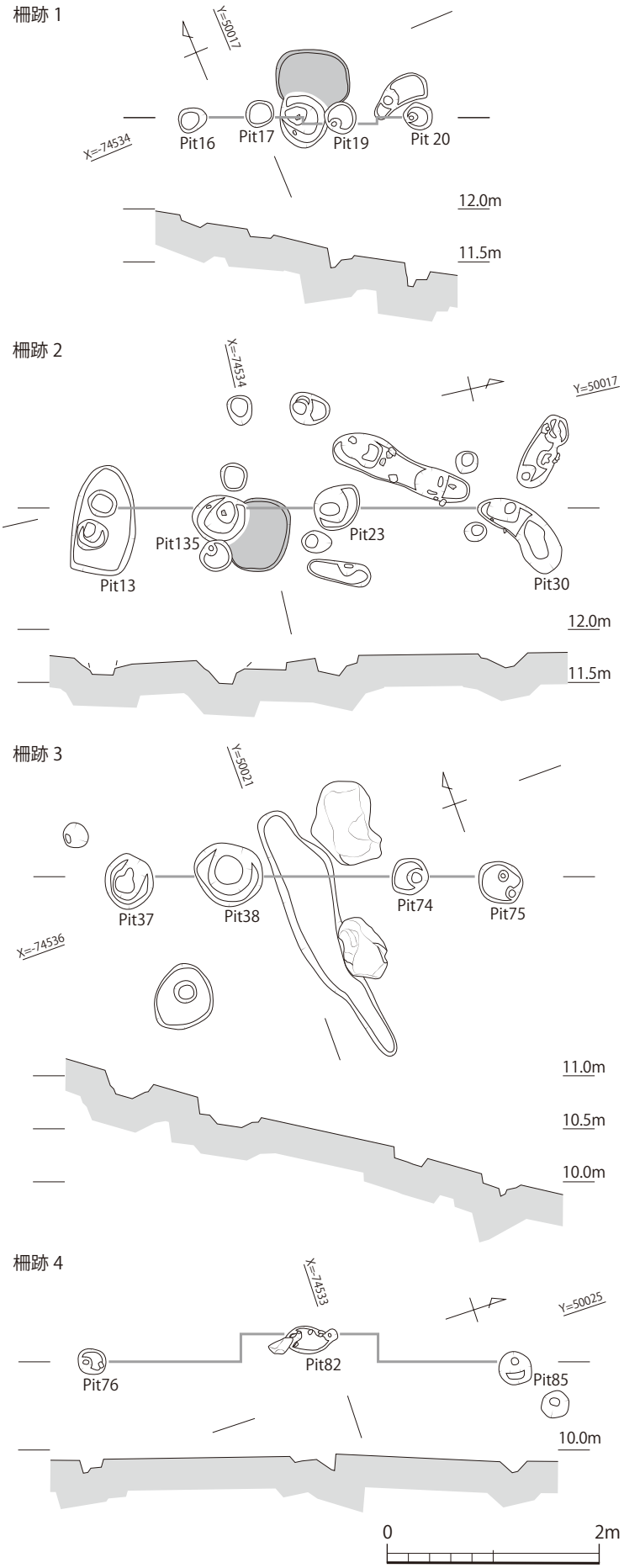
柵跡 1 は加工段 3 の東側の斜面、B2 グリッドに位置し、3 間の構造である。斜面に対して直行し、Pit16、Pit17、Pit19、Pit20 からなり、規模は 2.22m を測る。柱間距離は 0.66 ～ 0.76m とばらつきがある。覆土は黒褐色の粘質土が堆積していた。各柱穴は直径 26 ～ 30㎝程度で、深さ 10㎝ 程度であるが、Pit20 は深さ 17㎝を測る。柱穴内から遺物の出土はない。周辺の出土遺物から古代から中世と推測できる。

柵跡 2（第 39 図）

柵跡 2 は加工段 3 の東側の斜面、B2 グリッドに位置し、3 間の構造である。斜面に対して並行し、Pit13、Pit135、Pit23、Pit30 からなり、規模は 3.9m を測る。柱間距離は 1.1 ～ 1.64m とばらつきがある。覆土は黒褐色の粘質土が堆積していた。各柱穴は直径 15 ～ 50㎝程度で、深さが 4 ～ 14㎝ 程度と規模にばらつきがある。周辺の出土遺物から古代から中世と推測できる。

柵跡 3（第 39 図）

柵跡 3 は加工段 3 の東側の斜面、B2 グリッドに位置し、3 間



第 39 図　浅柄Ⅲ遺跡 柵跡 1 ～ 4 実測図 (S=1:60)

の構造である。柵跡 1 と同様、斜面に対して直行する。Pit37、Pit38、Pit74、Pit75 からなり、規模は 3.6m を測る。柱間距離は 0.86 ～ 1.72m とばらつきがある。覆土は黒褐色の粘質土が堆積していた。各柱穴は直径 34 ～ 64㎝程度、深さ 10 ～ 20㎝ 程度と比較的しっかりしている。柱穴内から遺物の出土はない。周辺の出土遺物から古代から中世と推測できる。

柵跡 4（第 39 図）

柵跡 4 は SD77 の東側の緩斜面、B2 グリッドに位置し、2 間の構造である。斜面に対して並行で、SD77 とも並行である。Pit76、Pit82、Pit85 からなり、規模は 4.02m を測る。柱間距離は 1.96 ～ 2.0m とばらつきがある。覆土は暗灰色から黒褐色の粘質土が堆積していた。各柱穴は直径 25㎝程度で、深さ 5 ～ 10㎝ 程度と比較的小さい柱穴である。柱穴内から遺物の出土はない。時期は不明である。

柵跡 5（第 40 図）

柵跡 5 は調査区中央、掘立柱建物跡 4 の東側の斜面、B6 グリッドに位置し、2 間の構造である。斜面に対して並行で、Pit275、Pit269、Pit267 からなり、規模は 3.0m を測る。柱間距離は 1.5 ～ 1.52m である。覆土は茶褐色から黒褐色の粘質土が堆積していた。各柱穴は直径 16 ～ 26㎝程度で、深さ 6 ～ 22㎝である。Pit275 からは土師器が出土した。周辺の出土遺物から古代から中世と推測できる。

柵跡 6（第 40 図）

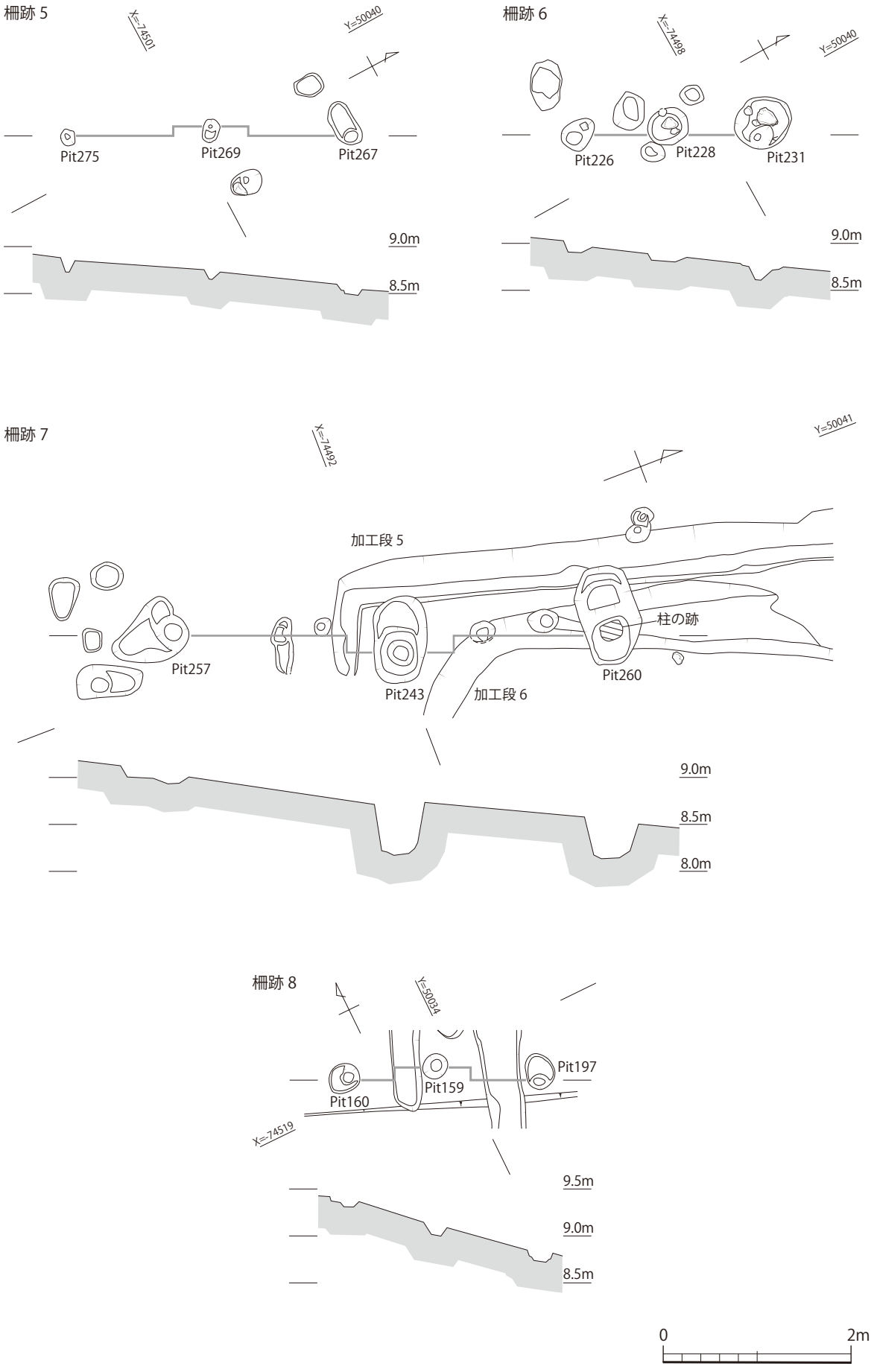
柵跡 6 は調査区中央、掘立柱建物跡 4 の北側の斜面、B6 グリッドに位置し、2 間の構造である。斜面に対して並行し、Pit226、Pit228、Pit231 からなり、規模は 2.04m を測る。柱間距離は 0.96 ～ 1.04m である。覆土は黒褐色から淡黄茶色の粘質土が堆積していた。Pit226、Pit228 は直径 30 ～ 40㎝程度で、深さ 7 ～ 9㎝ 程度であるが、Pit231 は直径 56㎝とやや大きく、深さ 8㎝を測る。柱穴には拳大程度の石があるが、遺物の出土はない。時期は不明である。

柵跡 7（第 40 図）

柵跡 7 は調査区北西側の B7 グリッドに位置し、2 間の構造である。斜面に対して並行し、Pit257、Pit243、Pit260 からなり、規模は 4.8m を測る。柱間距離は 2.26 ～ 2.44m とばらつきがある。覆土は黒褐色から淡黄茶色の粘質土が堆積していた。各柱穴は 60 ～ 100㎝と大型で、深さ 50㎝を測り、Pit243 や Pit260 は堀方形が方形でしっかりしている。Pit260 では一辺 24㎝の柱痕跡が確認できた。柱穴内からの遺物の出土はない。時期は不明である。

柵跡 8（第 40 図）

柵跡 8 は調査区中央、加工段 1 の北側、B4 グリッドに位置し、2 間の構造である。斜面に対して直行し、Pit160、Pit159、Pit197 からなり、規模は 2.1m を測る。柱間距離は 0.96 ～ 1.1m である。覆土は黒褐色から暗灰色の粘質土が堆積していた。各柱穴の規模は直径 25 ～ 30㎝程度で、深さ 6 ～ 11㎝ 程度である。柱穴内からの遺物の出土はない。時期は不明である。



第 40 図　浅柄Ⅲ遺跡 柵跡 5 ～ 8 実測図 (S=1:60)

杭列（第 41 図）

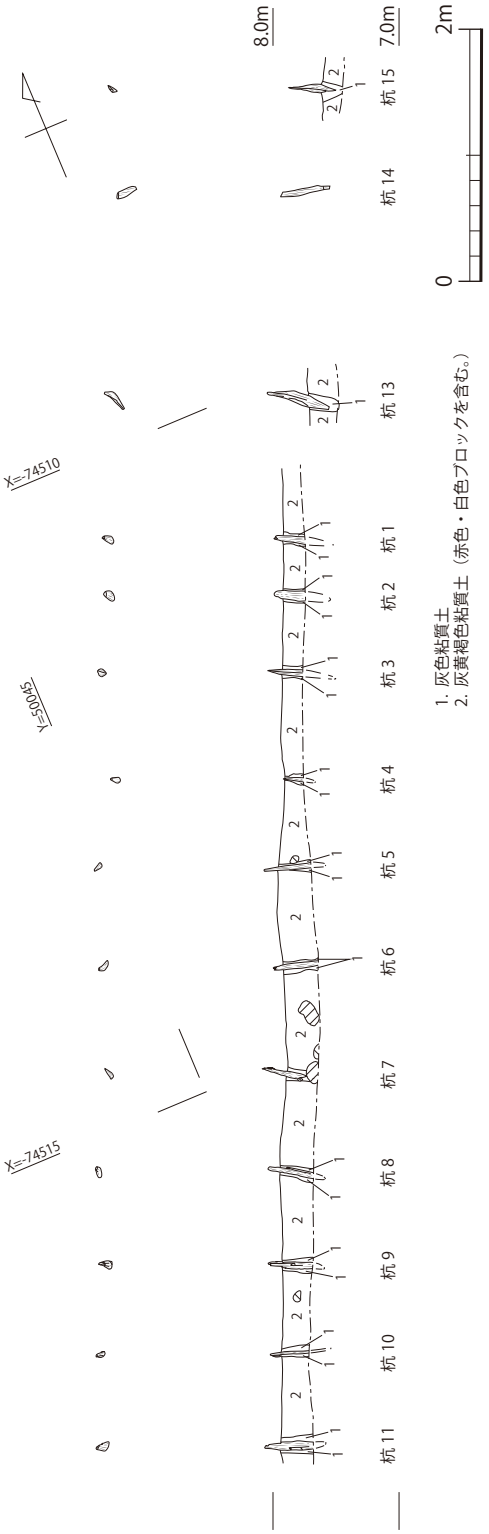
杭列は調査区東側、DT02 の東側、C4・C5 グリッドに位置し、13 間の構造である。斜面に対して並行にあり、直接杭を打ち込んでおり、堀方は確認できなかった。土層観察では杭の周囲に灰色粘質土が確認できた。規模は 10.7m を測り、柱間距離は 0.44 ～ 1.7m であり、杭 13 と杭 14 の間が 1.7m とやや広い。杭は残存長が 28 ～ 54㎝、直径が３～ 8㎝で、先端をとがらせていた。杭７は下に石があり、打ち込みの深さが浅い。包含層を打ち込んでいるため、7 世紀以降の杭列と考えられる。詳細な時期は不明である。

４．包含層出土の遺物

浅柄Ⅲ遺跡の包含層からは 7 世紀の須恵器がコンテナ 10 箱、土師器 23 箱、土製品（移動式竈・土製支脚等）5 箱、陶磁器 1 箱、石器 1 箱、動物遺存体 1 点[(1)]が出土している。包含層から出土した弥生土器、土師器、須恵器、砥石や土錘等土製品の代表的な遺物を掲載する。

土器溜 2（DT02）（第 42・43 図）

包含層からは調査区全域から遺物が出土しているが、調査区中央 C4・C5 グリッド付近から破片の大きな遺物が出土した。この付近には上方から転落してきたと考えられる人頭大から 1m ほどの石が集中して検出されている。この周辺から出土した遺物を DT02 として取り上げた。転石の下からも遺物が出土することから転石の時期は遺物が示す時期、あるいは遺物も転石と同時に上方から転落してきた可能性もある。第８図の等高線の間隔は広く、この周辺の地形が平坦であり、転石や遺物が堆積しやすかったと考えられる。



第 41 図　浅柄Ⅲ遺跡 杭列実測図 (S=1:60)

土器溜 2 出土遺物（第 44 図1～ 12、第 45 図1～ 17）

第 44 図 1 ～ 10 は須恵器である。1 は坏蓋である。つまみ径は 3.6㎝を測る。天井部はヘラケズリ後ナデ調整である。口縁部端部は欠損している。2、3 は小型の坏身である。口径は 8㎝で、低い立ち上がりを持つ。底部はナデ調整で、3 には板目状圧痕があり、体部外面にヘラ記号「×」

(1)　広島大学総合博物館　石丸恵利子氏から「ウシもしくはウマ等の大型哺乳類の四肢骨の骨幹部片である。形態的に、上腕骨もしくは大腿骨の骨幹部の可能性がある。解体痕等の人為的な痕跡は観察されなかった。」と御教示いただいた。

がある。4 は高台付坏で、底部内面は摩滅する。5 ～ 7 は高坏である。5 は線状透かしでがあるが、小片のため透かしの数は不明。6 は二方向に線状の透かしがある。脚端部は 5 に比べ上方に広がり、幅が広い。7 は高坏の坏部で、浅くて口縁部が広がり、口径は 16㎝を測る。8 は高台付壺で、高台端部は外面に面を持つ。壺底部内面の中央部はケズリ残しで器壁が厚い。底部内面には径 6.5㎝の円形に自然釉が付着する。9 は壺あるいは横瓶の可能性がある。外面上方には自然釉が付着する。内面はタタキ後回転ナデ調整される。外面はカキ目が残る。10 は横瓶で、器壁が厚い。外面はカキ目後タタキ調整される。

第 44 図 11、12、第 45 図 1 ～ 15 は土師器である。第 44 図 11 は坏で、底部外面は不定方向のケズリ調整である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。内面は赤色顔料が塗布される。12 は高坏で、外面は赤色顔料が塗布される。脚部は厚く、内面の凹みは浅い。坏部は口縁部に向け上方に立ち上がり、あまり開かない。

第 45 図 1 ～ 10 は土師器甕である。1、2 は小型で、体部は丸みをもつ。1、2、5、6、9 の内面は、口縁部と体部の境は明瞭である。一方、7、8、10 は内面の境が不明瞭である。3、4、9 は口縁部が長く、上方に広がる。4 は頸部外面に指頭圧痕が残る。7 の胎土にはやや大きめの白色砂粒を多く含む。8 の外面には黒斑がある。

11 ～ 15 は土師器甑と考えられる。11、12 は体部下方が無く、断定できないが、直線状を呈しているために甑と判断した。内面は口縁部と体部の境が明瞭である。口縁部は長く、大きく外反する。13、14 は体部外面に把手の接合前の沈線が 1 ～ 2 条巡る。13 の把手は断面楕円形で、端部はわずかに上方に伸びる。15 は把手で、断面楕円形で、筒状を呈する。

16 は移動式竈の受部の口縁部と考えられる。長い口縁部を持ち、外反する。内面は口縁部と体部の境は明瞭で、体部には煤が付着する。17 は土製支脚である。突起は欠損しているが、前方に二方向の突起があり、後方に一方向の突起があったと考えられる。底部は浅い凹みを持つ。

その他の包含層出土遺物（第 42・44 図、第 46 図 1 ～ 39、第 47 図 1 ～ 19）

第 46 図 1 は弥生土器甕で、口縁部外面にクシ状工具により平行沈線文が施される。浅柄Ⅲ遺跡から出土した最も古い遺物である。弥生時代後期後葉と考えられる。

2 ～ 25 は須恵器である。2 は坏蓋と考えたが、坏身の底部の可能性もある。天井部にはヘラ記号「×」がある。3、4 はかえりを持つ坏蓋である。3 の天井部はヘラケズリ後ナデ調整である。つまみ上部は平坦である。4 はかえりが低い。天井内面は摩滅している。5、6 は坏蓋の口縁部で、かえりがなく、端部が垂下する。この口縁部形態は 3 点しかなく、しかも小片である。7 は坏身で、立ち上がりが高い。調整は回転ナデ調整である。8 ～ 15 は高台付坏である。8 は深みがあり、体部外面下半はヘラケズリ後ナデ調整である。9 は口縁部が打ち欠きされ、底部内面が摩滅している。高台外面端部は面を作る。10 の底部は器壁が厚い。11 の体部は浅く、口縁部はやや広がる。底部内面が摩滅している。底部外面は静止糸切り後ナデ調整である。12 の高台は断面三角形を呈する。13 ～ 15 は高台が底部端に付き、体部は直線上に立ち上がる。15 は高台が低く、底部内面と体部の境は凹む。16 は皿と考えられる破片で、皿は 1 点のみである。軟質で橙色を呈し、土師器の可能性がある。底部内面は摩滅している。17 ～ 19 は高坏である。17、18 の底部内面は摩滅している。17 は坏部が浅く、口縁部はハの字状に開く。脚部には二方向の線状透かしがある。18 は透

かしがない。19 は円形の透かしがあり、壺等の脚部の可能性もある。円形透かしは 1 点のみである。20 ～ 23 は壺である。20、21 は底部がヘラケズリ調整である。器壁は 20 が薄く、21 は厚い。22 は高台を持つ底部で、体部外面はタタキ調整である。23 は長頸壺の頸部である。頸部中央に段があり、口縁部に向け広がる。24 は横瓶と考えられる。外面は同心円状にカキ目を施した後「＋」状に施す。内面はタタキ調整である。25 は甕である。内外面タタキ調整である。

26 ～ 28 は土師器皿である。26 は平底で、内外面赤色顔料が塗布される。底部は静止糸切り後、底部周辺のみナデ調整である。27、28 は丸底で、27 の外面は赤色顔料が塗布される。内面は風化剥離して不明。外面口縁部下に強いナデによる凹みがある。体部外面中央にわずかな屈曲がある。28 は外面に黒斑がある。全体に風化剥離が著しい。29 ～ 32 は中世土師器である。29、30 は高台を持つ。29 は低い高台で、断面三角形を呈する。内面の体部下半から底部にかけて強いロクロ目が残る。30 は高い高台を持ち、体部は直立状に立ち上がる。31、32 は小型の皿である。底部は糸切りか。

33 は中国製白磁皿で、大宰府分類皿Ⅸ類である。平底で、全面施釉される。内面底部と体部の境は沈線状になる。34 は中国製青磁碗である。無文直口口縁で、全面施釉され、貫入が入る。35 は備前壺の可能性がある。

36 は外面が還元し浅黄色を呈する。断面が円形を呈することから羽口の可能性がある。37、38 は土錘で、2 点のみ出土。37 は中央に径 0.5㎝の円孔が開く。左右の側面は一方が平坦、一方が丸みを持つ。上面は平坦である。下は欠損し、本来は 2 つ円孔がある双孔棒状土錘と考えられる。38 は長さ 5㎝、幅 2.5㎝の断面円形を呈する管状土錘である。小口の端部は一方は平坦である。39 は上層で出土した直径 3.2㎝の有孔円盤で、中央に径 3.5㎜の孔が開く。高さ 0.7㎝で、縁は薄く直立する。底部は平坦で、内面には型押しによる文様がある。時期、用途は不明である。

第 47 図 1 ～ 9 は土師器である。1 ～ 7 は土師器甕である。1、2 は短い口縁部が外反する。1 は体部外面に煤が付着する。3 はやや長い口縁部が外反し、内面の口縁部と体部の境は明瞭である。4、5 は口縁部が長く、器壁が薄い。6 はやや長い口縁部が外反し、体部は直線状になる。口縁部の一部は黒変する。7 は長い口縁部が湾曲しながら外反する。

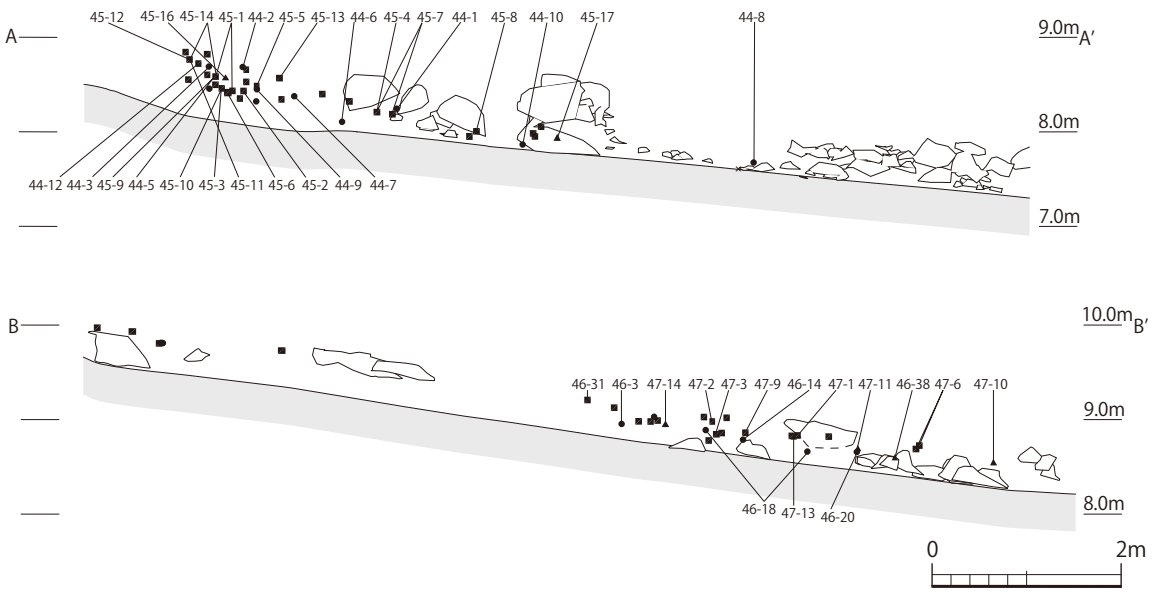
8、9 は甑である。8 は長くやや器壁が厚い口縁部が湾曲しながら外反し、体部は直線的にややすぼまるように底部へ向かう。9 は体部から底部の破片で、底部端部に楕円形の穴が開く。

10 ～ 12 は移動式竈である。10 は復元口径が 32.8㎝と大きく、器壁も厚いことから竈受部の口縁部と考えた。口縁部は湾曲しながら外反し、端部は丸い。11 は鍔状の庇部と考えられる。12 は端部で厚みを持つ。13、14 は土製支脚である。13 は二方向突起の一方だと考えられる。14 は底部で、浅い凹みがある。

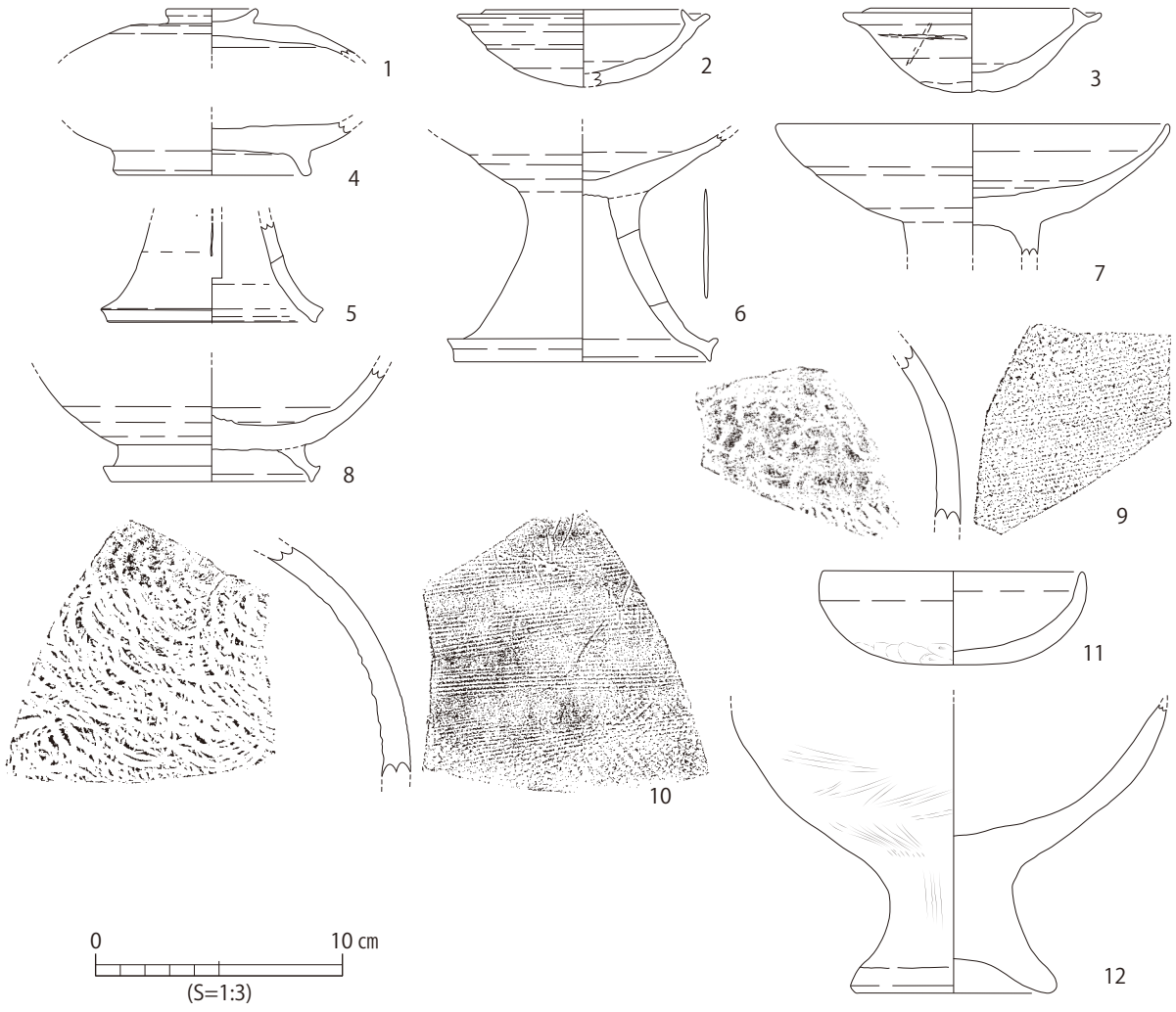
15、16 は鉄器である。15 は幅 1.6㎝、残存長 16.2㎝で、両端が欠損し、断面形は長方形である。表面には錆とともに炭化物が付着していた。刀の可能性がある。16 は板状鉄製品である。幅 1.9㎝、残存長 2.4㎝、厚さ 0.2㎝と薄い。その他、55g の鉄滓 1 点が出土している。

17 ～ 19 は石製品である。17 は棒状を呈し、一部欠損している。流紋岩で、表面に縞模様が見える。18、19 は砥石である。18 は両端とも欠損し、流紋岩と思われる。表面の七面が使用され、1 ～ 2 ㎜の溝状の使用痕が残る。19 は砂岩で、四面に使用痕がある。両端とも欠損し、一面は表面が剥離し、自然面が見える。

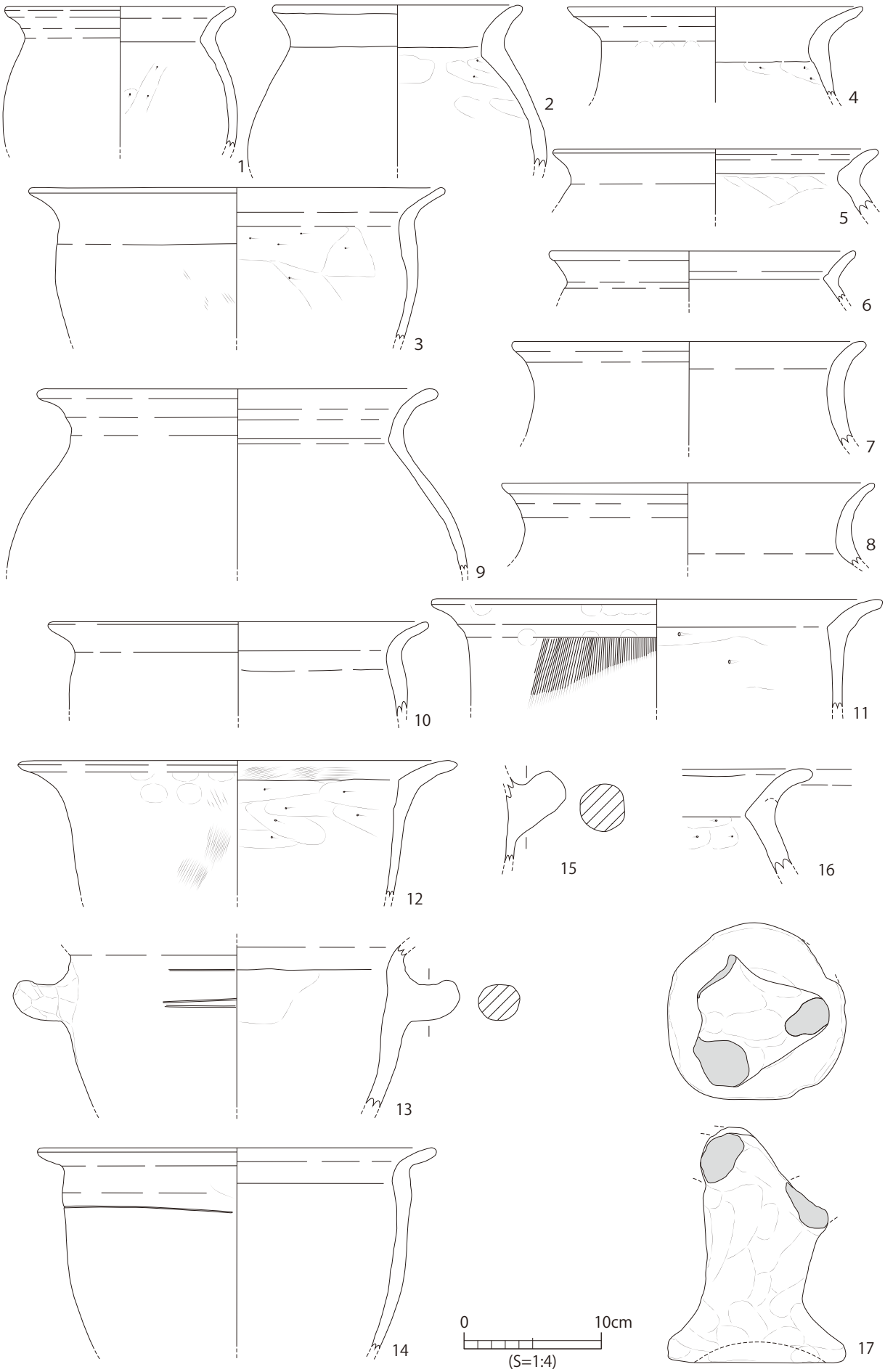
第 42 図　浅柄Ⅲ遺跡 遺構外出土遺物・石出土状況 (S=1:300)



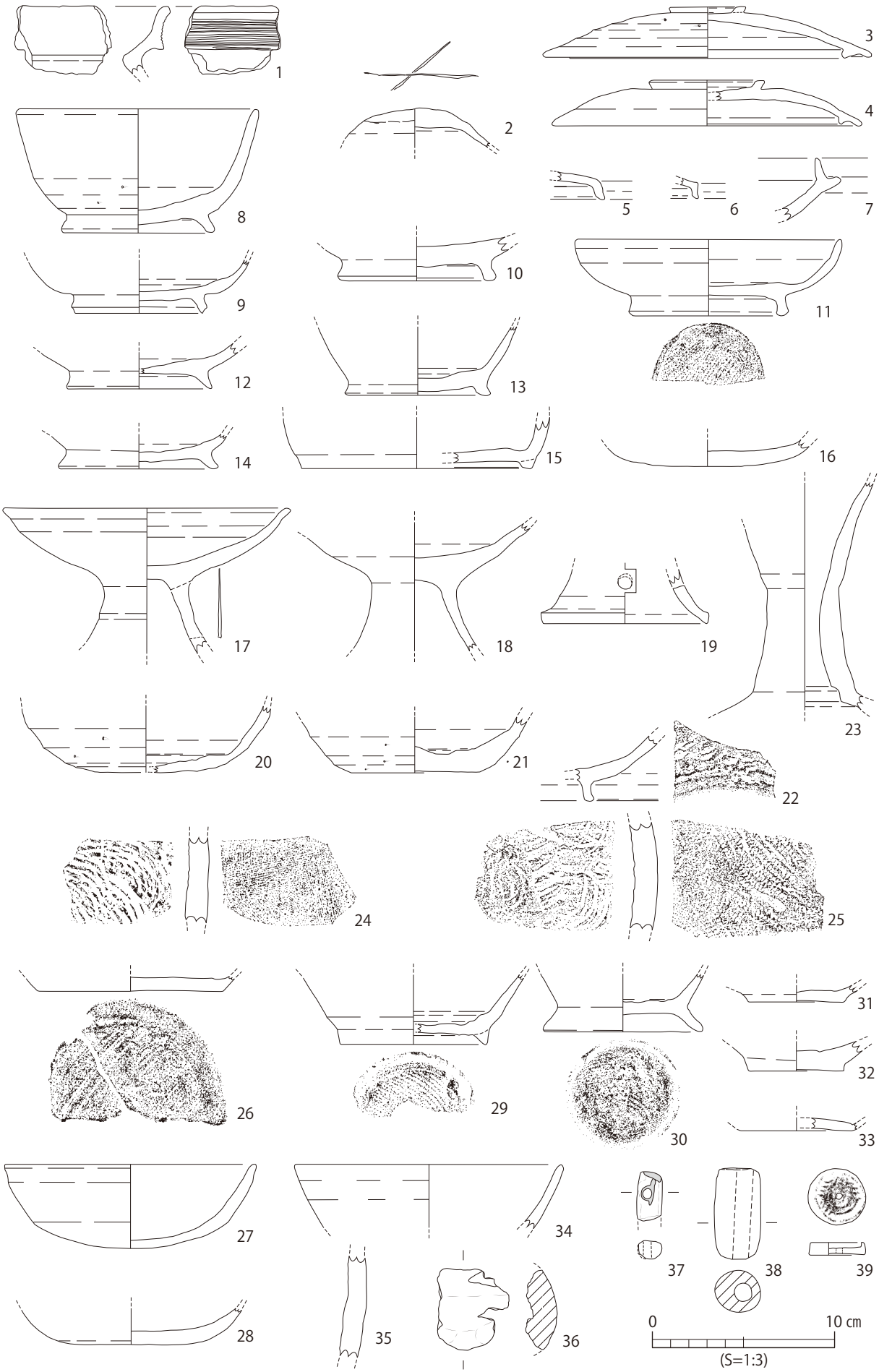
第 43 図　浅柄Ⅲ遺跡 遺構外出土遺物・石出土状況立面図 (S=1:80)



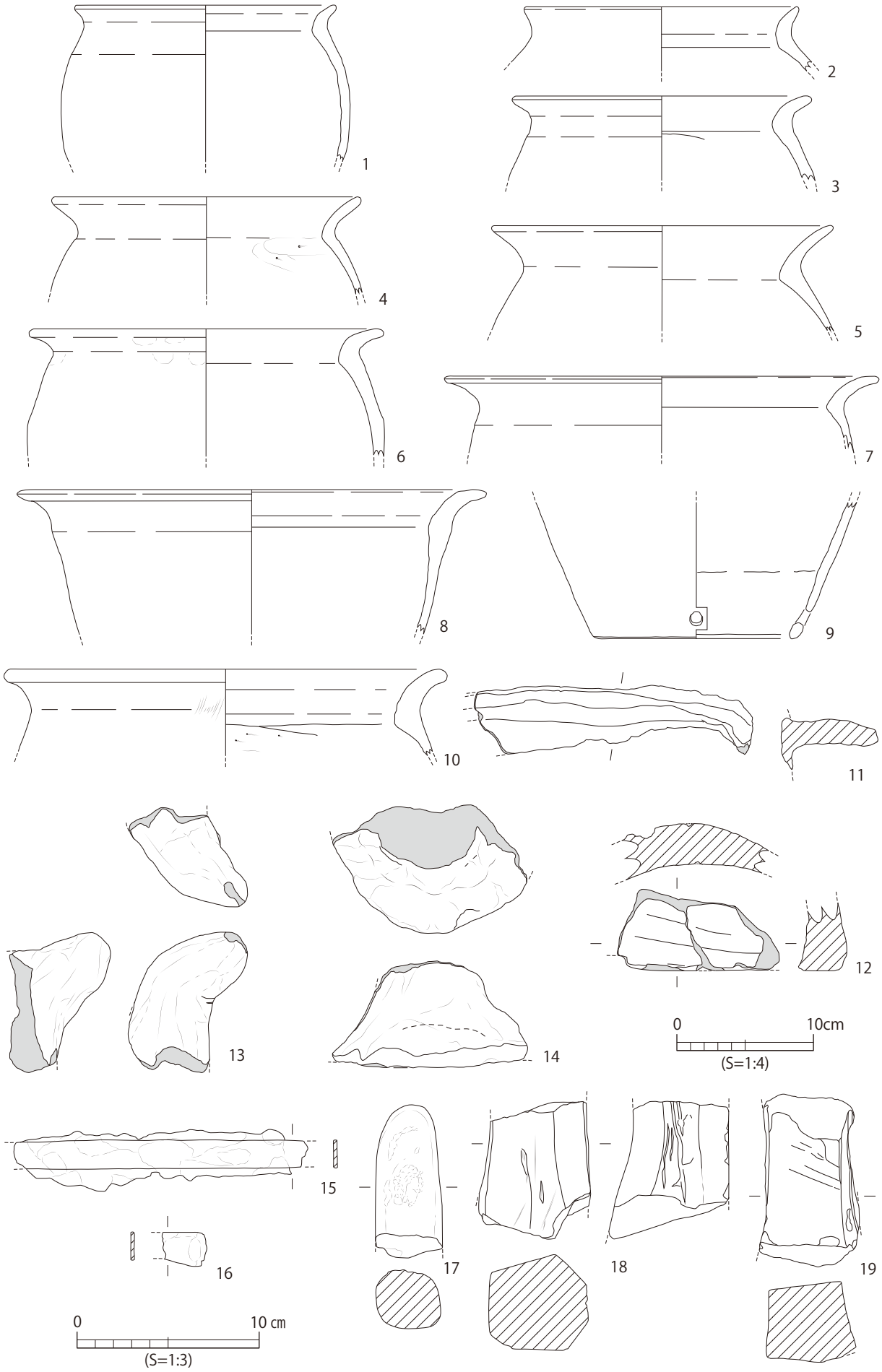
第 44 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 2(DT02) 出土遺物実測図 1(S=1:3)



第 45 図　浅柄Ⅲ遺跡 土器溜 2(DT02) 出土遺物実測図 2(S=1:4)



第 46 図　浅柄Ⅲ遺跡 包含層出土遺物実測図 1(S=1:3)



第 47 図　浅柄Ⅲ遺跡 包含層出土遺物実測図 2(S=1:4,1:3)

第 4 章　総括

第 1 節　遺構の時期

浅柄Ⅲ遺跡は、丘陵斜面から加工段や掘立柱建物跡、溝跡、土坑等を検出し、弥生時代後期から近世の遺物が出土した。浅柄Ⅲ遺跡から検出した遺構は第 7 表にまとめた。加工段以外は、遺構の種別に関係なく、遺構に通し番号を振った。

遺構から出土した遺物は少なく、遺構の時期を決定することは困難であるが、数少ない遺構出土の遺物から年代を検討してみたい。

1．加工段・土器溜まり 8（DT08）

加工段は 7 箇所確認できた。加工段 1 は須恵器、土師器が出土し、須恵器高台付坏（第 24 図 1）は大谷蓋坏分類 B1 型あるいは B2 型（大谷 1994、2001、以下、同分類を使用する。）と考えられ、大谷編年出雲 6d ～ 7 期（以下、「大谷編年」を略する。）である。加工段 2 は SD77 に切られているため SD77 より古いことは確実であるが、出土遺物はなく、時期は不明である。覆土や周辺からの遺物から考えると 7 世紀代の可能性がある。

加工段 3 には土器溜まり 8 を伴う。土器溜まり 8 からは多くの須恵器、土師器、土製品が出土した。須恵器坏蓋（第 27 図 1）は口縁部が欠損しているが、輪状つまみであり、蓋坏分類 B1 型あるいは B2 型と考えられ、出雲 6d ～ 7 期である。坏身（第 27 図 2、3）は蓋坏分類 A8 型で、出雲 6 期である。高坏（第 27 図 4）は、脚部は欠損するが、低脚無蓋高坏 A5 ～ A7 型に比定でき、出雲 5 ～ 6 期である。これらの須恵器の様相から考えると加工段 3 に存在する土器溜まり 8 の時期は、出雲 6d 期がもっとも蓋然性が高いと考えられる。

加工段 4 は加工段 2 を切り、SD77 によって切られている。出土遺物はなく、覆土は 7 世紀の遺構の覆土と異なり、緻密で硬くしまり、茶褐色土であるため、中近世の可能性が考えられる。加工段 5 は溝から近世磁器が出土しているが、7 世紀の須恵器や土師器は破片が大きく、まとまって出土していること、他の加工段の時期が 7 世紀であることから加工段 5 も 7 世紀と考えたい。加工段 5 から出土した須恵器坏身は蓋坏分類 A8 型で、出雲 6 期である。近世磁器（第 24 図 9）は肥前陶磁器編年Ⅱ期と考えられ、1610 ～ 1650 年代である（大橋 2000）。

加工段 6 は土師器のみの出土であり、詳細な時期は不明であるが、土師器形態から周辺の加工段とそれほど時期差がないと考えられる。

加工段 7 からは須恵器、土師器が出土している。須恵器（第 24 図 13）は低脚無蓋高坏分類 A7 型で、出雲 5 ～ 6 期で、透かしがないことからより新相である。

2．溝跡

SD77 から出土した須恵器坏蓋（第 24 図 15）は口縁部が欠損しているが、輪状つまみであり、蓋坏分類 B1 型あるいは B2 型と考えられ、出雲 6d ～ 7 期である。しかし、下層から肥前陶器（第 24 図 16）が出土した。底部内面が蛇ノ目釉剥ぎされ、肥前陶磁器編年Ⅲ期と考えられ、おおよそ 1650 ～ 1690 年代である（大橋 2000）。SD127 から出土した陶胎染付は肥前陶磁器編年Ⅳ期で、

17 世紀末から 18 世紀である。SD117 は 7 世紀の加工段 1 を切り、詳細は不明であるが中世土師器皿が出土している。SD134・SK192 は SD127 によって切られている。SK192 から出土した中国製青磁（第 24 図 19）は、胴部で詳細は不明であるが、15 世紀頃と考えられる。

3．掘立柱建物跡・柵列

掘立柱建物跡は 5 棟、柵列は 8 基を復元した。柱穴からの出土遺物は掘立柱建物跡 4 を構成する Pit225 から須恵器坏蓋（第 24 図 21）が出土した。かえりのある口縁部を持ち、蓋坏分類 B1 型であり、出雲 6d ～ 7 期である。柱穴から出土した遺物のため、掘立柱建物跡の時期を示すかは慎重に検討すべきである。掘立柱建物跡 4 は斜面に並行して建てられ、建物の軸方向や柱穴の覆土が類似する掘立柱建物跡 1、3 の時期も 7 世紀の可能性もある。掘立柱建物跡 5 を構成する Pit236 からは古墳時代後期から古代の土師器甕が出土している。

一方、柵列については、柱穴からの出土遺物はないので、時期は不明である。周辺からは 7 世紀から中世の遺物がややまとまって出土していることから、この時期の可能性があるが、調査区内には近世の溝跡もあり、やや広い時間幅で捉えざるを得ない。

4．杭列

杭列を構成する杭は径 3 ～ 8㎝と小さく、先端をとがらせていた。杭列に伴う遺物はなく、時期は不明である。強いていえば、調査区外の水田畦の方向と類似しているため、周辺が水田化する時期のものかもしれない。

以上、遺構の時期を検討し、7 世紀、中世、近世に分けることが可能である。7 世紀では加工段や掘立柱建物跡が確認され、出雲 6d 期を中心に出雲 5 ～ 7 期の遺物が出土している。出雲 6bc 期が 7 世紀中葉から 7 世紀第 3 四半期とされることから、出雲 6d 期はそれ以降と位置付けられる（大谷 2001）。また、出雲 6d 期は出雲Ⅱ期にほぼ該当し、岡田氏等は 7 世紀後葉とされている（岡田他 2010）。

中世では、土師器皿からの年代決定が難しく、貿易陶磁から検討すると、SD134・SK192 から出土した中国製青磁は 15 世紀代、Pit87 から出土した中国製白磁は大宰府分類皿Ⅸ類で、大宰府磁器区分 F 期、13 世紀後半から 14 世紀前半に出土量が増加する（太宰府市 2000）。

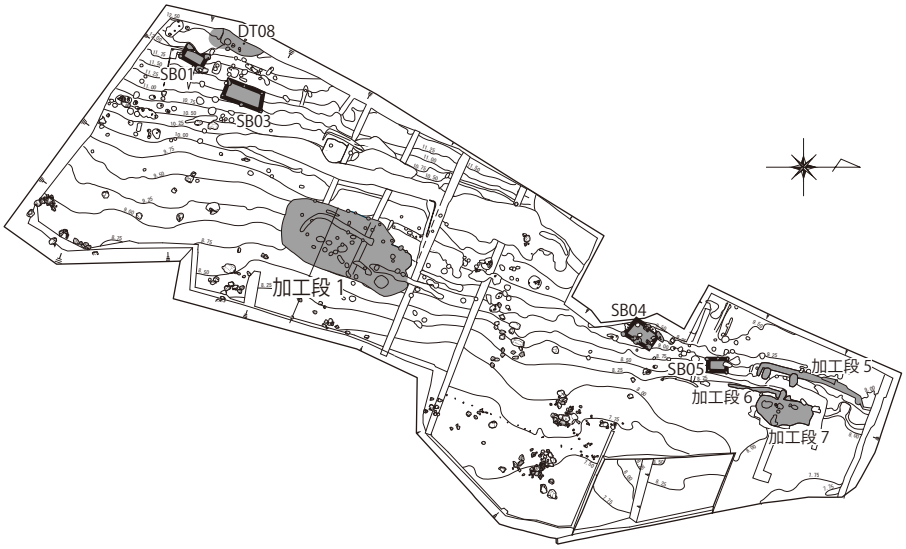
近世では、近世陶磁器編年のⅡ～Ⅳ期の遺物が出土し、1610 年代から 18 世紀に位置付けられる。

第 2 節　浅柄Ⅲ遺跡の造り付け竈

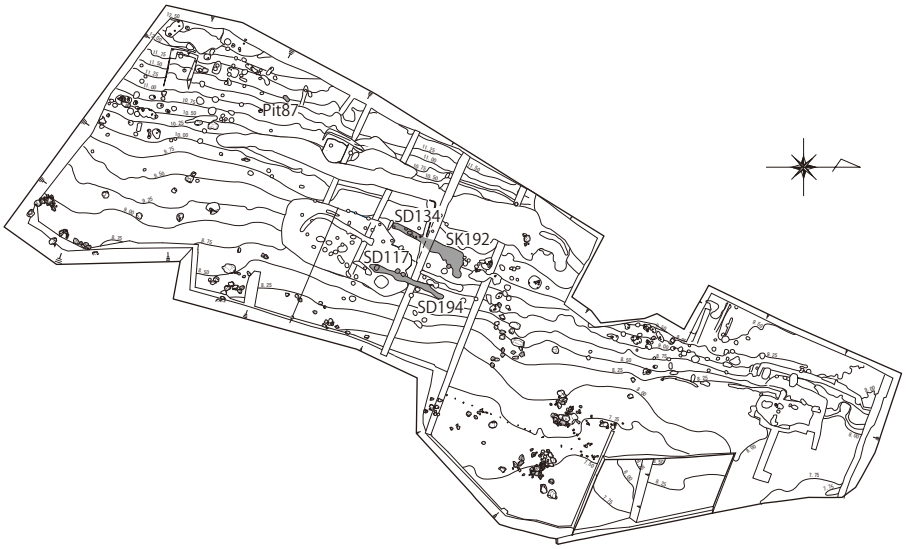
浅柄Ⅲ遺跡加工段 7 から 1 基の造り付け竈を検出した。造り付け竈は出雲平野で初めての検出例となった。加工段 7 からは、須恵器高坏と土師器甕が出土し、出雲 5 ～ 6 期と考えられる。高坏は低脚無蓋で、透かしがないことを考えるとより新相、出雲 6d 期の可能性が高い（大谷 2001）。実年代を考えると 7 世紀後半となろう（岡田他 2010）。

加工段 7 は一見すると、北・西・南側の 3 壁に立ち上がりがあり、竪穴建物跡に見えるが、谷側（東側）には立ち上がりがなく、開口しているため加工段と位置付けた。その山側の斜面を掘り込み煙

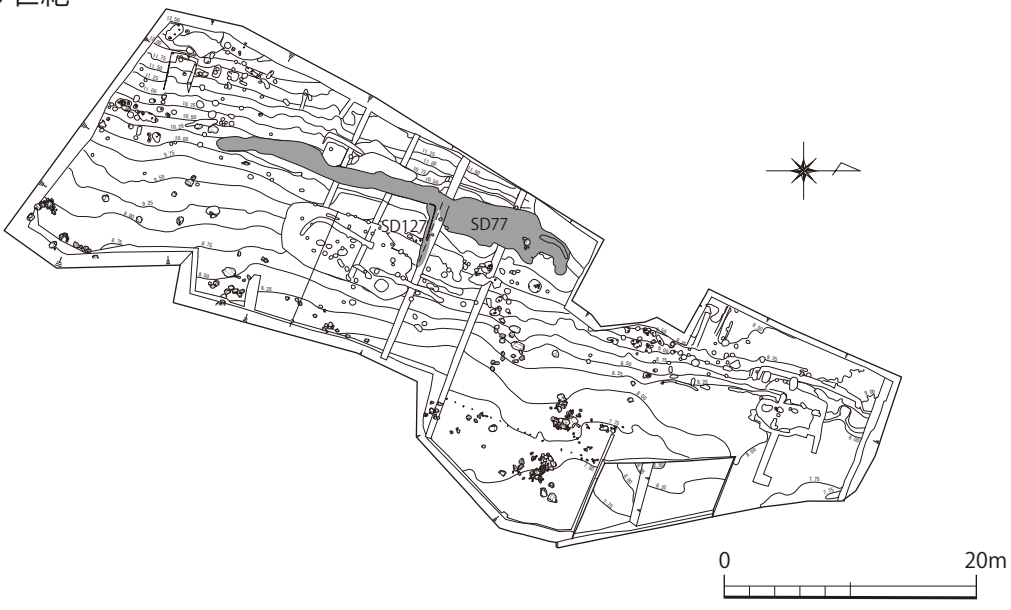
7 世紀



13 ～ 15 世紀



17 ～ 18 世紀



第 48 図　浅柄Ⅲ遺跡 遺構の変遷模式図 (S=1:600)

道とし、焚き口は地山と同じ土を使用して袖を造り出している。南側の袖は 1 個の石を芯に周囲を土で貼り付けて構築している。煙道は短く長さ 80㎝、幅 50㎝となる。煙道に天井があったかは不明であるが、縦断土層図で観察すると炭化物を多く含む層の上層に地山と類似する土層が存在する。天井部を構築していた土の可能性があり、煙道はトンネル状を呈していたと考えられる。

山陰地域の古墳時代後期から奈良時代の炊飯具や造り付け竈の研究を行った岩橋孝典氏は、造り付け竈は石見地域山間部や飯石郡西部に分布し、使用地域を 3 区分することを提案している（岩橋 2003）。①長煙道タイプが卓越する邑智郡西部・那賀郡、②短煙道タイプが卓越する美濃郡、③短煙道タイプが卓越する三瓶山麓周辺地域（大田市山間部、邑智郡東部、飯石郡西部）に分けられている。そして、これらの地域では、基本的に土製支脚、移動式竈等の動産的炊飯具を使用しないとされている。一方、近年の一般国道 9 号（朝山大田道路）改築工事に伴う発掘調査において、大田市東部の海岸部に立地する市井深田遺跡（島根県 2014）から 5 基の、城ヶ谷遺跡（島根県 2016・2017）から 4 基の造り付け竈を伴う加工段、竪穴建物跡が検出されている。造り付け竈は基本的に、石を芯に粘土を貼り付けて構築するものである。また、市井深田遺跡では包含層から移動式竈や土製支脚が出土し、城ヶ谷遺跡 1 区では建物跡から土製支脚が、包含層からは移動式竈が出土している。城ヶ谷遺跡 2 区 SI01 では 7 世紀代に機能した建物跡に造り付け竈があり、建

第 1 表　5 世紀から 9 世紀前半の島根県海岸部の造り付け竈

遺跡名	所在地	遺構名	竈の規模	部材	煙道	時期	備考	報告書
浅柄Ⅲ遺跡	出雲市知井宮町	加工段 7	幅 50㎝ 奥行き 140㎝	石 1 ＋土	80㎝	7C 後半		本書
城ヶ谷遺跡 1 区	大田市久手町	SI01	幅 80㎝ 奥行き 100㎝	石 1 ＋土	約 50㎝	7C 後半		島根県 2016
		SI02	幅 90㎝ 奥行き約 130㎝	石＋土	60㎝	7C 後半	竈のまぐさ石あり	
		SI04		石	短煙道	7C 後半	竈のまぐさ石あり	
城ヶ谷遺跡 2 区		SI01	幅 54㎝ 奥行き 97㎝	石	23㎝	7C 後半	竈のまぐさ石あり	島根県 2017
市井深田遺跡	大田市久手町	加工段 2-2 （幅約 6.2 m）	幅 79㎝ 奥行き 50㎝	石 2 ＋粘土	64㎝	7C 初 （石見 5・6A 期）		島根県 2014
		加工段 12 （幅約 3.5 m）	焼土径 20㎝	不明	47㎝	7C 初 （石見 5・6A 期）		
		加工段 4-1 （幅　不明）	幅 88㎝ 奥行き 48㎝	石 3 ＋粘土	90㎝	7 C 前から 8C 前 （石見 6B 期から 8 期）		
		加工段 4-3 （幅約 3.7 m）	幅 72㎝ 奥行き 38㎝	石 2 ＋粘土	52㎝	8C 後 （石見 9A 期）		
		加工段 6 （幅約 4.2 m）	幅 84㎝ 奥行き 48㎝	石 4 ＋粘土	90㎝	6C 後から 9C 前？ （石見 3 期から 9B 期？）		
高津遺跡	江津市都治町	竪穴住居 02	直径約 60㎝	粘土	不明	5C 末から 6C 初	炉に近い形態	江津市 2005
堂床遺跡	松江市玉湯町	SB05	約 1 m四方 高さ 40㎝	石 7	30㎝	6C 後	暖房用で煮炊きが不可能	島根県 2001
石田遺跡	安来市吉佐町	SI01	幅 50㎝ 奥行き約 40㎝	粘土	短煙道	7C 前から中	日常的に使用	島根県 1994
五反田遺跡	安来市吉佐町	11 号建物	幅 198㎝ 奥行約 125㎝	石 3 ＋粘土	180㎝	8C 前	鍛冶炉の可能性あり	島根県 1998
		4 号建物	幅約 30㎝ 奥行き約 40㎝	粘土	40㎝	7C 中	鍛冶炉の可能性あり	

島根県 2014 第 3 表に城ヶ谷遺跡と浅柄Ⅲ遺跡を追加した

物が廃絶した後の窪地から移動式竈が出土している（島根県 2017）。時期について、市井深田遺跡は６世紀末から８世紀後半、城ヶ谷遺跡１区は７世紀後半である。

浅柄Ⅲ遺跡は出雲平野の南麓、神戸川下流域に位置する。この地域は、短煙道をもつ造り付け竈が分布する飯石郡西部や造り付け竈と移動式竈を併用する大田市東部とも比較的距離は近い。また、いわゆる石見型須恵器といわれる土器等の遺物の分布や横穴墓等の墓制を考えても日常的な交流を考えることができる。出雲平野での今までの発掘調査事例から、造り付け竈が主体的になるとは考えられないが、今後とも検出されることは想定される。造り付け竈は出雲平野南西部と石見東部あるいは神戸川上流域との地域間の交流を考える一つの資料となる。

第３節　出土遺物の概要

浅柄Ⅲ遺跡から加工段や土器溜まり、包含層から７世紀に属する須恵器や土師器、土製品がまとまって出土した。また、弥生時代後期の甕片が２点出土しているほか、近世までの土器類が出土し、第２～６表にまとめた。

７世紀の遺物について、時間幅が認められるものの、比較的限定された時間幅に収まる土器群と考えられるので、既存の編年的位置付けを行いたい。

１．須恵器

まずは、須恵器を取り上げる。古墳時代後期から古代の須恵器については、大谷晃二氏（大谷 1994、2001）、岡田裕之氏ら（岡田他 2010）による編年研究があり、一般的に使用されている。これらの編年研究で使用されている分類を用いて、浅柄Ⅲ遺跡の須恵器を検討する。

蓋坏　古墳時代通有の形態で、天井部はヘラケズリを省略し、口縁部が内湾し、口径が 12㎝前後の大谷分類 A7 型と A7 型が 10㎝前後まで小型化した A8 型が出土している。A7 型の坏身が２点、A8 型の坏蓋６点、坏身 16 点、A7 型あるいは A8 型が 16 点で、古墳時代通有の蓋坏は破片数 40 点である。次に、輪状つまみをもち、口縁内側に身受けのかえりを持つ岡田氏らの分類（以下、岡田分類と略称する）蓋Ⅰ類が出土している。つまみの形態は輪状を呈し、法量により２種類に分別している(1)。岡田分類蓋Ⅱ類は輪状つまみを持ち、口縁部内側に身受けのかえりをもたないものである(2)。浅柄Ⅲ遺跡では岡田分類蓋Ⅱ類は３点で、破片も小さく、岡田分類蓋Ⅰ類が 32 点と主体的である。

坏身　坏類は、高台を持たない岡田分類坏Ⅰ類と高台を持つ岡田分類坏Ⅱ類に分けられ、底部から体部が内湾気味に立ち上がる坏Ⅱ A 類と底部から体部が直線的に立ち上がる坏Ⅱ B 類に細分されている。浅柄Ⅲ遺跡では坏Ⅱ A 類のみが 72 点確認されている。

高坏　岡田分類では高坏は４つに分類されている。浅柄Ⅲ遺跡からは坏底部が丸底で、口縁部が開く高坏Ⅱ類が出土している。脚部の長さは短脚のみである。脚部の透かしの有無により、A・B 型式に分かれ、岡田分類の短脚透かしありの A2 型式と短脚透かしなしの B2 型式が出土している。前者は大谷分類の低脚無蓋高坏 A6 型、後者が低脚無蓋高坏 A7 型に相当する。脚部が欠損してい

(1)　大谷晃二氏による分類の B1・C1・C2 型に相当する。

(2)　大谷分類 B2・B3 型の蓋に相当する。

るものも多いが、透かしがある高坏Ⅱ A2 類が 10 点、透かしのない高坏Ⅱ B2 類が 6 点、不明の高坏Ⅱ類 36 点で、高坏の破片数は 52 点である。

壺　長頸壺と考えられ、高台をもたない岡田分類長頸壺Ⅰ類が 3 点、高台をもつ岡田分類長頸壺Ⅱ類が 2 点、どちらか不明な長頸壺 3 点、長頸壺かどうか不明な壺が 24 点で、壺類の破片数は 32 点である。

その他、甕 55 点、横瓶・平瓶 5 点、不明 24 点が出土し、須恵器の破片数は 315 点である。

2．土師器

土師器は、古代の坏 10 点、古代の赤彩坏皿 5 点、甕 2,694 点、甑 31 点、中世土師器坏皿 126 点、不明土師器 606 点が出土している。

土師器坏皿　古代の土師器坏は第 27 図 6 ～ 8、第 46 図 27、28 等口縁部が内湾しながら立ち上がり、深いものや浅いもの、口縁端部がわずかに外反するもの等がある。中世土師器坏皿も一定量出土し、浅柄Ⅲ遺跡での活動を考える上で重要であるが、破片が小片で、明確な時期決定できる部位も少なく、共伴する陶磁器から 13 ～ 15 世紀と考えておきたい。

甕・甑　甕は最も多く出土し、不明土師器としたものの多くは甕体部破片の可能性が高い。一方、口縁部形態では甕と甑、竈の受部に明確に分類することは難しく、口縁部から体部にかけて直線的であれば甑、口径が大きく器壁が厚ければ竈、残りを甕と分類したため、甕としたものの中に甑等も含んでいる可能性が高い。

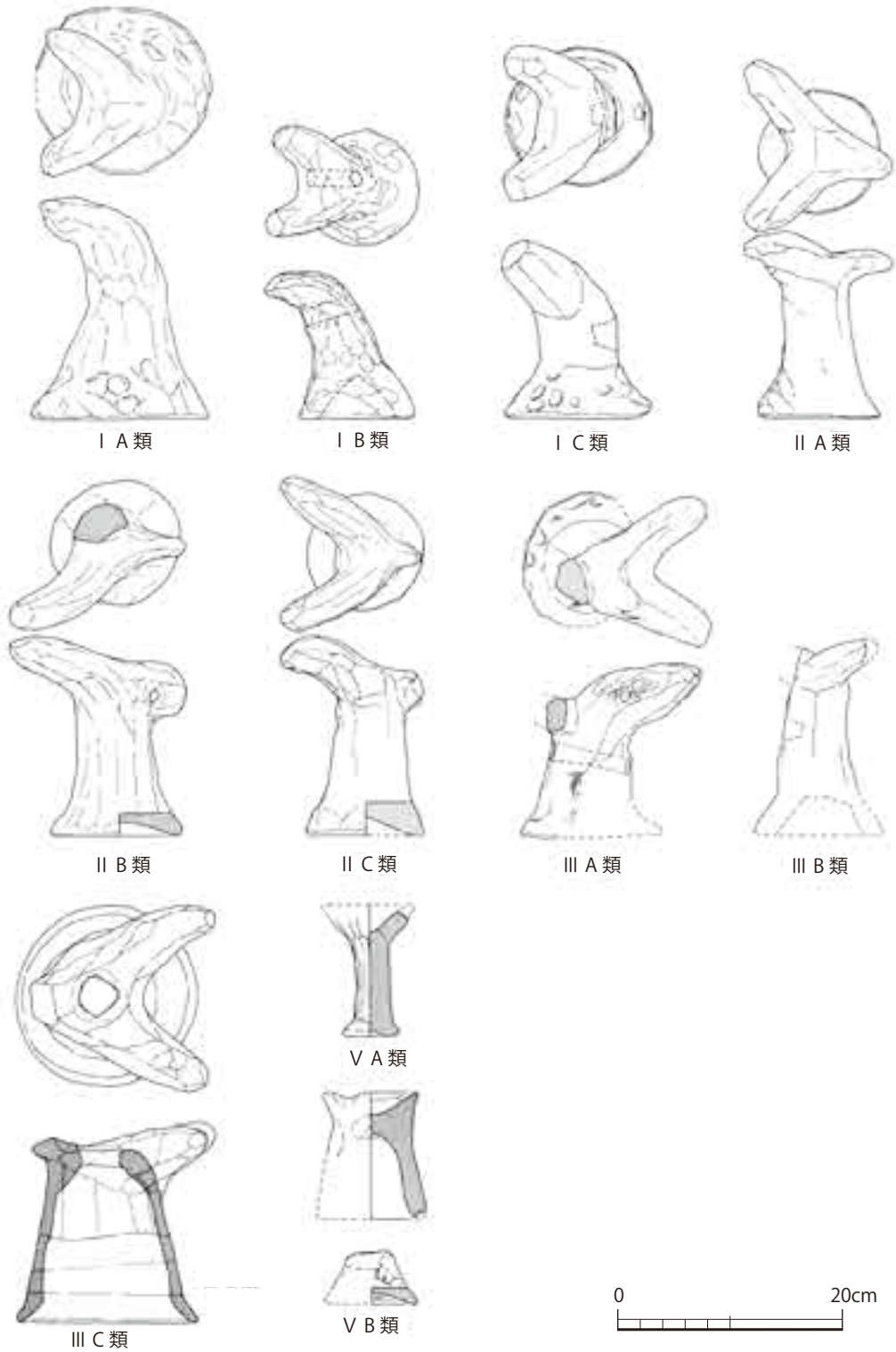
3．土製品

土製品には移動式竈、土製支脚、土錘、羽口がある。土錘は管状土錘 1 点、双孔棒状土錘 1 点の計 2 点、羽口は可能性がある破片 1 点である。

土製支脚　土製支脚は 6 世紀末から 8 世紀に使用され、土製支脚の分類は岩橋孝典氏が行っている（岩橋 2003）。Ⅰ類は甕を受ける突起が 2 方向に延びるもので、胴部の孔の有無や形状で 3 型式に分類される。ⅠA 類：2 方向突起。胴部穿孔無し。ⅠB 類：2 方向突起。胴部に貫通孔。ⅠC 類：2 方向突起。胴部背面に非貫通孔。Ⅱ類は突起が 3 方向に延びるもので、突起の形状で 3 型式に細分される。ⅡA 類：3 方向突起。背面の突起は前方突起より短い。ⅡB 類：3 方向突起。背面の突起は環状を呈する。ⅡC 類：3 方向突起。背面の突起はヒレ状を呈する。Ⅲ類はⅠ類とⅡ類の折衷型。ⅢA 類：3 方向突起。胴部に貫通孔。ⅢB 類：3 方向突起。胴部背面に非貫通孔。ⅢC 類：3 方向突起。胴部は中空で上方から穿孔する。

浅柄Ⅲ遺跡から出土した土製支脚は、破片数で 18 点である。全体像が判る資料は少ないが、土器溜まり 8 から突起が 3 方向に付くⅡ類（第 27 図 13）と突起が 2 方向に延びるⅠ類（第 27 図 15）が出土している。第 27 図 13 は背面の突起が短いが L 字形に上方に伸び、分類が難しい。包含層からは出土した第 45 図 17 は 3 方向突起で、背面の突起が短いⅡA 類である。第 47 図 13、14 は破片のため、詳細は不明である。第 47 図 13 はⅠ類の可能性がある。

岩橋氏によると神戸川左岸から湖陵町にかけての出雲平野南西麓は土製支脚Ⅰ類がほとんどを占める地域で、極めて斉一性が高い地域とされている（岩橋 2007）。神戸川右岸から斐伊川左岸の平野南側地域ではⅠ類が 62 ～ 70%、Ⅱ類が 26 ～ 38% と全体の 1 ／ 3 程度Ⅱ類が存在するという。



第 49 図　土製支脚型式分類案 (S=1:6)（岩橋 2003）より転載

浅柄Ⅲ遺跡は土製支脚Ⅰ類が主体を占める地域でありながら、Ⅱ類や背面突起がＬ字形に上方に伸びるものがある。また、近年の調査の結果、御崎谷遺跡では古墳時代後期であるが、土製支脚ＩＣ類が主体で、ⅡＡ類もあり、九景川遺跡や玉泉寺裏遺跡ではＩＣ類とⅡＡ類が出土し、ＩＣ類が多い印象である（出雲市 2008、島根県 2008・2017）。分布傾向や時期を確認した上で、日常煮炊具がなぜ異なるか、その要因等を今後の資料の増加を待ち、検討する必要がある。

移動式竈　山陰地域の移動式竈について、口縁部が直口となる山陰東部型と口縁部が甕形土器のように如意形を呈する山陰西部型に分けられている（岩橋 2003）。浅柄Ⅲ遺跡からは破片数 41 点出土し、全体像が不明であるが、西伯耆・出雲・石見中部から東部海浜部に分布する山陰西部型の移動式甑が出土している。

４．陶磁器

貿易陶磁は龍泉窯系青磁碗 5 点、中国製白磁ⅢⅨ類 2 点のみの出土である。同時期の国産品とし、備前壺 1 点、備前擂鉢 1 点と中世の陶磁器は少ない。一方、近世の陶磁器は 8 点であり、1610 年代から 18 世紀代までのものである。一番新しいものが陶胎染付であり、18 世紀前半代であろう。

第 4 節　まとめ

浅柄Ⅲ遺跡は、狭長な谷沿いの丘陵斜面に立地する集落遺跡であり、7 世紀後半を中心に弥生時代後期から江戸時代にかけて営まれた。調査範囲が限定され、遺跡の全体像が明らかになったわけではないが、周辺の遺跡を含め、変遷を検討し、まとめとしたい。

2 世紀　浅柄Ⅲ遺跡からは弥生時代後期の甕が 2 点出土しているのみで、確実な遺構はない。周辺地域では九景川遺跡や玉泉寺裏遺跡から弥生時代後期の遺物が出土し、丘陵からは加工段や竪穴建物跡、土坑等が検出され、丘陵上に集落が形成されていたことが判明した（島根県 2017）。古志本郷遺跡や下古志遺跡のような平野微高地上に立地する集落は、規模も大きく、集落の継続期間も長く「拠点集落」と位置付けられているが、その周辺の丘陵上には規模が小さいものの集落があった（景山 2016）。浅柄Ⅲ遺跡の発掘調査区域外の西側斜面上方には平坦面等が存在し、同時期の遺構が広がっている可能性がある。

7 世紀　浅柄Ⅲ遺跡から最も多くの遺構や遺物が検出された時期である。出雲Ⅲ期の須恵器蓋Ⅱ類は小片で、3 点と少なく、遺物のほとんどは出雲Ⅱ期の 7 世紀後半である。出雲平野から初めて確認された造り付け竈も同時期と考えられる。一方、浅柄Ⅲ遺跡からは移動式竈や土製支脚も出土し、神戸川左岸は土製支脚Ⅰ類を主体的に使用する地域とされている。大田市市井深田遺跡等を含め土製支脚と移動式竈を使用する日本海沿岸部から検出された造り付け竈は、今後も検出される可能性があり、地域間の交流等を考える上で、貴重な資料となろう。

周辺地域では間谷東遺跡（島根県 2009）、九景川遺跡（島根県 2008・2017）や玉泉寺裏遺跡（出雲市 2008、島根県 2017）、保知石遺跡（出雲市 2005・島根県 2005）、浅柄遺跡（出雲市 2000）から古代の遺構や遺物が検出されている。しかし、浅柄Ⅲ遺跡は 7 世紀後半を中心とした時期で、同時期の遺物が出土しているのは、玉泉寺裏遺跡Ⅲ区（出雲市 2008）等数少ない。玉泉寺裏遺跡では古墳時代から集落が継続しているが、浅柄Ⅲ遺跡は 7 世紀後半のみであった。周辺

丘陵の調査が実施されておらず、継続していた可能性もあるが、仮に集落が継続しなかった場合、加工段7の内部から炭化物が多量に出土していることから、火災等で集落が移転した可能性も考慮しておく必要があろう。

『出雲国風土記』記載の「笠柄池」との関係　浅柄Ⅲ遺跡のある谷は、加藤義成氏、関和彦氏や仁木聡氏により『出雲国風土記』（以下『風土記』）記載の「笠柄池」の所在地として想定されている（加藤 1981、関 1999、仁木 2017）。『風土記』神門郡条には「笠柄池　周一里六十歩　有菜」と記載されている。『風土記』には「宇加池」、「来食池」、「笠柄池」、「刺屋池」と4つの池が東から記載され、記載順や字名が「浅柄」で、『雲陽誌』に「麻柄池　風土記に笠柄池周一里六十歩、今の路にして七町なり、此所阿佐加羅池のことか、近来埋め立て田となる」と記載されていること等から、この谷を『風土記』の「笠柄池」と比定されている（関 1999）。また、仁木氏により一つの可能性とし、谷の入口付近に築堤痕跡と想定される丘陵裾部の張り出しが確認されている（仁木 2017）。浅柄Ⅲ遺跡の試掘確認調査によると、本調査区東側の谷部や北側丘陵裾部からは低湿地由来と考えられる暗青灰色シルト層の堆積が確認されている。その土層は 27T10 で標高 8.2m、28T12 で標高 7.4m、28T13 で標高 7.5m、28T2 で標高 6.8m を測り、谷奥に行くほど標高の高い地点から確認されたことから、仁木氏は、時期により、池が谷奥へ移動している可能性が高いと想定している。現在の「浅柄池」が本調査区東側丘陵裾の谷最深部に位置していることも傍証しているという。『風土記』は8世紀前半（733年）に編纂されたものであり、その時期には浅柄Ⅲ遺跡の集落は存在していない可能性が高い。指摘されているように本調査区周辺に池が存在した可能性はある。しかし、それが「笠柄池」かはさらなる検討が必要であろう。「池」の存在を明らかにするには水を留めておくために必要な人工物である堤の検出が確実である。出雲市古志町に所在する旧宇賀池の堤の実測調査（遠藤他 1986）や堤の発掘調査事例から貯水原理を検討した北山峰生氏の論考等があり（北山 2012）、今後の周辺地域の考古学的調査が必要であろう。

13 〜 18 世紀　浅柄Ⅲ遺跡から数は少ないものの溝跡や土坑が検出された。また、小ピットの多くがこの時期の可能性が考えられる。陶磁器の時期から見ると、断続的ではあるがこの地が使用されていたことが分かる。また、近世においては SD77 の大規模な溝跡があり、シルト質の土層堆積から流水の可能性が考えられ、谷奥部からの導水のための水路等の性格が想定される。谷部がいつ水田化したか明確な資史料は確認できなかったが、古代の「笠柄池」の復元ともかかわり、この地域の歴史復元に役立つ成果が得られた。

【参考文献】

加藤義成 1981『修訂 出雲国風土記参究 改訂三版』

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 11』

国立歴史民俗博物館 1993『日本出土の貿易陶磁　西日本編 3』

島根県教育委員会 1994『石田遺跡　カンボウ遺跡　国吉遺跡』

島根県教育委員会 1998『山ノ神遺跡　五反田遺跡』

関　和彦 1999「『出雲国風土記』論註その四　神門郡条」『古代文化研究 7』

出雲市教育委員会 2000『浅柄遺跡』

大橋康二 2000「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』

太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ』

大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会

島根県教育委員会 2001『堂床遺跡』

岩橋孝典 2003「山陰地域の古墳時代後期から奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究 11』

出雲市教育委員会 2005『中野美保遺跡　上塩冶横穴墓群第 39 支群　保知石遺跡』

江津市教育委員会 2005『高津遺跡』

島根県教育委員会 2005『畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡』

岩橋孝典 2007「一煮炊き具からみた古代出雲平野の地域性」『出雲国風土記の研究Ⅲ』島根県古代文化センター

島根県古代文化センター 2007『北光寺古墳発掘調査報告』

出雲市教育委員会 2008『玉泉寺裏遺跡・浜井場 4 号墳・間谷東古墳』

島根県教育委員会 2008『九景川遺跡　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』

島根県教育委員会 2009『御崎谷遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳・間谷西Ⅱ遺跡・間谷西古墳群』

岩橋孝典 2010「土製支脚の分布状況と古代行政境界」『出雲国の形成と国府成立の研究』

岡田裕之・土器検討グループ 2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』

岩橋孝典 2012「島根県における 7 世紀の集落遺跡について」『第 61 回埋蔵文化財研究集会　集落から見た 7 世紀』

北山峰生 2012「古代溜池の貯水原理」『菟原Ⅱ - 森岡秀人さん還暦記念論文集 -』

島根県教育委員会 2014『市井深田遺跡　荒槇遺跡　鈴見 B 遺跡（1 区）』

景山このみ 2016「出雲地域における弥生集落遺跡と杉沢遺跡」『杉沢遺跡　杉沢Ⅱ遺跡　杉沢横穴墓群』出雲市教育委員会

島根県教育委員会 2016『城ヶ谷遺跡（1 区）　神谷遺跡　涼見 E 遺跡』

島根県教育委員会 2017a『大西大師山遺跡（18・19 号横穴墓）　城ヶ谷遺跡（2 区）』

島根県教育委員会 2017b『玉泉寺裏遺跡（Ⅵ区・Ⅶ区）　九景川遺跡（Ⅴ区）』

仁木　聡 2017「『出雲国風土記』神門郡条記載の「池」と大念寺古墳の時代」『季刊文化財 140』

第 2 表　浅柄Ⅲ遺跡 出土遺物観察表（土器・土製品）

図	番号	写真	出土地点		層位	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調 外：上段　内：下段	調整 外面：上段　内面：下段	焼成	備考
			遺構	グリッド											
24	1	27	加工段 1			須恵器	高台付坏	(13.2)	4.8	6.5	1㎜の白色砂粒を含む	青灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	良好	
24	2	27	加工段 1			土師器	坏			(5.0)	2㎜以下の砂粒を含む	浅黄色 浅黄色	調整不明 調整不明	不良	内面に黒斑あり
24	3	27	加工段 1			土師器	甕	(22.7)			2㎜以下の砂粒を多く含む	灰黄褐色 にぶい黄橙色	ヨコナデ ヨコナデ	良好	
24	4	27	加工段 1			土師器	甕	(20.6)			2㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい橙色から灰黄褐色 にぶい黄橙色から灰黄褐色	ハケ目 ヘラケズリ	良好	外面頸部から体部上面に煤付着
24	5	27	加工段 1			土師器	甕	(23.8)			2㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ハケ目 ヘラケズリ	良好	
24	6	27	加工段 5			土師器	甑	(23.4)			1.5㎜以下の砂粒を多く含む	明黄褐色から黄灰色 明黄褐色から灰黄色	調整不明 調整不明	良好	外面に黒斑あり
24	7	27	加工段 5	B7		土師器	甑	(25.6)	18.6	(13.2)	2㎜以下の砂粒を多く含む	淡黄色から黄橙色 浅黄橙色からにぶい黄橙色	調整不明 ヘラケズリ	良好	径約 1㎝の穿孔
24	8	38	加工段 5	B7	2 層	須恵器	坏身	(10.0)	3.5		1㎜の白色砂粒を含む	灰紫色 灰紫色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	
24	9	27	加工段 5 溝			肥前磁器	碗				精良	灰白色 灰白色	施釉 施釉	良好	
24	10	28	加工段 6			土師器	甕	(26.4)			1 ～ 2㎜の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
24	11	28	加工段 6			土師器	甑	(27.8)			3㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	調整不明 調整不明	良好	
24	12	28	加工段 6			土製品	移動式竈	(31.8)			1.5㎜以下の砂粒を多く含む	橙色からにぶい橙色 橙色	調整不明 調整不明	良好	
24	13	38	加工段 7			須恵器	高坏	15.6	9.6	8.5	1㎜以下の白色砂粒を多く含む	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	良好	
24	14	38	加工段 7			土師器	甕	(23.2)			1.5㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色から灰黄褐色 にぶい黄橙色から灰黄褐色	ハケ目、ナデ ヘラケズリ、ハケ目	良好	
24	15	28	SD77			須恵器	坏蓋				1㎜以下の白色砂粒を少し含む	灰茶色 灰色	回転ナデ　回転ヘラケズリ 回転ナデ、ナデ	良好	つまみ径 3.8㎝
24	16	28	SD77		2 層	肥前陶器	Ⅲ				精良	施釉）淡青灰色 露胎）淡茶褐色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラケズリ	良好	
24	17	28	SD117			土師器	Ⅲ			(6.0)	1㎜程度の白色砂粒を含む	淡明黄褐色 淡明黄褐色	調整不明 調整不明	良好	
24	18	28	SD127			肥前陶器	碗				精良	淡灰色 淡灰色	施釉 施釉	良好	
24	19	28	SK192			青磁	碗				精良	緑灰色 緑灰色	施釉 施釉	良好	龍泉窯系青磁
24	20	28	Pit87			白磁	Ⅲ				精良	灰白色 灰白色	施釉 施釉	良好	大宰府分類白磁ⅢⅨ類
24	21	28	Pit225			須恵器	坏蓋	14.0			1㎜以下の白色砂粒を多く含む	灰色 灰黄色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	
27	1	28	DT8			須恵器	坏蓋				1 ～ 2㎜の白色砂粒を多く含む	灰黄色 灰色	ヘラケズリ後ナデ、回転ナデ ナデ、回転ナデ	良好	つまみ径 3.4㎝
27	2	38	DT8	A2	2 層	須恵器	坏身	9.2	3.7		2㎜程度の白色砂粒を含む	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	良好	
27	3	28	DT8	A1	2 層	須恵器	坏身	(9.6)	3.5		精良	青灰色 青灰色	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	
27	4	38	DT8	A2	2 層	須恵器	高坏	15.0			1㎜以下の白色砂粒を多く含む	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	良好	底部内面磨滅
27	5	28	DT8	A2	2 層	須恵器	壺				1㎜程度の砂粒含む	緑灰色（自然釉） 灰色	カキ目 回転ナデ	良好	外面自然釉
27	6	28	DT8			土師器	坏	(10.2)			2㎜以下の砂粒を多く含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ハケ目 指頭圧痕	良好	外面赤彩
27	7	28	DT8			土師器	坏	(13.5)	5.9		1 ～ 2㎜の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色から赤褐色 にぶい黄橙色から赤褐色	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕 ヨコナデ、指頭圧痕	不良	内外面赤彩
27	8	38	DT8	A1	2 層	土師器	坏	13.0	4.1		2㎜以下の砂粒を含む	明黄褐色 橙色	調整不明 調整不明	良好	丸底
27	9	28	DT8	A1	2 層	土師器	Ⅲ			(7.2)	精良	明黄褐色 明黄褐色	調整不明、回転糸切り 調整不明	良好	
27	10	29	DT8		2 層	土製品	移動式竈				4㎜以下の砂粒を含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ナデ、指頭圧痕 ヘラケズリ？	良好	
27	11	29	DT8	A2	2 層	土製品	移動式竈				3㎜以下の砂粒含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ナデ ヘラケズリ	良好	
27	12	29	DT8			土製品	移動式竈				2㎜以下の砂粒含む	黄橙色 浅黄橙色	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	良好	
27	13	29	DT8			土製品	土製支脚				2㎜以下の砂粒を含む	浅黄橙色	指頭圧痕	良好	３方向突起
27	14	29	DT8			土製品	土製支脚			(11.0)	1㎜以下の白色砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	指頭圧痕、ナデ 指頭圧痕、ナデ	良好	

図	番号	写真	出土地点		層位	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調 外：上段　内：下段	調整 外面：上段　内面：下段	焼成	備考
			遺構	グリッド											
27	15	29	DT8			土製品	土製支脚				1㎜以下の砂粒を含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ	良好	2方向突起、黒変あり
28	1	29	DT8			土師器	甕	(16.8)			1㎜の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 浅黄橙色から灰黄褐色	ハケ目 ヘラケズリ、ハケ目	良好	
28	2	29	DT8			土師器	甕	(17.4)			1㎜の砂粒を多く含む	灰黄色 灰黄色	調整不明 ヘラケズリ	良好	
28	3	29	DT8			土師器	甕	(19.8)			1 ～ 2㎜の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色から灰黄褐色	ヨコナデ、粗いハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
28	4	29	DT8			土師器	甕			(8.1)	2㎜以下の砂粒を含む	にぶい黄橙色 浅黄橙色	ハケ目 指頭圧痕	良好	平底
28	5	29	DT8	A2	2層	土師器	甕	(21.9)			1㎜以下の砂粒を含む	にぶい黄褐色 暗褐色	ヨコナデ、指頭圧痕 ヘラケズリ	不良	口縁外面煤付着 胴部内面黒斑あり
28	6	29	DT8			土師器	甕	(22.8)			1 ～ 2㎜の砂粒を多く含む	にぶい橙色 にぶい橙色	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	外面体部に煤付着
28	7	30	DT8			土師器	甕	(24.4)			2㎜以下の砂粒含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ヨコナデ ヘラケズリ	良好	
28	8	30	DT8			土師器	甕	(23.8)			1㎜以下の砂粒を含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
28	9	38	DT8			土師器	甕	(26.7)			0.5 ～ 1㎜の砂粒を多く含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
28	10	30	DT8			土師器	甕	(26.4)			1㎜の砂粒を多く含む	灰黄褐色からにぶい黄橙色 灰黄褐色からにぶい黄橙色	ヨコナデ ヨコナデ	不良	外面口縁部から頸部に一部煤付着
28	11	30	DT8			土師器	甕	(26.5)			1 ～ 2㎜の砂粒を多く含む	橙色 橙色	ヨコナデ ヨコナデ	不良	外面頸部に煤付着
28	12	30	DT8			土師器	甕	(28.2)			3㎜以下の砂粒を多く含む	浅黄橙色から明黄褐色 浅黄橙色	調整不明 ヘラケズリ	良好	
28	13	30	DT8			土師器	甕	(28.5)			1 ～ 2㎜の砂粒を多く含む	灰黄褐色 にぶい黄橙色	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	外面口縁部に煤付着
28	14	30	DT8			土師器	甕	(29.8)			1㎜以下の砂粒を含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ヨコナデ ヘラケズリ、ナデ	良好	
28	15	30	DT8			土師器	甕	(29.6)			3㎜以下の砂粒を含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	外面に煤付着
28	16	30	DT8	A2	2層	土師器	甕	(30.0)			3㎜以下の砂粒含む	灰白色 浅黄橙色	ヨコナデ ヘラケズリ	良好	
29	1	31	DT8			土師器	甕	(30.3)			1㎜以下の砂粒を含む	浅黄色 浅黄色	ハケ目 ヘラケズリ	やや不良	
29	2	31	DT8			土師器	甕	(31.1)			2㎜以下の砂粒を含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
29	3	31	DT8			土師器	甕	(30.8)			2㎜以下の砂粒を多く含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ヨコナデ、ハケ目 ヘラケズリ	良好	
29	4	31	DT8			土師器	甕	(37.6)			3㎜以下の砂粒を含む	にぶい黄橙色 淡黄色	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	外面体部に黒斑あり、内面コゲ跡が残る
30	1	38	DT8			土師器	甑	33.2	24.5	16.5	1 ～ 2㎜の砂粒を多く含む	浅黄橙色 浅黄橙色から褐灰色	ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	径1㎝の穿孔が対角の2方向にある
30	2	32 38	DT8	A2	2層	土師器	甑	(20.6)	(21.5)	(13.2)	2㎜以下の砂粒を多く含む	橙色からにぶい褐色 にぶい黄褐色	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	穿孔
30	3	32	DT8			土師器	甑			(17.6)	1 ～ 2㎜の砂粒を含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ハケ目 ヘラケズリ	良好	0.8 ～ 1.0㎝の穿孔
30	4	32	DT8			土師器	甑	(38.0)			3㎜以下の砂粒を含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
30	5	32	DT8			土製品	移動式竈	(39.2)			1 ～ 3㎜の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	調整不明 ヘラケズリ	良好	
30	6	32	DT8			土製品	移動式竈	(43.4)			2㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい黄褐色から浅黄色 にぶい黄褐色から浅黄色	調整不明 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
30	7	32	DT8			土製品	移動式竈	(47.0)			3㎜以下の砂粒を含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	外面口縁部に黒斑あり
30	8	32	DT8			土製品	移動式竈	(47.8)			2 ～ 3㎜の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 浅黄橙色	調整不明 調整不明	良好	
44	1	33	DT2	C5		須恵器	坏蓋				1 ～ 2㎜の白色砂粒を多く含む	灰色 灰色	回転ヘラケズリ後ナデ ナデ	良好	つまみ径 3.6㎝
44	2	33	DT2	C5	5層	須恵器	坏身	8.0	8.1		1㎜以下の白色砂粒を含む	灰色 灰色	ナデ　回転ナデ ナデ　回転ナデ	良好	
44	3	39	DT2	C5	5層	須恵器	坏身	(8.2)	3.4		1㎜以下の白色砂粒を含む	暗灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	ヘラ記号「×」
44	4	33	DT2	C5	2層	須恵器	高台付坏			(8.0)	1㎜程度の白色砂粒を含む	青灰色 青灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	底部内面磨滅
44	5	33	DT2	C5	2層	須恵器	高坏			(8.4)	1㎜以下の微砂粒を多く含む	灰褐色から灰色 灰褐色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	良好	線状透かし
44	6	39	DT2	C5		須恵器	高坏			(10.4)	1㎜以下の白色砂粒を多く含む	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	線状透かし
44	7	33	DT2		2層	須恵器	高坏	16.0			1㎜程度の砂粒を多く含む	青灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	
44	8	33	DT2			須恵器	壺			(8.2)	1㎜以下の白色砂粒を多く含む	青灰色 青灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	良好	

図	番号	写真	出土地点		層位	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調 外：上段 内：下段	調整 外面：上段 内面：下段	焼成	備考
			遺構	グリッド											
44	9	33	DT2	C5	2層	須恵器	壺				精良	灰色 灰色	カキ目 タタキ後回転ナデ	良好	外面自然釉付着
44	10	33	DT2	C5		須恵器	横瓶				精良	灰色 灰色	横方向のカキ目後斜め方向のタタキ タタキ	良好	
44	11	33	DT2			土師器	坏	10.4	3.8	4.0	1㎜以下の白色砂粒を多く含む	黒褐色 暗赤褐色	ナデ、ヘラケズリ ナデ	良好	内面赤彩
44	12	39	DT2	C5	5層	土師器	高坏			8.3	0.5㎜の砂粒を少量含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ミガキ 調整不明	良好	外面赤彩
45	1	33	DT2	C5	2層	土師器	甕	(16.8)			1㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色から黄褐色 にぶい黄橙色から黄褐色	ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
45	2	33	DT2	C5	2層	土師器	甕	(18.2)			5㎜以下の砂粒を含む	橙色 にぶい黄橙色	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
45	3	33	DT2	C5	5層	土師器	甕	(30.3)			2㎜以下の砂粒を多く含む	浅黄橙色からにぶい黄橙色 浅黄橙色からにぶい黄橙色	粗いハケ目 ヘラケズリ	良好	
45	4	33	DT2	C5	2層	土師器	甕	(21.6)			1㎜程度の砂粒を含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ヨコナデ、指頭圧痕 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
45	5	33	DT2	C5	2層	土師器	甕	(23.8)			1㎜以下の砂粒を多く含む	橙色 にぶい橙色	ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
45	6	33	DT2	C5	2層	土師器	甕	(24.4)			1 ㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
45	7	34	DT2	C5	2層	土師器	甕	(15.8)			2 ㎜程度の白色砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ヨコナデ ヨコナデ	良好	砂粒多い
45	8	34	DT2	C5	2層	土師器	甕	(27.2)			1 ㎜程度の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 灰黄褐色	ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	外面に黒斑あり
45	9	34	DT2	C5	2層	土師器	甕	(29.2)			1㎜程度の砂粒を含む	にぶい黄橙色 黄橙色	調整不明 調整不明	良好	
45	10	34	DT2	C5	5層	土師器	甕	(27.8)			1 ～ 2㎜程度の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ヨコナデ ヨコナデ	不良	
45	11	34	DT 2			土師器	甑	(32.8)			0.5 ～ 1㎜の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ヨコナデ、ハケ目、指頭圧痕 ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	
45	12	34	DT2	C5	2層	土師器	甑	(32.0)			2㎜以下の砂粒含む	浅黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ、ハケ目、指頭圧痕 ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	良好	
45	13	34	DT2	C 5	5層	土師器	甑				2㎜前後の砂粒を多く含む	浅黄橙色からにぶい黄橙色 浅黄橙色からにぶい黄橙色	把手貼付後ナデ 調整不明	良好	1 条と 2 条の沈線
45	14	34	DT2	C5	2層	土師器	甑	(29.0)			2㎜前後の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色から浅黄橙色 にぶい黄橙色から浅黄橙色	調整不明 調整不明	良好	1 条の沈線
45	15	34	DT2			土師器	甑				1.5㎜以下の砂粒を多く含む	橙色 橙色	調整不明 調整不明	良好	把手
45	16	34	DT2	C5	5層	土製品	移動式竈？				1㎜以下の砂粒を含む	浅黄橙色 浅黄橙色	ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	良好	煤付着
45	17	39	DT2	C5		土製品	土製支脚			13.0	2㎜以下の砂粒含む	浅黄橙色	ナデ、指頭圧痕	良好	
46	1	35		B2	2層	弥生土器	甕				3㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい橙色から灰褐色 にぶい橙色	ヨコナデ　口縁部に櫛描きによる9条の沈線文 ヨコナデ	良好	煤付着
46	2	35		C1	2層	須恵器	坏蓋				1㎜程度の白色砂粒を含む	灰色 灰色	ナデ、回転ナデ ナデ、回転ナデ	良好	ヘラ記号「×」
46	3	39		C2	4層	須恵器	坏蓋	(15.0)	2.8	(18.0)	1㎜以下の白色砂粒を含む	灰色 灰色	回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	
46	4	39		C4	5層	須恵器	坏蓋	(14.6)	2.5	(17.0)	1㎜程度の白色砂粒を多く含む	青灰色 青灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	内面磨滅
46	5	35		A1	2層	須恵器	坏蓋				1㎜以下の白色砂粒を含む	暗茶灰褐色 青灰色	回転ナデ 回転ナデ	良好	
46	6	35		B1	2層	須恵器	坏蓋				1㎜以下の白色砂粒を含む	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	良好	
46	7	35		C4	4層	須恵器	坏身				精良	青灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	良好	
46	8	39		C5	5層	須恵器	高台付坏	(13.0)	6.8	(8.2)	1㎜程度の白色砂粒を含む	灰色 灰色	回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	
46	9	35		B2	2層	須恵器	高台付坏			(7.0)	精良	暗茶褐色 青灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	底部外面磨滅
46	10	35		C1	2層	須恵器	高台付坏			(8.6)	1㎜以下の砂粒を多く含む	灰色 灰色	回転ナデ ナデ	良好	
46	11	39		B5	2層	須恵器	高台付坏	(14.6)	4.2	(8.4)	1㎜以下の白色砂粒を多く含む	暗黄褐色 暗紫灰色	回転ナデ、静止糸切り後ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	底部内面磨滅
46	12	35		C1	2層	須恵器	高台付坏			(8.0)	1㎜以下の白色砂粒を含む	青灰色 青灰色	回転ナデ、静止糸切り後ナデ ナデ	良好	底部内面磨滅

図	番号	写真	出土地点		層位	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調 外：上段 内：下段	調整 外面：上段 内面：下段	焼成	備考
			遺構	グリッド											
46	13	35			2層	須恵器	高台付坏			(7.9)	1㎜程度の白色砂粒を含む	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	
46	14	35		C2	4層	須恵器	高台付坏			(8.8)	1㎜以下の白色砂粒を含む	灰色 灰色	回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	
46	15	35		C3	2層	須恵器	高台付坏			(12.4)	精良	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	
46	16	35		A1	2層	須恵器	皿			(7.0)	1.5㎜以下の砂粒を少量含む	橙色 橙色	ナデ ナデ	良好	土師器に類似
46	17	40		C1	2層	須恵器	高坏	(15.8)			1㎜の白色砂粒を含む	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	2方向線状透かし、内面磨滅
46	18	40		C2	4層	須恵器	高坏				1㎜以下の白色砂粒を多く含む	青灰色 青灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	良好	内面磨滅、透かしなし
46	19	35		C4	5層	須恵器	高坏			(9.0)	1㎜以下の砂粒を含む	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	良好	高坏の脚と考えられるが、壺等の脚の可能性もある
46	20	35		C2	4層	須恵器	壺			(5.6)	2～3㎜の白色砂粒を含む	濃青灰色 青灰色	回転ナデ、ヘラケズリ 回転ナデ	良好	
46	21	35		C2	2層	須恵器	壺			(7.0)	精良	青灰色 灰色	回転ナデ、ヘラケズリ 回転ナデ	良好	
46	22	35		C6	2層	須恵器	壺				1㎜の白色砂粒を含む	灰色 灰色	回転ナデ、タタキ ナデ	良好	
46	23	35		C1	2層	須恵器	長頸壺				精良	青灰色 青灰色	回転ナデ 回転ナデ	良好	
46	24	35		A1	2層	須恵器	横瓶				精良	灰色 青灰色	カキ目 タタキ	良好	
46	25	35		C2	2層	須恵器	甕				1㎜の白色砂粒を含む	灰色 灰色	タタキ タタキ	良好	
46	26	35		A1	2層	土師器	皿			(10.2)	精良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ、静止糸切り 調整不明	良好	内外面赤彩
46	27	40		B7	2層	土師器	坏	(13.8)	4.6	(4.0)	1㎜以下の砂粒を多く含む	赤褐色 にぶい黄橙色	ナデか 調整不明	良好	外面赤彩
46	28	35		B6	2層	土師器	坏			(8.0)	1㎜の白色砂粒を含む	明黄褐色 橙色	調整不明 調整不明	良好	外面に黒斑あり
46	29	35		B2	2層	土師器	高台付坏			(8.0)	1㎜の白色砂粒を含む	明黄褐色 明黄褐色	回転ナデ、回転糸切り 回転ナデ	良好	
46	30	36		A2	2層	土師器	高台付坏			(8.8)	1㎜以下の白色砂粒を多く含む	赤褐色 赤褐色	回転ナデか、回転糸切り 回転ナデか	良好	
46	31	36		C2	2層	土師器	皿			(5.2)	1㎜以下の白色、赤色粒子を含む	明黄褐色 明黄褐色	調整不明 回転ナデ	良好	
46	32	36		B2	2層	土師器	皿			(5.2)	1㎜程度の白色砂粒を含む	明黄褐色 明黄褐色	糸切り 回転ナデ	良好	
46	33	36		C5	灰褐色土	白磁	皿			6.0	精良	灰白色 灰白色		良好	大宰府分類白磁皿Ⅸ類
46	34	36		B4	2層	青磁	碗	(14.8)			精良	緑灰色 緑灰色		良好	被熱？龍泉窯系青磁
46	35	—		C7	2層	備前	壺				精良	灰白色 暗赤褐色	回転ナデ 回転ナデ	良好	外面自然釉
47	1	36		C2	4層	土師器	甕	(19.1)			2㎜前後の砂粒を多く含む	浅黄橙色からにぶい黄橙色 浅黄橙色からにぶい黄橙色	調整不明 調整不明	良好	外面に煤付着
47	2	36		C2	4層	土師器	甕	(20.1)			1㎜以下の砂粒を多く含む	灰黄色から灰褐色 浅黄色	調整不明 調整不明	良好	
47	3	36		C2	4層	土師器	甕	(21.9)			1㎜以下の砂粒を多く含む	淡黄色から灰黄色 淡黄色	調整不明 調整不明	良好	
47	4	36		D4	6層	土師器	甕	(22.6)			2㎜以下の砂粒含む	橙色 にぶい褐色	ヨコナデ ヘラケズリ	良好	
47	5	36		D4	6層	土師器	甕	(25.0)			2㎜以下の砂粒含む	灰白色 灰白色	調整不明 調整不明	良好	
47	6	40		C2	4層	土師器	甕	(26.0)			2㎜以下の砂粒含む	にぶい黄褐色 淡黄色	ヨコナデ、指頭圧痕 調整不明	良好	口縁部が一部黒変している
47	7	37		B6	2層	土師器	甕	(31.8)			2㎜以下の砂を多く含む	にぶい黄橙色 浅黄橙色	調整不明 ヘラケズリ	良好	
47	8	37		B5	2層	土師器	甑	(34.4)			2㎜前後の砂粒を多く含む	浅黄橙色からにぶい黄橙色 浅黄橙色	調整不明 調整不明、ヘラケズリ	良好	
47	9	37		C2	4層	土師器	甑			(14.0)	1㎜以下の砂粒を多く含む	浅黄橙色 浅黄橙色	調整不明 調整不明	良好	径約1cmの穿孔
47	10	37		C3	2層	土製品	竈？	(32.8)			1.5㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい橙色から浅黄橙色 にぶい橙色から浅黄橙色	ハケ目 ヘラケズリ	良好	外面に煤付着
47	11	37		C2	4層	土製品	竈				2㎜以下の砂粒を多く含む	浅黄橙色 浅黄橙色	調整不明 調整不明	良好	庇部
47	12	37		C2	4層	土製品	竈				1.5㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ ヘラケズリ	良好	外面一箇所凹む
47	13	37		C2	4層	土製品	土製支脚				1.5㎜以下の砂粒を多く含む	浅黄橙色から橙色	ナデ	良好	2方向突起
47	14	37		C2	4層	土製品	土製支脚			(12.2)	2㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙色 橙色	指頭圧痕 調整不明	良好	

第 3 表　浅柄Ⅲ遺跡 出土遺物観察表（土製品）

図	番号	写真	出土地点		層位	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	胎土	色調	調整	焼成	備考
			遺構	グリッド												
46	36	36		C1	2 層	土製品	羽口？					1㎜以下の砂粒を含む	浅黄色 浅黄色	ナデ	良好	
46	37	36		C6	2 層	土製品	土錘	2.7	1.0	1.4	4.71	1㎜以下の白色砂粒を多く含む	淡黄褐色 淡黄褐色	ナデ？	良好	双孔棒状土錘
46	38	36		C2	4 層	土製品	土錘	5.0	2.3	2.5	34.88	1㎜以下の砂粒を多く含む	浅黄橙色	ナデ	良好	管状土錘
46	39	36		C6	茶色土	土製品	有孔円盤	直径 3.2		0.7	7	1㎜程度の赤色粒子を含む	橙色 橙色	ナデ ナデ	良好	内面に文様あり

第 4 表　浅柄Ⅲ遺跡 出土遺物観察表（鉄製品）

図	番号	写真	出土地点		層位	器種	種別	計測値			備考
			遺構	グリッド				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	
47	15	37		C7	2 層	鉄製品	刀	16.2	1.6	0.2	炭化物付着
47	16	37		B2	2 層	鉄製品	板状鉄製品	2.4	1.9	0.2	板状の鉄片

第 5 表　浅柄Ⅲ遺跡 出土遺物観察表（石製品）

図	番号	写真	出土地点		層位	種別	器種	計測値				石材	色調	備考
			遺構	グリッド				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
47	17	37		2 層	C1	石製品	棒状石器	8.4	3.4	3.4	157.09	流紋岩	浅黄色、オリーブ黄と灰オリーブの縞　一部ににぶい黄橙	
47	18	37		2 層	B6	石製品	砥石	7.5	6	6.1	340.94	流紋岩	灰白色	
47	19	37		2 層	A1	石製品	砥石	9.2	5.3	4.7	298.89	砂岩	灰白色	
—	—	40	加工段 7			竈構築材		18	18	17	4050	スコリア		

第 6 表　浅柄Ⅲ遺跡 出土土器集計表

種　別	点数	種　別	点数	種　別	点数
龍泉窯系青磁碗	5	須恵器蓋Ⅰ類	32	須恵器不明	24
中国製白磁皿	2	須恵器蓋Ⅱ類	3	土師器坏皿	126
備前壺	1	須恵器坏Ⅱ A 類	72	赤彩土師器坏皿	5
備前擂鉢	1	須恵器高坏Ⅱ類 A2	10	土師器	606
肥前陶器碗	1	須恵器高坏Ⅱ類 B2	6	土師器甕	2,694
肥前陶器皿	2	須恵器高坏Ⅱ類	36	土師器坏	10
肥前磁器碗	5	須恵器壺	24	土師器甑	31
弥生土器後期甕	2	須恵器長頸壺	3	土錘	2
須恵器蓋坏 A8 蓋	6	須恵器長頸壺Ⅰ類	3	竈	41
須恵器蓋坏 A7 身	2	須恵器長頸壺Ⅱ類	2	土製支脚	18
須恵器蓋坏 A8 身	16	須恵器甕	55	羽口	1
須恵器蓋坏	16	須恵器横瓶・平瓶	5	土製円盤	1

第 7 表　浅柄Ⅲ遺跡 遺構一覧表

遺構名	グリッド	遺構種類	大きさ (cm)	深さ (cm)	土色	遺物	備考
SK 001	A1.B1	土坑	160 × 82	7	暗灰	土師器甕　竈？	凹みか？遺構か？
SK 013	B1.2	土坑	104 × 60	29	黒	土師器甕	深い、長方形
SK 015	B1.B2	土坑	60 × 55	16	黒		方形
SK 054	B1	土坑	59 × 44	14	黒		土坑か？
SK 055	B1	土坑	130 × 76（最大）	36	黒		石あり
SK 066	B1	土坑	69 × 34	12	黒		浅い
SK 069	B1	土坑	81 × 64（最大）	17	黒	土師器甕	Pit か？遺構か？
SK 100	C4	土坑	134 × 68（最大）	27	茶褐		第一遺構面
SK 102	C3	土坑	70 × 46	10	黒		浅い
SK 103	C3	土坑	76 × 54	25	黒	土師器甕	
SK 107	C3	土坑	111 × 102	9	黒		浅い
SK 164	B4	土坑	102 × 79（最大）	19	暗灰		
SK 169	B4.5	土坑	102 × 96	16	暗灰	土師器甕	土坑
SK 171	B4	土坑	102 × 74	10	暗灰		浅い土坑
SK 177	B4	土坑	170（残）× 94（最大）	16	黒		不整形の土坑
SK 187	B4	土坑	56 × 38	14	暗灰		
SK 188	B4C4	土坑	82 × 39	16	黒		皿状
SK 191	C4	土坑	80 × 60	14	黒		土坑か？
SK 192	B4	土坑	284 × 156（最大）	18	黒	青磁碗	溝か
SK 199	B4	土坑	48 × 44	17	暗褐		
SK 224	C6	土坑	62 × 46（最大）	11	茶褐	被熱石	スコリア
SK 270	B5	柱穴	88 × 48（最大）	16	茶褐		
SD 025	B2	溝	60 × 40	8	黒		浅い溝
SD 027	A2.B2	溝	136 × 38（最大）	3	黒		下から Pit88,Pit89
SD 030	B2	柱穴	94 × 36（最大）	11	黒		下から Pit
SD 045	B1.2	溝	257 × 56（最大）	11	黒		
SD 071	B1	溝	166 × 76（最大）	16	黒		南端切る小さい Pit あり
SD 077	B2-5	溝	2950 × 340（最大）	50	灰褐	須恵器　肥前陶器　竈	近世
SD 078		溝	—	20	灰褐		SD77 と同一
SD 090	A2.B2	溝	154（残）× 36（最大）	4	暗灰		浅い溝
SD 117	C3	溝	636 × 60（最大）	13	黒	土師器	浅い溝　SD194 と同一
SD 123	C3	溝	174 × 44（最大）	8	黒		浅い溝
SD 125	B3	溝	82 × 26（最大）	4	暗灰褐		浅い Pit か？溝
SD 126	C4.5	溝	600（残）× 36（最大）	20	黄褐色		第一遺構面
SD 127	B3.4	溝	560（残）× 49（最大）	12	灰褐	肥前陶器	SD77 から分岐する、近世
SD 134	A2.B2	溝	260（残）× 48	15	暗灰		浅い溝
SD 149	C3	溝	70 × 30	20	暗灰		
SD 155	B3	溝	(488+186) × 55（最大）	16	暗灰	土師器甕	加工段 1 の中、しっかりした溝
SD 156	B3	溝	110 × 21（残）	7	暗灰		加工段 1 の中、浅い溝
SD 181	C4(B4)	溝	364 × 56（最大）	8	暗灰		浅い溝
SD 194	C4	溝	58 × 35	21	暗灰		SD117 と同一
SD 200	B4.5	溝	(180+116) × 44（最大）	11	褐色		
SD 246	C6	溝	294 × 18	(最深)8	茶褐		石あり
SD 248	B6	溝	256 × 26（最大）	5	暗灰茶褐		
SD 249	B6	溝	148 × 18 + 27 × 20	4	暗灰茶褐		
SD 255	B6.7	溝	(440 + 150) × 96（最大）	(最深)13	茶褐		石あり
Pit 002	A1	柱穴	37 × 33	18	黒		しっかりした Pit
Pit 003	A1	柱穴	31 × 26	6	黒		
Pit 004	B1	柱穴	62 × 43	12	黒		しっかりした方形 Pit　SB01
Pit 005	B1	柱穴	18 × 16	14	黒		小さい Pit
Pit 006	B1	柱穴	52 × 46	22	黒		しっかりした Pit　SB01
Pit 007	A1.B1	柱穴	(φ 30)	8	暗灰		Pit95 に切られる
Pit 009	B1	柱穴	20 × 17	18	黒		小さい Pit　SB01
Pit 010	B1	柱穴	32 × 30	10	黒		しっかりした Pit　SA02
Pit 011	B1	柱穴	16 × 15	4	黒		しっかりした Pit
Pit 012	B1	柱穴	100 × 58（最大）	13	黒	土師器甕	長方形、人頭大の石あり　SB01

遺構名	グリッド	遺構種類	大きさ (cm)	深さ (cm)	土色	遺物	備考
Pit 014	B1	柱穴	45 × 40	西 24 東 7	黒		Pit2 つ　西 Pit が新しい
Pit 016	A2	柱穴	27 × 23	9	黒		浅い　SA01
Pit 017	B2	柱穴	φ 26	6	黒		浅い　SA01
Pit 019	B2	柱穴	φ 30	8	黒		小さい Pit　SA01
Pit 020	B2	柱穴	φ 27	17	黒		しっかりした Pit　SA01
Pit 021	B2	柱穴	58 × 26（最大）	西 18 東 6	黒		SB03
Pit 022	A2	柱穴	38 × 29	29	黒		しっかりした Pit
Pit 023	B2	柱穴	49 × 39	14	黒		SA02
Pit 024	B2	柱穴	29 × 21	6	暗灰		小さい Pit　SB02
Pit 026	B2	柱穴	25 × 22	8	黒		しっかりした Pit　SB03
Pit 028	A2.B2	柱穴	φ 21	14	暗灰	土師器甕	小さい Pit
Pit 029	A2.B2	柱穴	72 × 29	西 12 東 16	暗灰		Pit2 つ
Pit 031	B2	柱穴	21 × 19	21	暗灰		しっかりした Pit
Pit 032	B2	柱穴	32 × 29（最大）	30	暗灰		しっかりした Pit　SB02
Pit 033	B2	柱穴	29 × 21	9	黒		SB03
Pit 034	B2	柱穴	33 × 26	4	茶		浅い　SB03
Pit 035	B2	柱穴	33 × 29	12	灰		SB03
Pit 036	B2	柱穴	26 × 23	13	黒		小さい Pit　SB03
Pit 037	B2	柱穴	52 × 47	18	黒	土器？	しっかりした Pit　SA03
Pit 038	B2	柱穴	64 × 58	20	黒		しっかりした Pit　SA03
Pit 039	B2	柱穴	52 × 34	16	黒		しっかりした Pit
Pit 040	B2	柱穴	φ 39	西 17 東 9	暗褐		2 つの Pit か　西新、東古
Pit 041	B2	柱穴	31 × 23	8 より深い	黒		
Pit 042	B2	柱穴	φ 22	16	黒		小さい
Pit 043	B2	柱穴	22 × 20	11	黒		
Pit 044	B2	柱穴	φ 24	16	黒		
Pit 046	B1		39 × 33	14	黒		浅い
Pit 047	B1		36 × 24	5	黒		浅い
Pit 048	B1		51 × 41	12	黒		浅い
Pit 049	B1	柱穴	31 × 29	16	黒		しっかりした Pit
Pit 050	B1	柱穴	49 × 33	13	黒		土坑か？　石あり
Pit 051	B1	柱穴	25 × 21	24	黒		深い
Pit 052	B1	柱穴	26 × 22	14	黒		小さいがしっかりしている
Pit 053	B1	柱穴	φ 34	14	黒		しっかりした Pit
Pit 056	B1	柱穴	37 × 29	18	黒		Pit か？小さい
Pit 057	B1	柱穴	50 × 47	24	黒		しっかりした Pit
Pit 058	B1		(φ 41)	6	黒		浅い
Pit 059	B1	柱穴	31 × 25	9	黒		しっかりした Pit
Pit 060	B1	柱穴	φ 19	9	黒		小さい Pit
Pit 061	B1	柱穴	38 × 32	8	黒		しっかりした Pit
Pit 062	B1	柱穴	37 × 26	14	暗灰		しっかりした Pit
Pit 063	B1	柱穴	29 × 22	9	黒		小さい Pit
Pit 064	B1	柱穴	39 × 36	16	黒		しっかりした Pit
Pit 065	B1	柱穴	32 × 29	—	黒		しっかりした Pit
Pit 067	B1	柱穴	27 × 24	11	暗灰		しっかりした Pit
Pit 068	B1	柱穴	46 × 22（最大）	16	黒		しっかりした Pit　石あり
Pit 070	C1	柱穴	22 × 21	8	黒		小さい Pit
Pit 072	B1	柱穴	φ 26	16	黒		小さい Pit
Pit 073	B1	柱穴	24 × 21	9	暗灰褐		小さい Pit
Pit 074	B2	柱穴	φ 34	11	黒		SA03
Pit 075	B2	柱穴	43 × 37	—	黒		小さい Pit　SA03
Pit 076	B2	柱穴	26 × 23	10	黒		小さい Pit　SA04
Pit 079	B2	柱穴	23 × 20	8	灰褐		小さい Pit
Pit 080	B2.C2	柱穴	28 × 24	16	黒		小さい Pit　SA04
Pit 081	C1		24 × 18	8	黒		小さい　遺構か？
Pit 082	B2	柱穴	(49) × 25（最大）	5	暗灰		小さい Pit
Pit 083	B2		44 × 34	5	暗灰		浅い　遺構か？

遺構名	グリッド	遺構種類	大きさ (cm)	深さ (cm)	土色	遺物	備考
Pit 084	—		—	—	暗灰		浅い　遺構？
Pit 085	B2	柱穴	φ 30	9	暗灰		小さい Pit　SA04
Pit 086	B2	柱穴	26 × 24	6	暗灰		小さい Pit
Pit 087	B2	柱穴	59 × 31（最大）	10	暗灰	白磁皿	小さい Pit
Pit 088	A2.B2	柱穴	(φ 30)	—	黒		しっかりした Pit　SB02
Pit 089	A2.B2	柱穴	(25) × (18)	—	黒		しっかりした Pit
Pit 091	B2	柱穴	50 × 28（最大）	13	暗灰		小さい Pit
Pit 092	B2	柱穴	φ 20	18	暗灰		SD90 内
Pit 093	C4	柱穴	36 × 22	14	茶褐		浅い Pit　第一遺構面
Pit 094	C4	柱穴	66 × 38	42	茶褐		細長い Pit　第一遺構面
Pit 095	B1	柱穴	-26	22	黒		Pit7 を切っている、新しい
Pit 096	C4	柱穴	58 × 29	34	茶褐	土師器甕	細長い Pit　第一遺構面
Pit 097	C4	柱穴	31 × 21	7	茶褐		浅い Pit、Pit93 と似る　第一遺構面
Pit 098	C4	柱穴	32 × 25	17	茶褐		しっかりした Pit　第一遺構面
Pit 099	C4	柱穴	41 × 24	18	茶褐		細長い Pit　第一遺構面
Pit 101	C3	柱穴	(φ 26)	24	—		浅い Pit
Pit 104	C3	柱穴	54 × 24	9	黒		小さい Pit
Pit 105	C3	柱穴	29 × 21	16	黒		小さい Pit
Pit 106	C3	柱穴	51 × 42	10	黒		浅い Pit
Pit 108	C3	柱穴	43 × 37	8	黒		溝を切っている
Pit 109	B3	柱穴	26 × 24	10	暗灰		小さい Pit
Pit 110	B3	柱穴	28 × 22	25	黒		しっかりした Pit
Pit 111	C3	柱穴	φ 36	16	黒	土師器甕	しっかりした Pit
Pit 112	B3	柱穴	φ 22	12	黒		しっかりした Pit
Pit 113	B3	柱穴	φ 24	9	黒		小さい Pit
Pit 114	B3	柱穴	46 × 26	8	黒		浅い Pit ＋小 Pit
Pit 115	B2.3	柱穴	38 × 21	10	黒	須恵器坏身	しっかりした Pit
Pit 116	B3	柱穴	26 × 21	11	黒		しっかりした Pit
Pit 118	B3	柱穴	φ 23	11	暗灰		しっかりした Pit
Pit 119	2B3	柱穴	φ 26	9	暗灰		小さい Pit
Pit 120	B3	柱穴	28 × 24	11	黒		しっかりした Pit
Pit 121	C3	柱穴	36 × 26	18	黒		小さい Pit、2 段
Pit 122	C3	柱穴	32 × 22	9	黒		小さい Pit
Pit 124	B3	柱穴	φ 23	7	黒		小さい Pit
Pit 128	B3	柱穴	21 × 19	13	暗灰褐		しっかりした Pit
Pit 129	B3	柱穴	φ 24	24	黒		しっかりした Pit
Pit 130	B3	柱穴	30 × 25	8	暗灰褐		Pit120,Pit116 とセット
Pit 131	B3	柱穴	20 × 18	12	黒		小さい Pit
Pit 132	B1.2	柱穴	φ 29	—	—		SK13 内
Pit 133	B1.2	柱穴	27 × 24	—	—		SK13 内
Pit 135	B2	柱穴	φ (50)	—	—		Pit18 の隣り　SA02
Pit 136	C3	柱穴	φ 26	—	—		Pit103 の隣り
Pit 138	C3	柱穴	26 × 21	—	—		SDF123 内
Pit 139	C3	柱穴	43 × 33	—	—		SD117 内
Pit 140	C3.4	柱穴	36 × 32	—	—		SD117 内
Pit 141	C3.4	柱穴	44 × 25（最大）	—	—		SD117 内
Pit 142	C3	柱穴	25 × 23	7	—		しっかりした Pit
Pit 143	B3	柱穴	φ 21	24	暗灰		深い
Pit 144	B3	柱穴	(22) × 16	—	暗灰		SD134 内
Pit 145	B3	柱穴	24 × (18)	—	暗灰		SD134 内
Pit 146	B3	柱穴	39 × 25	—	暗灰		SD134 内
Pit 147	C3	柱穴	47 × 34	11	暗灰		
Pit 148	C3	柱穴	36 × 30	22	暗灰		
Pit 150	C3	柱穴	39 × 31	17	暗灰		深い
Pit 151	C3	柱穴	φ 31	12	暗灰		
Pit 152	B3.C3	柱穴	34 × 30	13	暗灰		
Pit 153	B3	柱穴	31 × 27	12	暗灰		

遺構名	グリッド	遺構種類	大きさ (cm)	深さ (cm)	土色	遺物	備考
Pit 154	B3	柱穴	20 × 18	—	黒		
Pit 157	C3	柱穴	38 × 36	10	暗灰		
Pit 158	C4	柱穴	21 × 19	9	暗灰		
Pit 159	C4	柱穴	28 × 25	11	黒		しっかりした Pit　SA08
Pit 160	B4	柱穴	33 × 31	6	暗灰		浅い Pit　SA08
Pit 161	B4	柱穴	φ 18	14	暗灰		小さい Pit
Pit 162	B4	柱穴	26 × 24	19	暗灰		しっかりした Pit
Pit 163	B4	柱穴	46 × 28（最大）	18	黒		しっかりした Pit
Pit 165	B4	柱穴	52 × 35（最大）	28	暗灰		
Pit 166	B4	柱穴	32 × 23（最大）	13	暗灰		
Pit 167	B4	柱穴	32 × 28	6	暗灰		
Pit 168	B4	柱穴	48 × 42	9	黒		
Pit 170	B4	柱穴	(32)	12	暗灰		
Pit 172	B4	柱穴	22 × 20	10	黒		Pit
Pit 173	B4	柱穴	31 × 26	16	黒		Pit か
Pit 174	B4	柱穴	26 × 25	9	黒		小さい Pit
Pit 175	B4	柱穴	44 × 40（最大）	東 4 西 13	暗灰		Pit2 つか？
Pit 176	B4	柱穴	26 × 22	6	暗灰		Pit
Pit 178	B4	柱穴	48 × 34	—	—		
Pit 179	C4	柱穴	φ 31	12	黒		しっかりした Pit
Pit 180	B4	柱穴	φ 37	14	黒		しっかりした Pit
Pit 182	C4		42 × 30	12	暗灰		Pit か？
Pit 183	C4		40 × 35	16	暗灰		Pit か？
Pit 184	C4	柱穴	73 × 38（最大）	10	暗灰		浅い
Pit 185	C4	柱穴	φ 40	10	暗灰		しっかりした Pit
Pit 186	C4	柱穴	31 × 28	11	暗灰		しっかりした Pit
Pit 189	B5	柱穴	φ 25	8	暗灰		浅い Pit
Pit 190	B4	柱穴	23 × 20	16	黒		しっかりした小 Pit
Pit 193	B4	柱穴	46 × 23	?	褐色		浅い
Pit 195	C4	柱穴	102 × 43（最大）	14	暗灰		浅い Pit
Pit 196	C4	柱穴	34 × 33	13	黒		しっかりした Pit
Pit 197	C4	柱穴	39 × 31	8	暗灰		しっかりした Pit　SA08
Pit 198	B4	柱穴	34 × 31	23	暗褐		
Pit 201	B4	柱穴	28 × 24	10	暗灰褐		
Pit 202	B3	柱穴	21 × 19	17	暗灰褐		
Pit 203	B3	柱穴	40 × 32	24	暗灰褐		
Pit 204	B1		φ 21	13	黒褐		
Pit 205	B3	柱穴	φ 31（残）	20	—		
Pit 206	C3	柱穴	φ 25	10	—		加工段 1 内
Pit 207	B3	柱穴	32 × 19	13	—		加工段 1 内
Pit 208	A2	焼土	φ 20	18	暗茶褐		DT08 内　炭を多く含む
Pit 210	A2	柱穴	28 × 18	5	灰黄褐		DT08 内
Pit 211	A2	柱穴	φ 50	29			DT08 内
Pit 213	C5	柱穴	26 × 20	10	黒褐		
Pit 214	B5	柱穴	φ 38	9	茶褐		SB04
Pit 215	B5	柱穴	φ 46	12	茶褐		
Pit 216	B5.6	柱穴	50 × 40	6	茶褐		SB04
Pit 217	B5.6	柱穴	φ 26	12	茶褐		石あり
Pit 218	B6	柱穴	26 × 20	4	茶褐		
Pit 219	B5	土坑	86（最大）× 62（最大）	21	黒褐		石あり　SB04
Pit 220	B5	柱穴	60（最大）× 50（最大）	10	茶褐		石あり
Pit 221	B5.6	柱穴	50 × 32（最大）	11	茶褐	土師器	石あり
Pit 222	B5	柱穴	36 × 26	11	茶褐		
Pit 223	B5	柱穴	38 × 30	10	茶褐		石あり
Pit 225	B6	土坑	96 × 42（最大）	29	茶褐	須恵器　被熱石	SB04
Pit 226	B6	柱穴	40 × 30	7	黒褐		石あり　SA06
Pit 227	B6	柱穴	39 × 32	30	茶褐		

遺構名	グリッド	遺構種類	大きさ (cm)	深さ (cm)	土色	遺物	備考
Pit 228	B6	柱穴	44 × 38	9	茶褐		石あり　SA06
Pit 229	B6	柱穴	26 × 22	7	茶褐		
Pit 230	B6	柱穴	23 × 21	13	茶褐		
Pit 231	B6		62 × 56	8	淡黄茶褐		石あり　SA06
Pit 232	B6	柱穴	34 × 25	16	茶褐		SB05
Pit 233	B6	柱穴	φ 32	22	茶褐		石あり
Pit 234	B6	柱穴	23 × 17	7	暗灰茶褐		
Pit 235	B6	柱穴	φ 10	28	茶褐		深い　石あり
Pit 236	B6	柱穴	24 × 22	26	茶褐	土師器甕	石あり　SB05
Pit 237	B6	柱穴	58 × 49	18	暗灰茶褐		石あり
Pit 238	B6	柱穴	46 × 32（最大）	7	茶褐		
Pit 239	B6	柱穴	34 × 30	8	茶褐		
Pit 240	B6	柱穴	26 × 20	5	茶褐		SB05
Pit 242	B6	柱穴	47 × 41	16	淡茶褐		加工段 5 より古い
Pit 243	B6	柱穴	94 × 57	50	暗茶褐		SA07
Pit 244	B7	柱穴	48 × 42 168 × (120)（最大）	41 15	茶褐	土師器甕	加工段 7 内
Pit 245	B7	柱穴	54 × 29	14	茶褐		
Pit 247	B6	柱穴	28 × 20	4	暗灰茶褐		
Pit 250	B6	柱穴	(φ 26)	12	暗灰茶褐		
Pit 251	B7	柱穴	38 × 24（最大）	29	暗茶褐		
Pit 252	B6	柱穴	36 × 32	4	暗灰茶褐		石あり
Pit 253	B6	柱穴	34 × 25	16	暗灰茶褐		
Pit 254	B6	柱穴	24（最大）× 24（最大）	10	茶褐		SB05
Pit 256	B7	柱穴	72（最大）× 44（最大）	48	暗茶褐		石あり
Pit 257	B6	柱穴	82（最大）× 60（最大）	14	暗茶褐		炭化物あり　SA07
Pit 258	B6	柱穴	70 × 36	8	茶褐		
Pit 259	B.C6	柱穴	60 × 28	13	黒褐		
Pit 260	B7	柱穴	106 × 62	56			SA07
Pit 261	C6	柱穴	66 × 28（最大）	8	黒褐		
Pit 262	B6	柱穴	28 × 24（最大）	11	茶褐		SB05
Pit 263	B7	柱穴	27 × (24)	9	茶褐		
Pit 264	B6	柱穴	20 × 17	14	茶褐		
Pit 265	B6	柱穴	(60) × 22（最大）	15	茶褐		
Pit 266	B6	柱穴	32 × 24	4	茶褐		
Pit 267	B6	柱穴	50 × 26	6	茶褐		SA05
Pit 268	C6	柱穴	36 × 26	12	茶褐	土師器	
Pit 269	B6	柱穴	26 × 18	12	黒褐		SA05
Pit 271	B.C6	柱穴	74 × 34（最大）	8	黒褐	土師器甕	
Pit 272	B7	柱穴	26 × 16	4	灰茶褐	土師器	加工段 7 内
Pit 273	B7	柱穴	50 × 31	12	黒褐		加工段 7 内
Pit 274	B.C7	柱穴	27 × 24	9	黒褐		加工段 7 内
Pit 275	B5	柱穴	18 × 16	22	黒褐	土師器	SA05
Pit 276	C5	柱穴	32 × 28	18	茶褐		
Pit 277	B7	柱穴	32 × 25	12	—		
DT8	A1.2.B1.B2	土器溜	724（最大）× 222	（20）		多数	
DT2	C4.5	土器溜	範囲 5.5 × 5.5（最大）	—			
炭溜り 18	B2	炭溜り	70 × 50	9	黒	土師器甕	柵 1 に切られる
炭溜り 209	A2	炭溜り	36 × 32	5	暗茶褐	土師器	DT8 内
SX 212	B7		132 × (110)（最大）	?			試掘坑

写真図版

遺跡周辺から北方向を望む

上空から見た浅柄Ⅲ遺跡（東から）

図版 2

上空から見た浅柄Ⅲ遺跡（北から）

上空から見た浅柄Ⅲ遺跡（北東から）

浅柄Ⅲ遺跡調査前近景（北から）

浅柄Ⅲ遺跡調査前近景（東から）

図版 4

調査区北壁土層（南から）

調査区南壁土層（北から）

調査区東壁土層（西から）

サブトレンチ 4 南壁土層（北西から）

図版 6

南側調査区完掘状況（東から）

南側調査区完掘状況（南から）

南側調査区完掘状況（北東から）

北側調査区完掘状況（南西から）

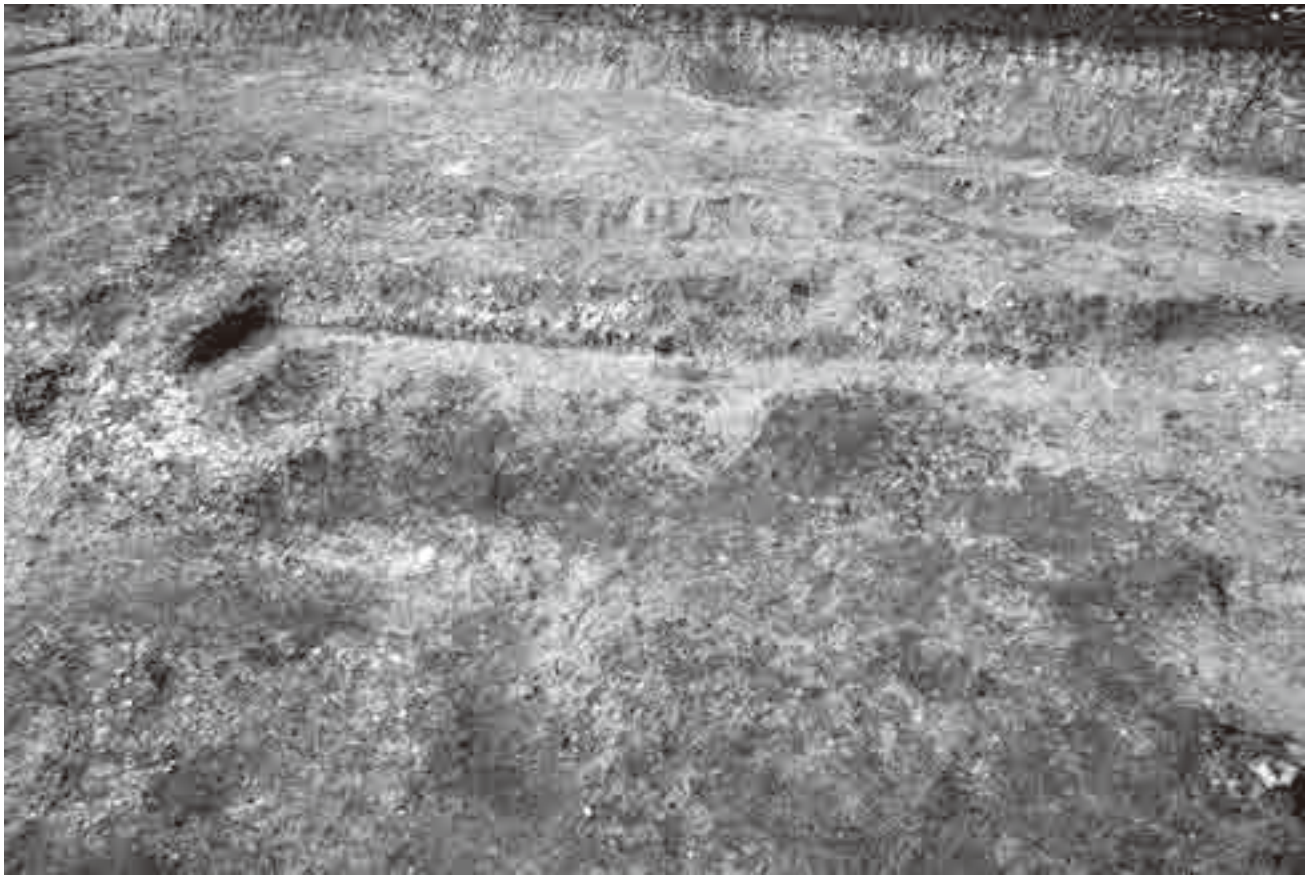
図版 8

南側調査区完掘状況（北東から）

南側調査区完掘状況（北東から）

南側調査区完掘状況（東から）

加工段 1 完掘状況（東から）



加工段 5 完掘状況（東から）

図版 10

加工段 1 完掘状況（南から）

加工段 2・4 完掘状況（東から）

加工段 5・6 完掘状況（北東から）

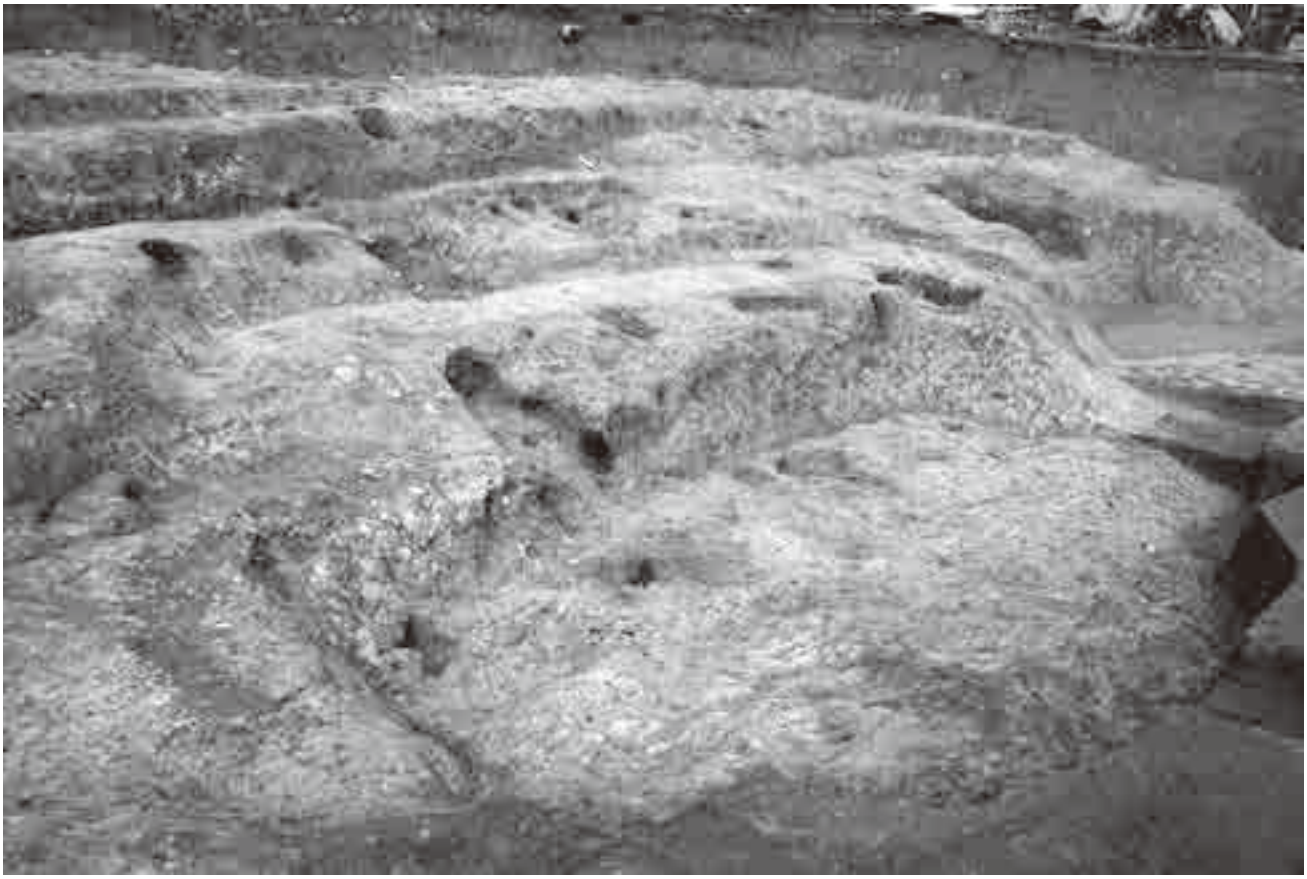
加工段 5 溝土層堆積状況（南から）

加工段 6 遺物出土状況（東から）

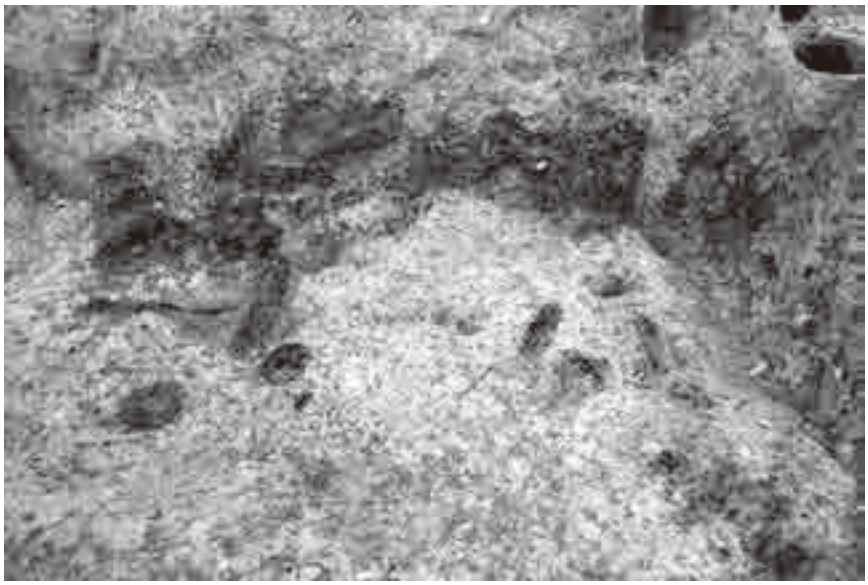
加工段 6 遺物出土状況（東から）

図版 12

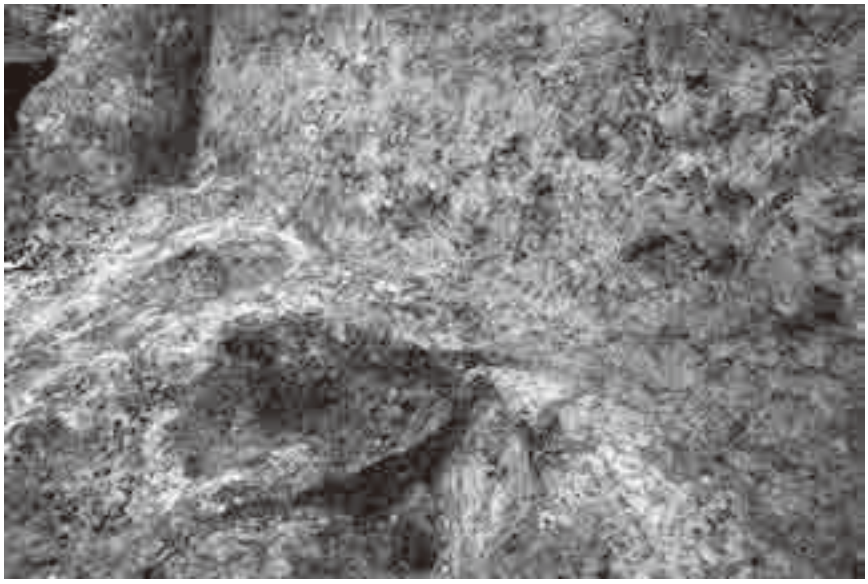
加工段 7 炭化物検出状況（北東から）



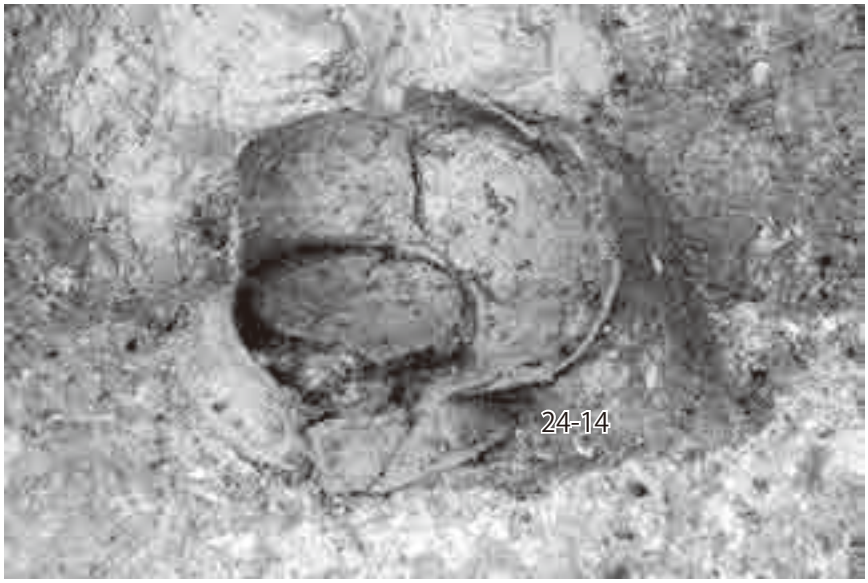
加工段 7 完掘状況（南東から）



加工段 7 炭化物検出状況（東から）

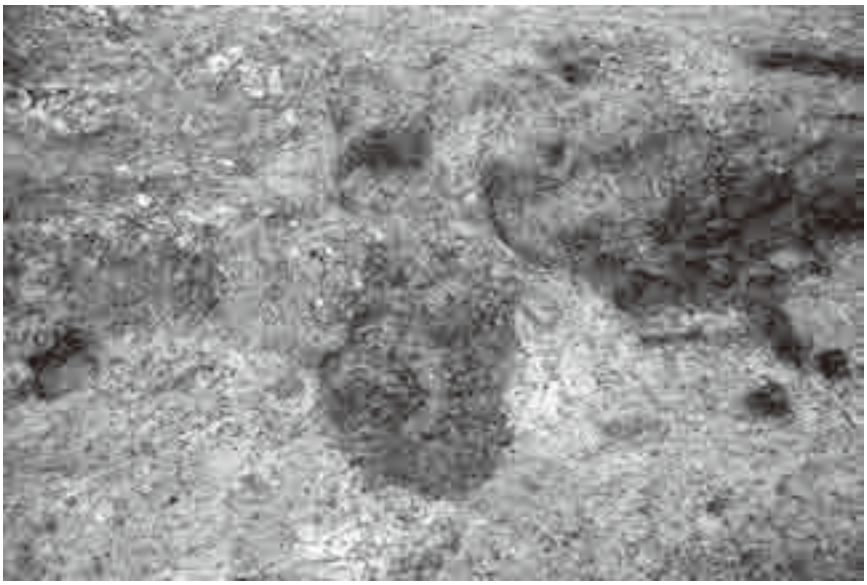


加工段 7Pit273 土層（北から）



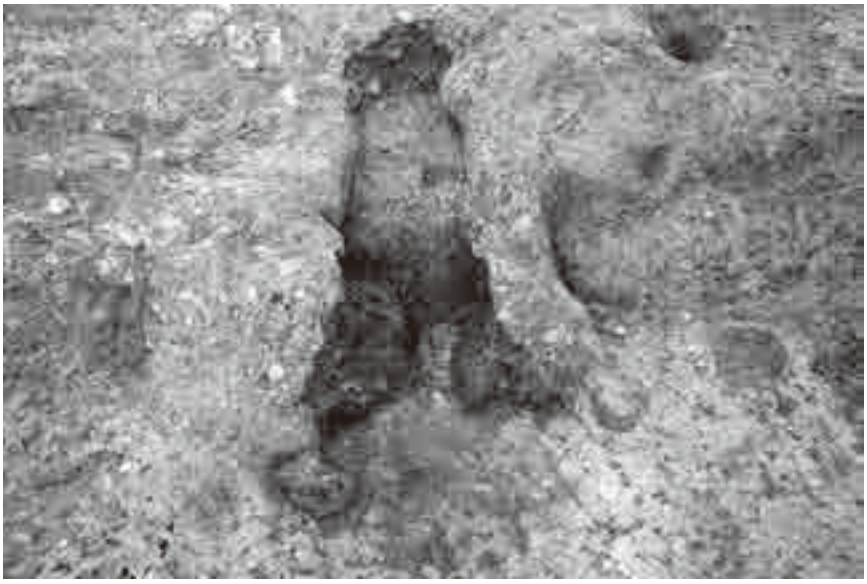
加工段 7 遺物出土状況（東から）

図版 14

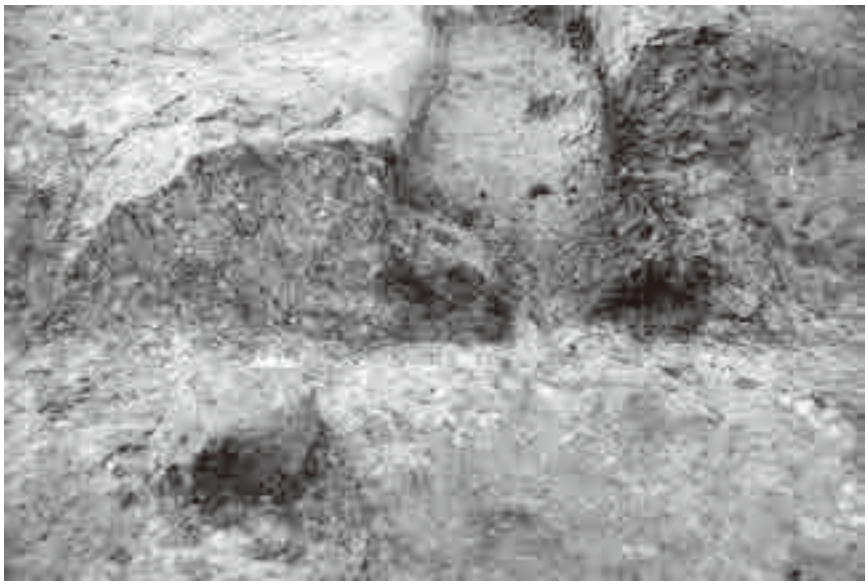


加工段 7 竈検出状況（東から）

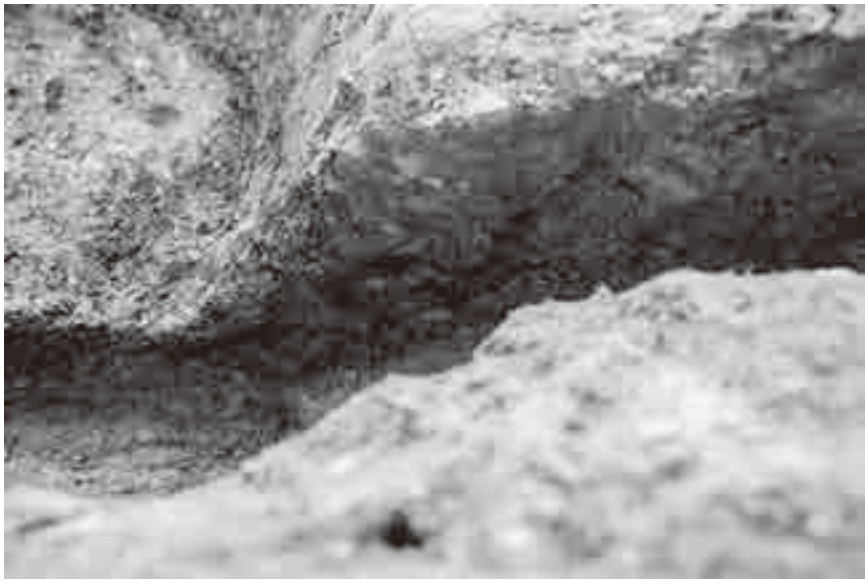
加工段 7 竈完掘状況（北東から）



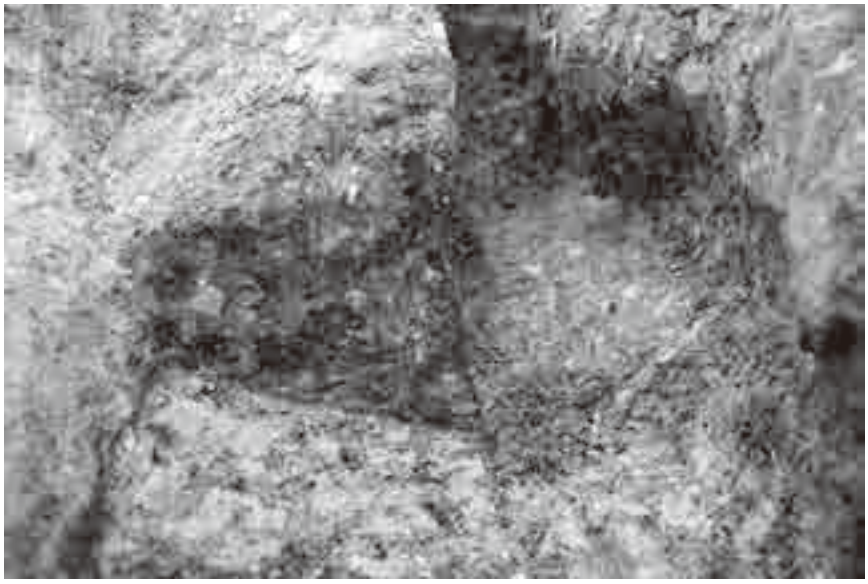
加工段 7 竈完掘状況（東から）



加工段 7 竈焚口横断土層（東から）



加工段 7 竈縦断土層（北から）



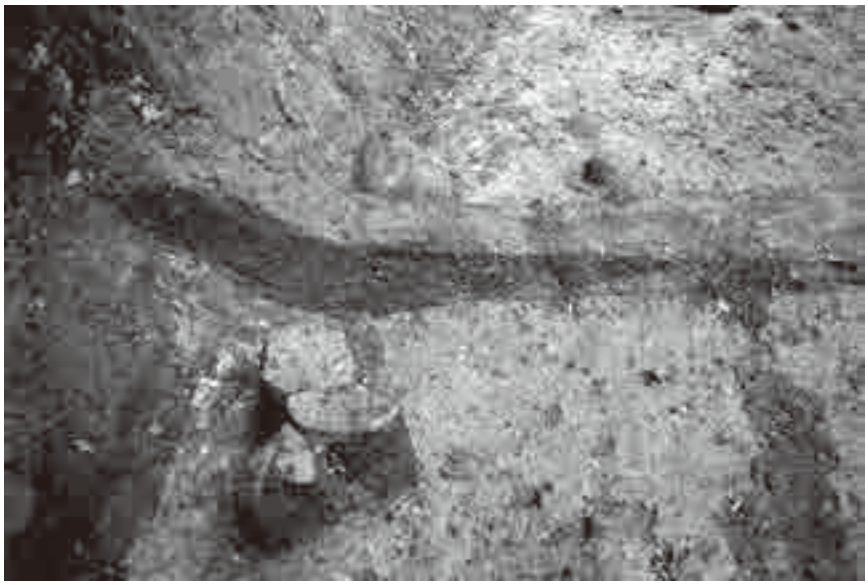
加工段 7 竈内横断土層（東から）

図版 16

加工段 7 焼土 2 土層（東から）

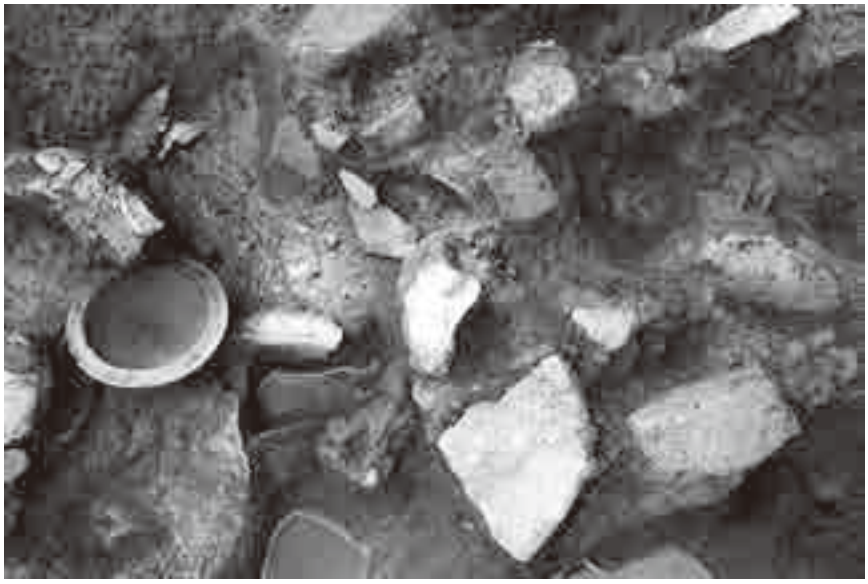
土器溜 8 完掘状況（東から）

土器溜 8 土層（東から）



土器溜 8 土層（南から）

土器溜 8 遺物出土状況（東から）



土器溜 8 遺物出土状況（東から）

図版 18

土器溜 8 遺物出土状況（北西から）

第 1 遺構面完掘状況（東から）

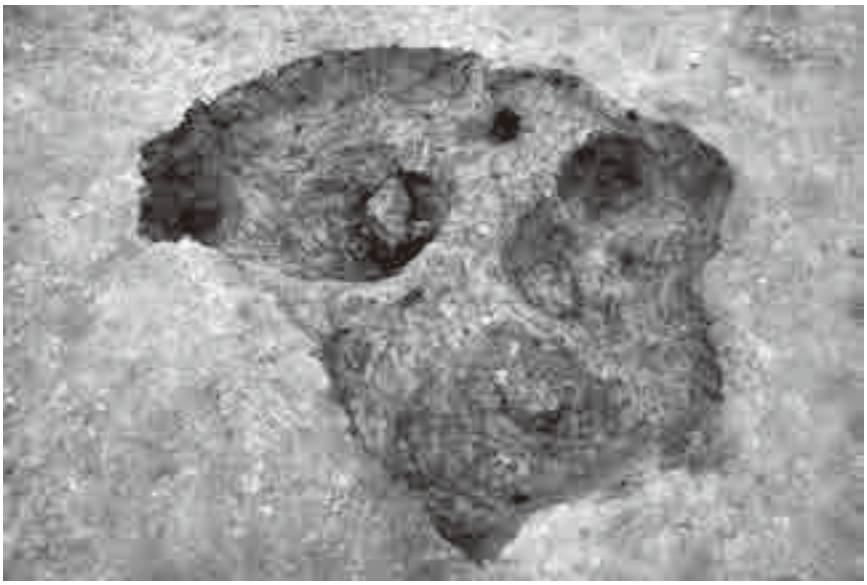
土器溜 2 周辺の転石検出状況（北西から）

SK55 完掘状況（西から）

SK107 完掘状況（北から）

SK171 石検出状況（西から）

図版 20



SK164 完掘状況（東から）

SK169 完掘状況（西から）

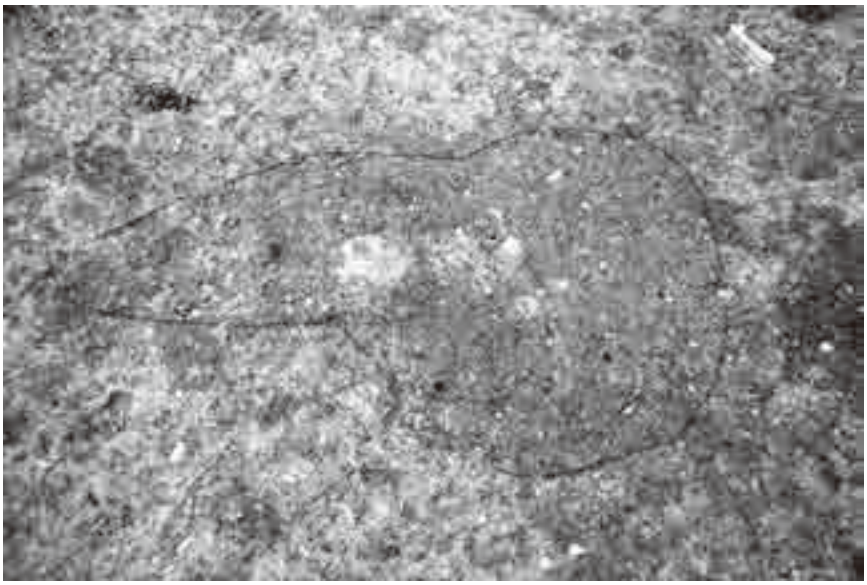
SK224 土層（南から）

SK192 完掘状況（南から）

SD134、SK192 完掘状況（南から）

SD117・134・181 完掘状況（南東から）

図版 22



SK270 検出状況（東から）

SD77 完掘状況（東から）

SD77 完掘状況（南から）

SD77 石検出状況（東から）

SD77 石検出状況（東から）

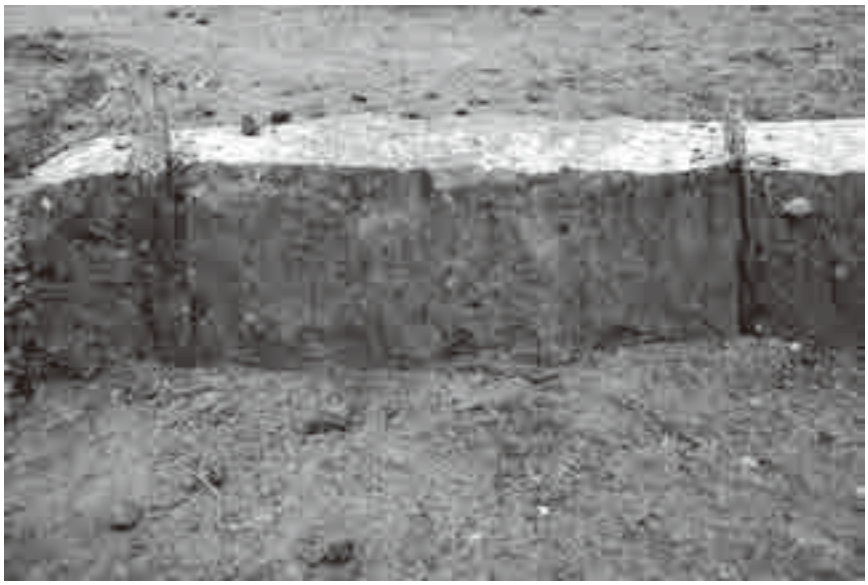
SD77 石検出状況（東から）

図版 24

SD77 南側土層（南から）

SD127 土層（東から）

SD248・249 土層（東から）



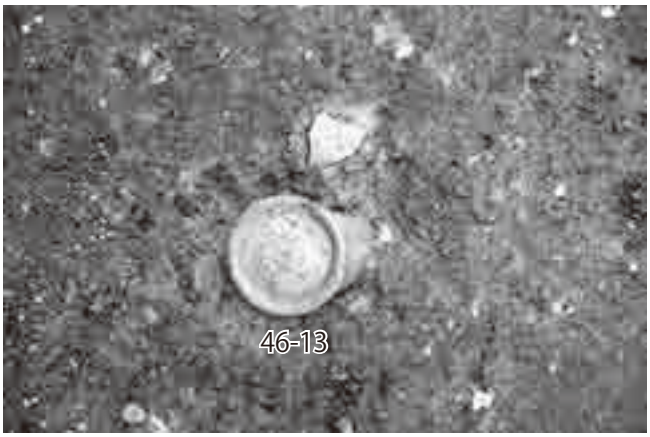
杭列土層（東から）

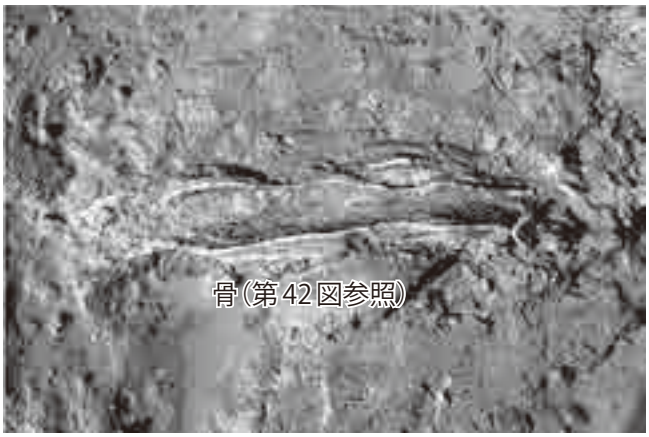
杭 7 土層（東から）

杭 5 土層（東から）

図版 26

柵 7 完掘状況（南から）



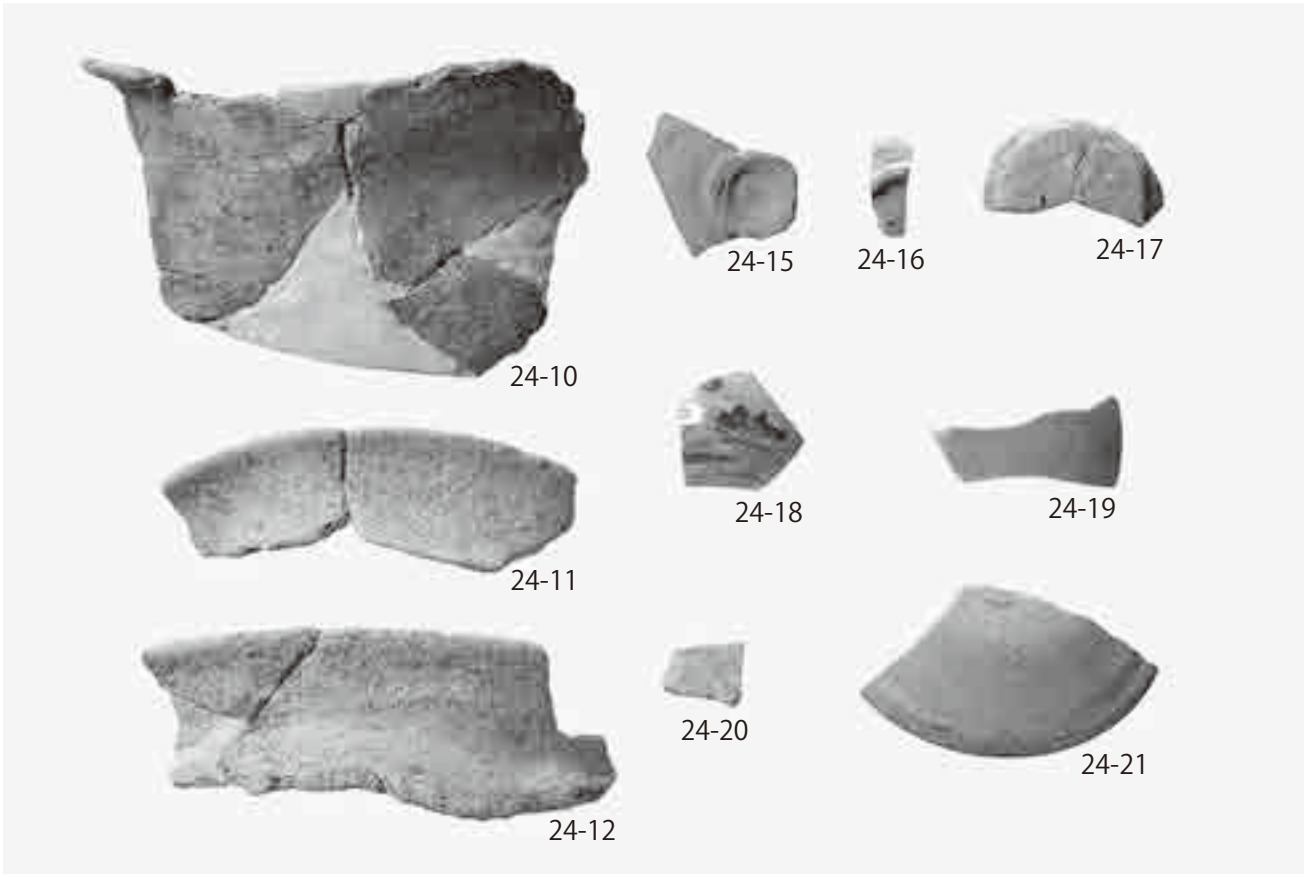


包含層出土遺物出土状況

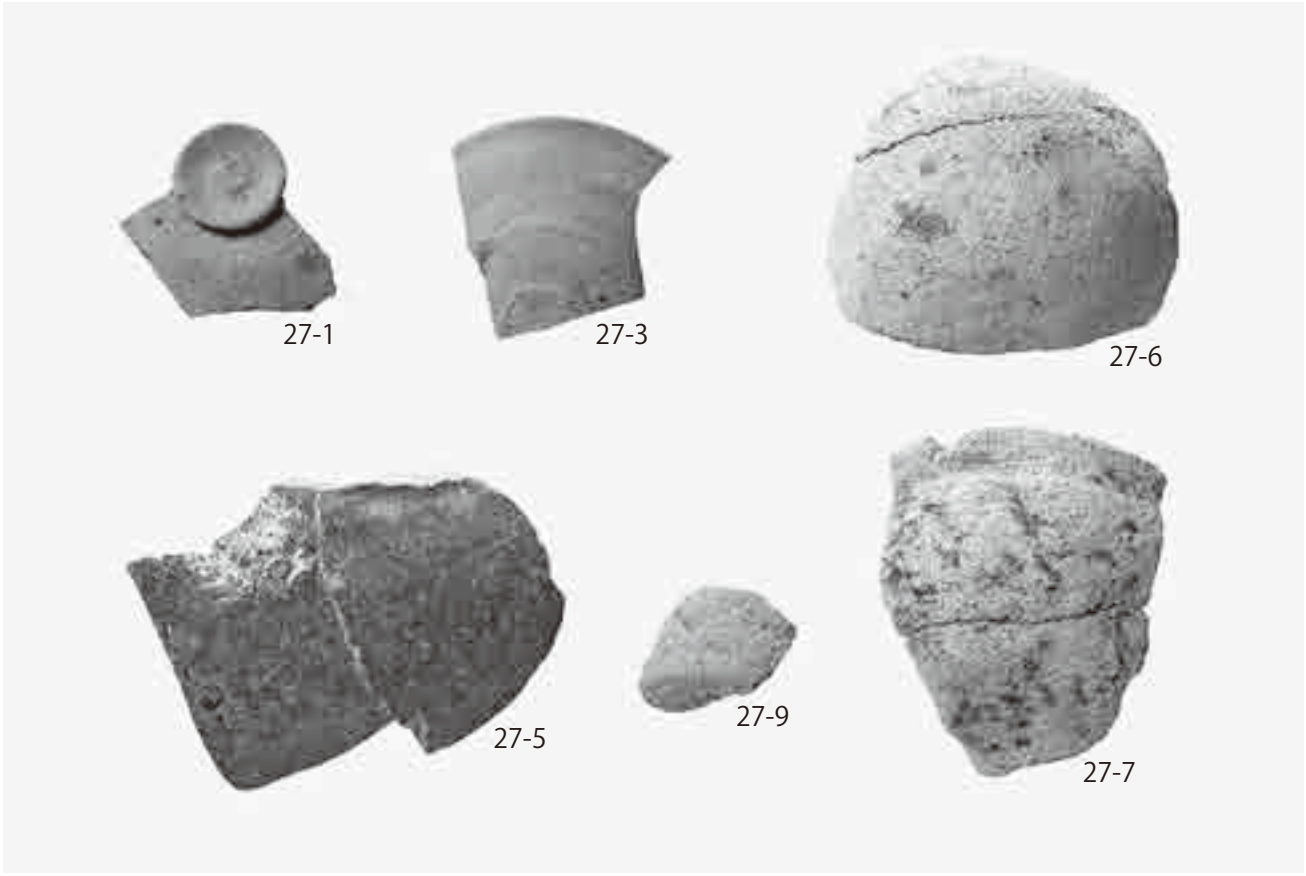
加工段 1･5 出土遺物（第 24 図）

加工段 5 出土遺物（第 24 図）

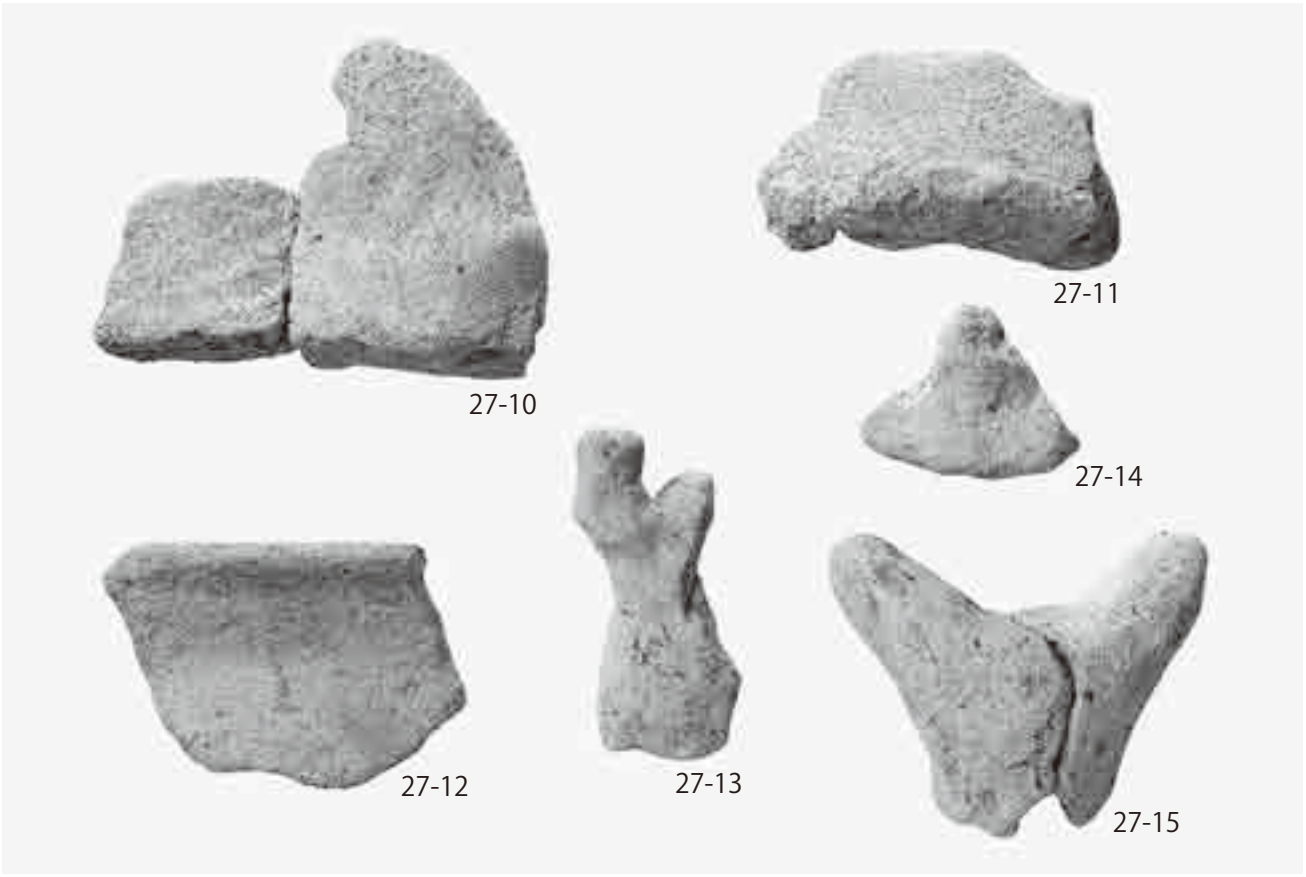
図版 28



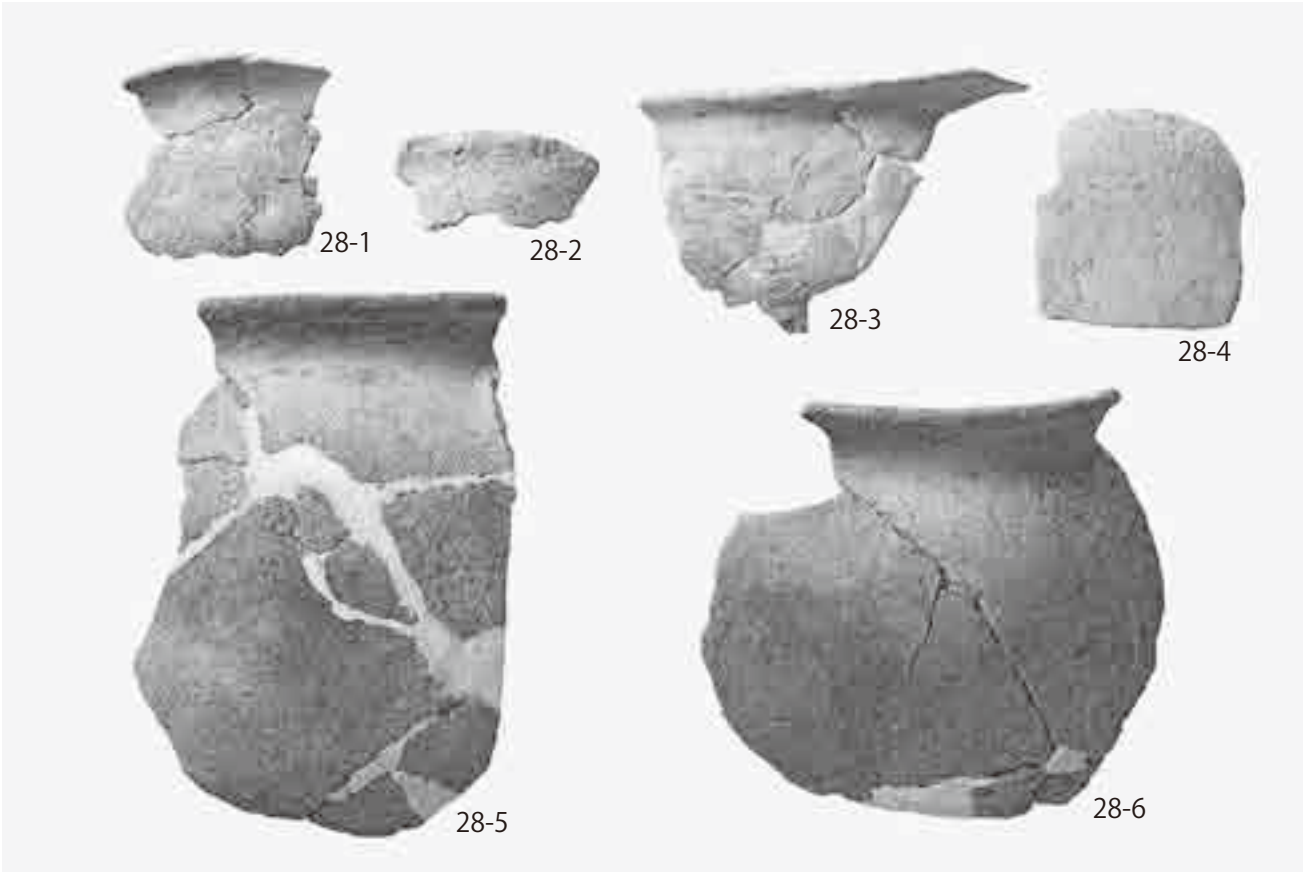
加工段 6、SD77・117・127、SK192、Pit87・225 出土遺物（第 24 図）



土器溜 8(DT08) 出土遺物 1（第 27 図）



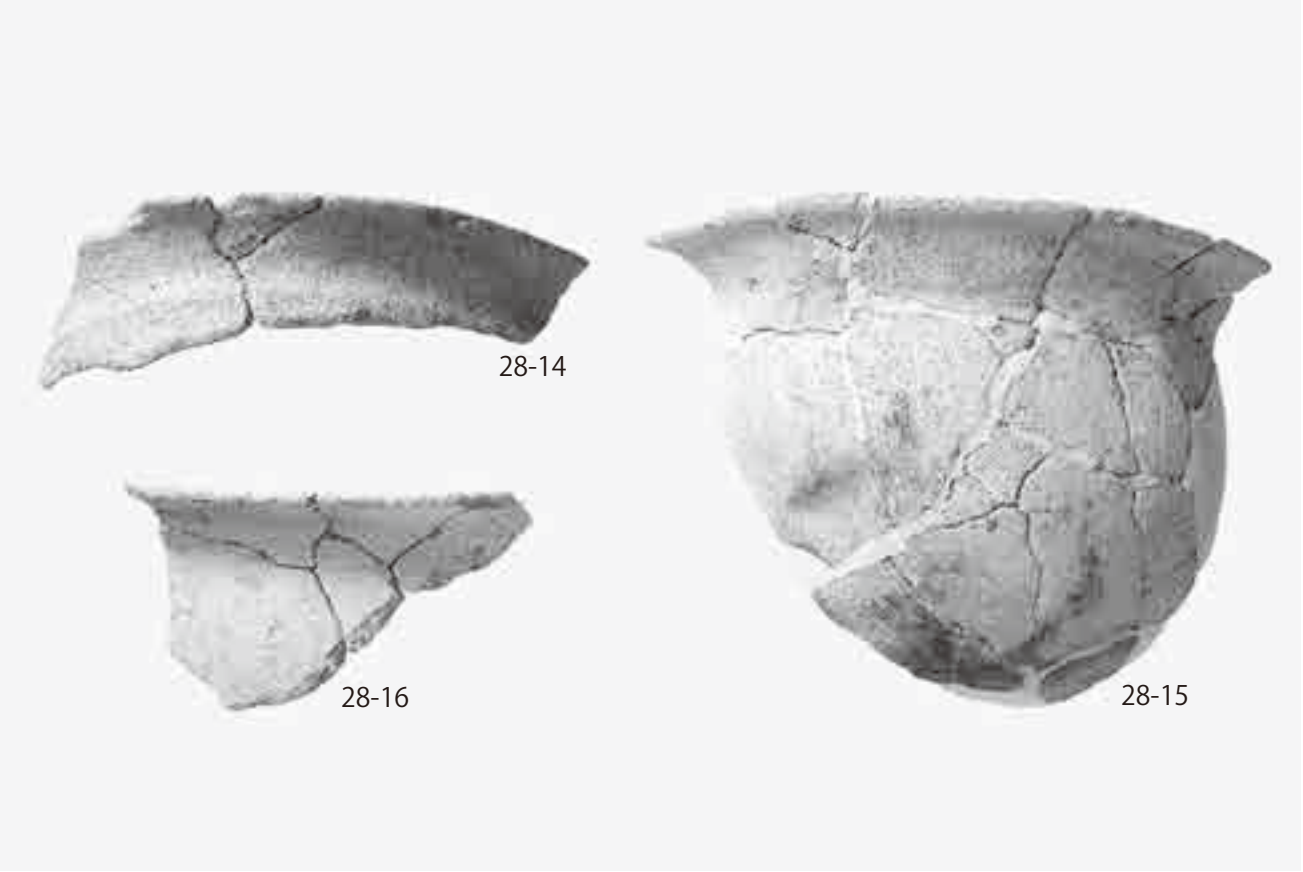
土器溜 8(DT08) 出土遺物 2（第 27 図）



土器溜 8(DT08) 出土遺物 3（第 28 図）

図版 30

土器溜 8(DT08) 出土遺物 4（第 28 図）

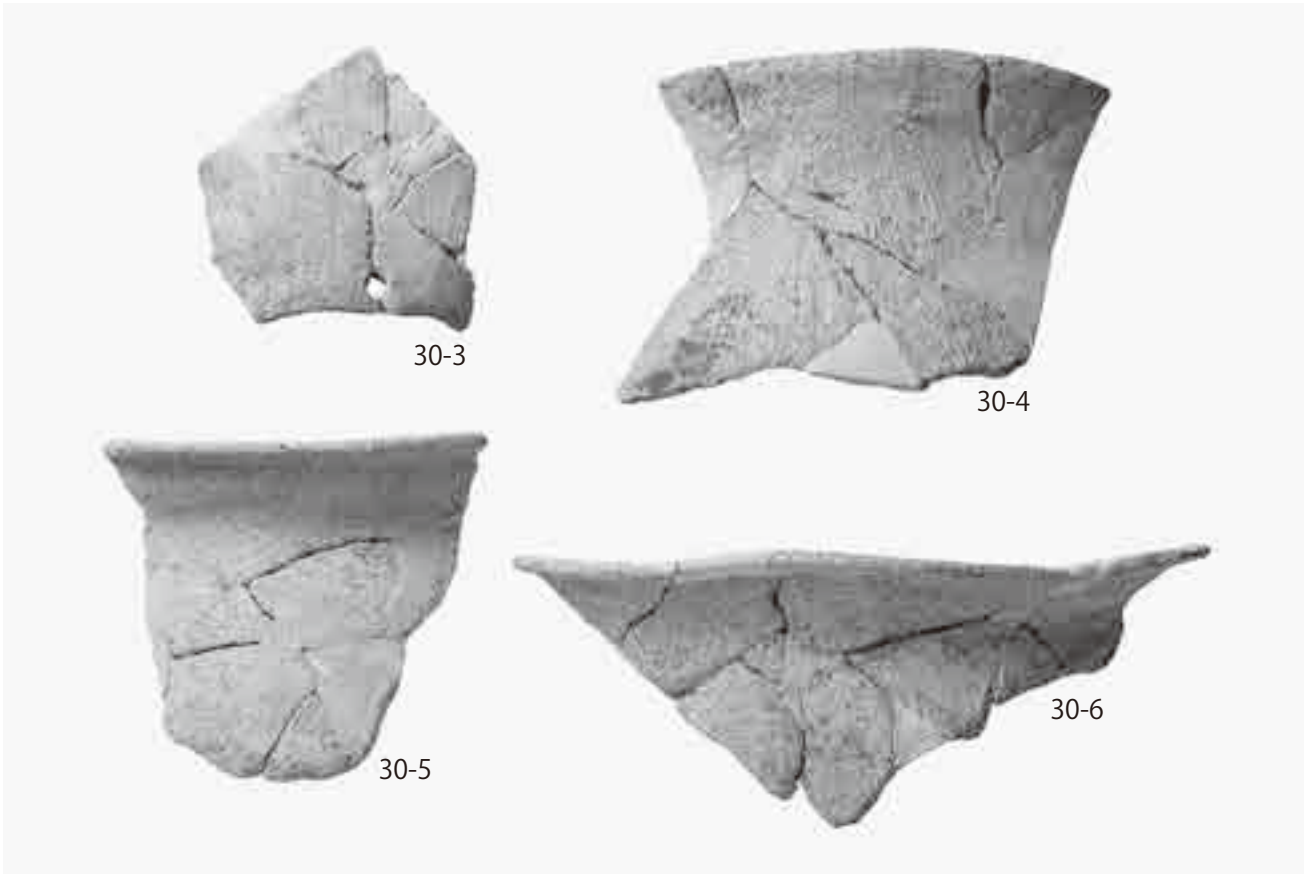


土器溜 8(DT08) 出土遺物 5（第 28 図）

土器溜 8(DT08) 出土遺物 6（第 29 図）

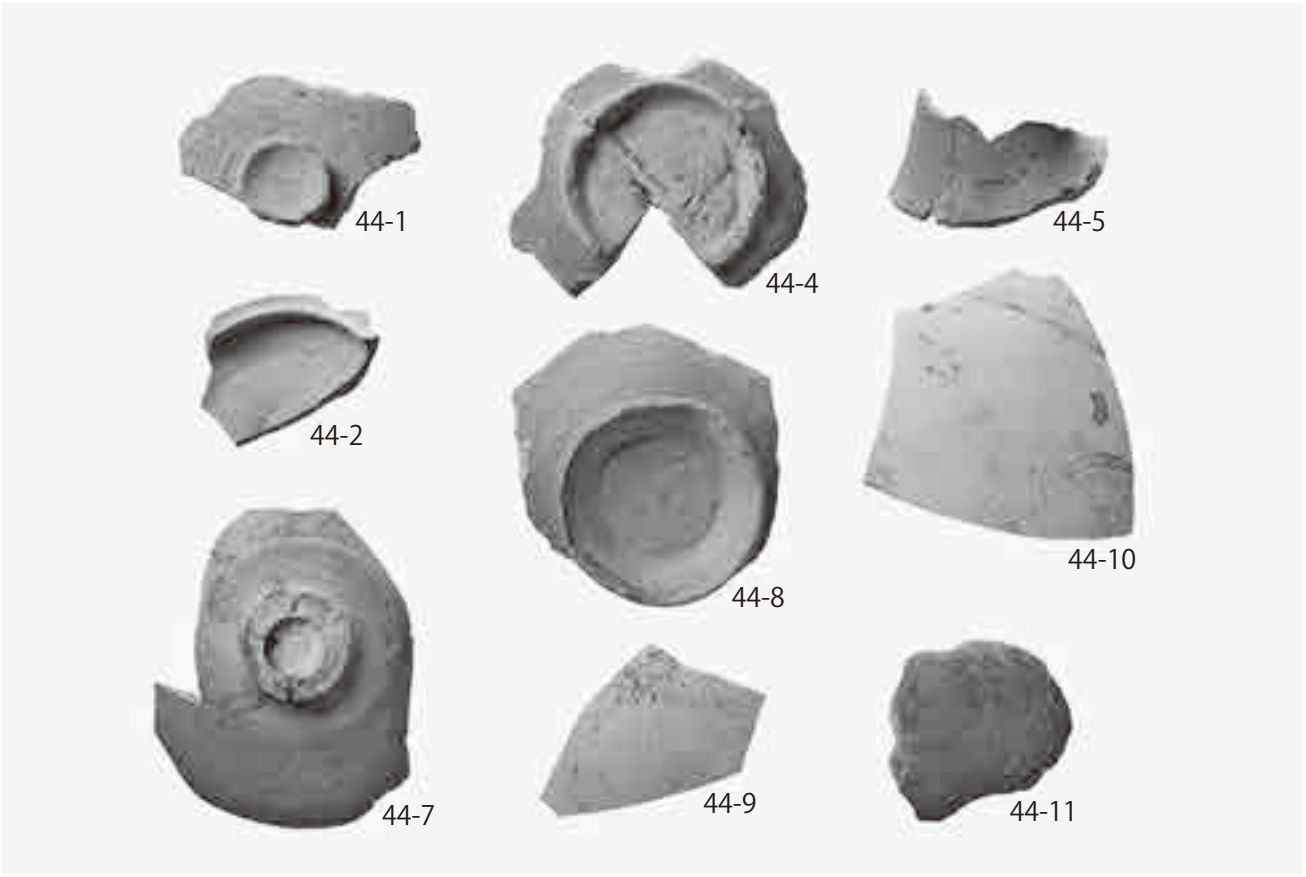
土器溜 8(DT08) 出土遺物 7（第 29 図）

図版 32



土器溜 8(DT08) 出土遺物 8（第 30 図）

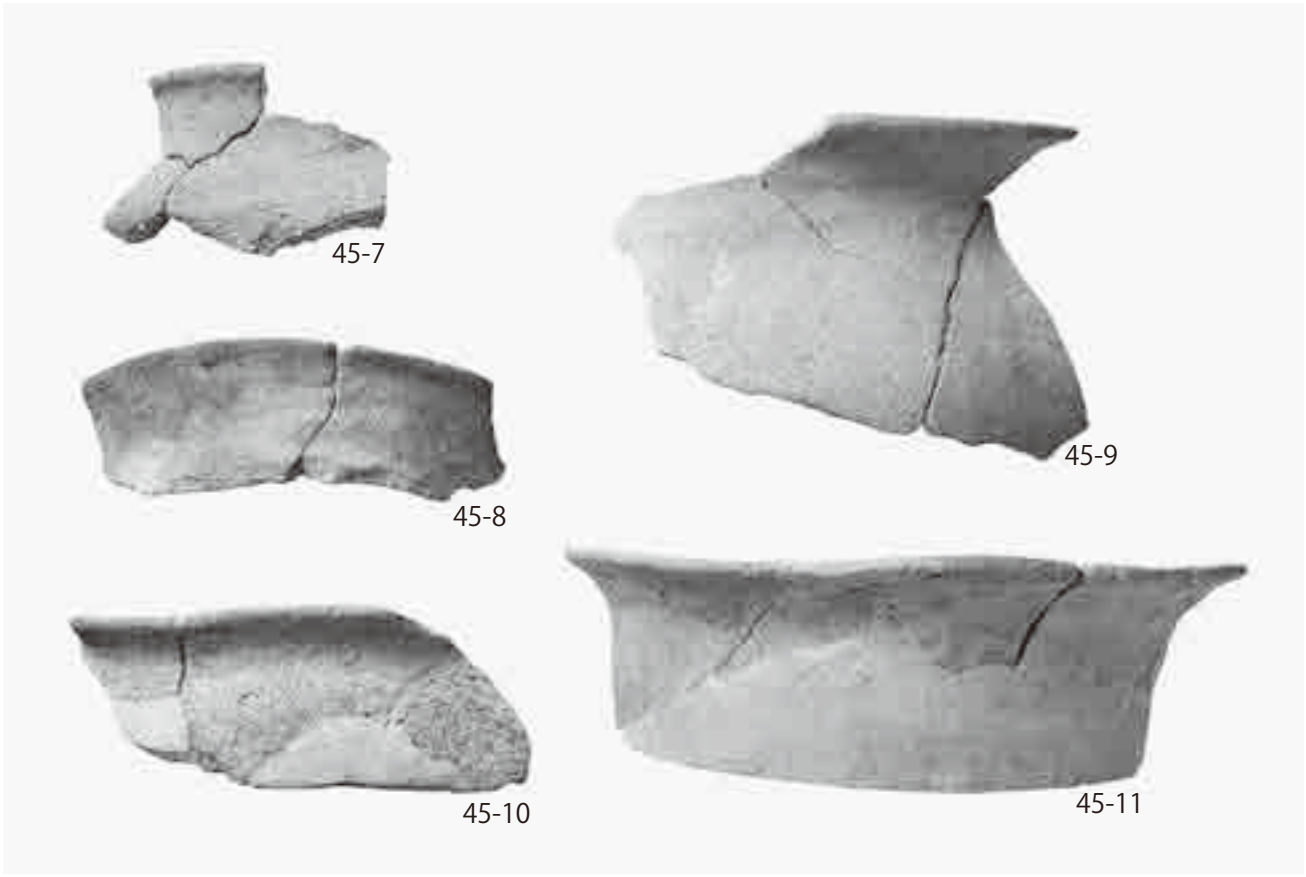
土器溜 8(DT08) 出土遺物 9（第 30 図）



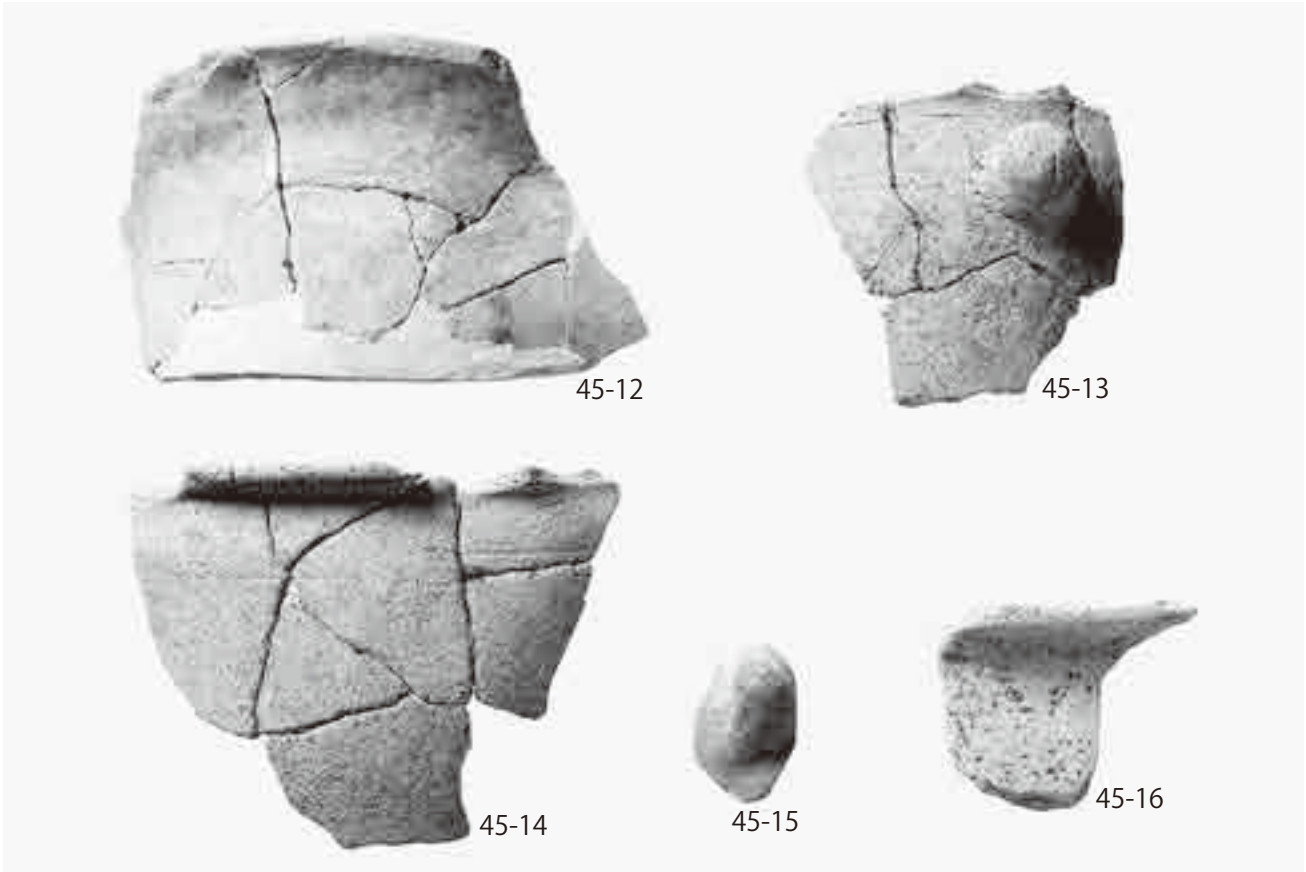
土器溜 2(DT02) 出土遺物 1（第 44 図）

土器溜 2(DT02) 出土遺物 2（第 45 図）

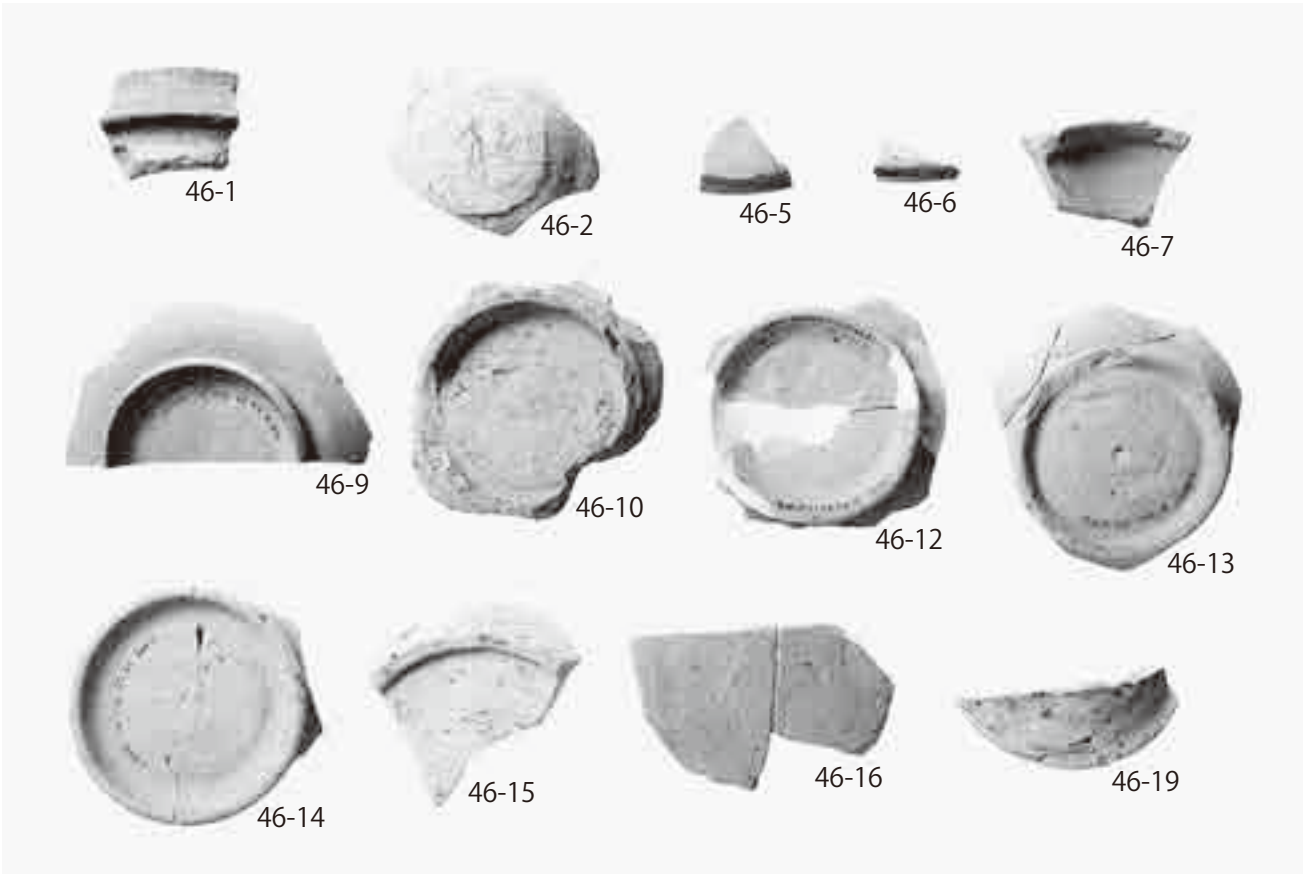
図版 34



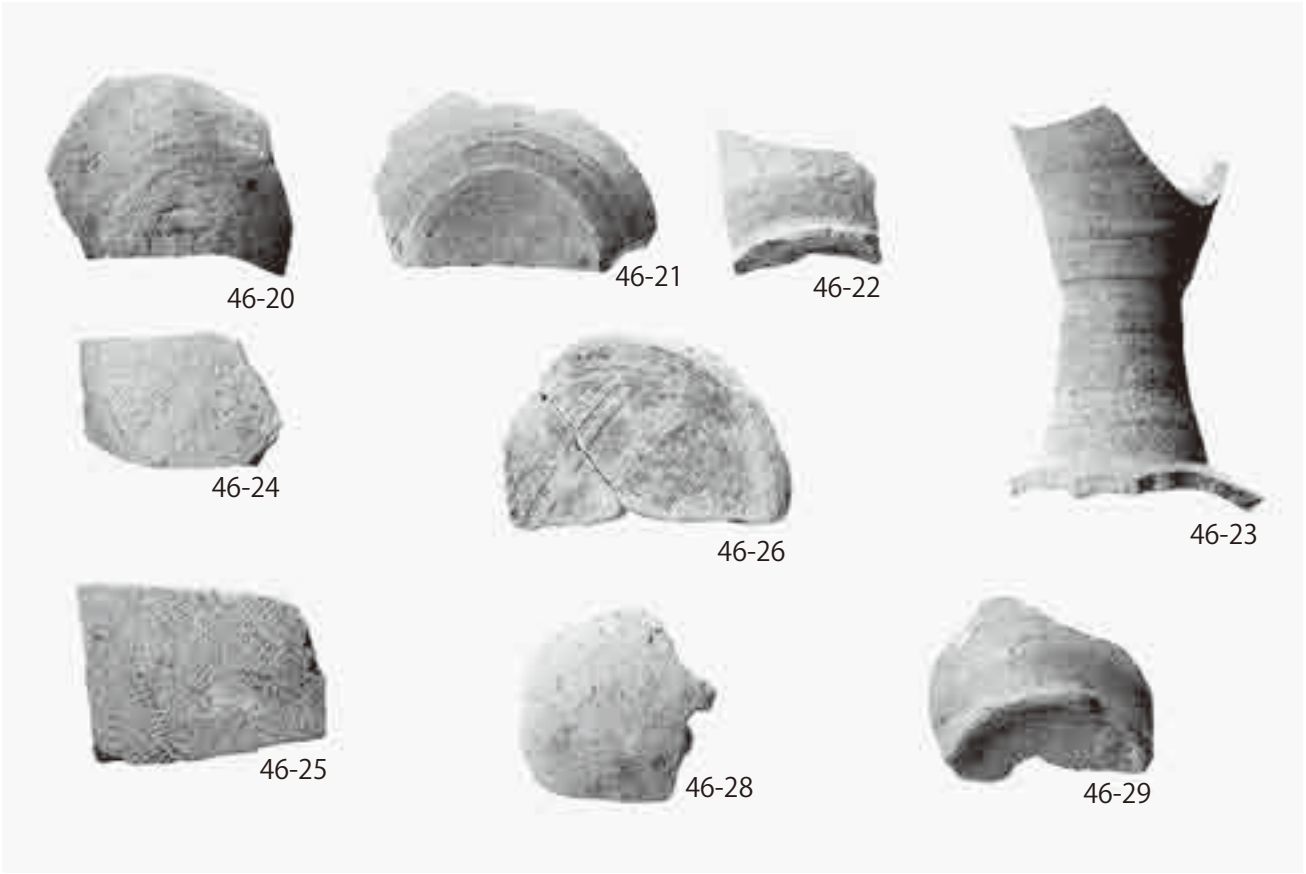
土器溜 2(DT02) 出土遺物 3（第 45 図）



土器溜 2(DT02) 出土遺物 4（第 45 図）

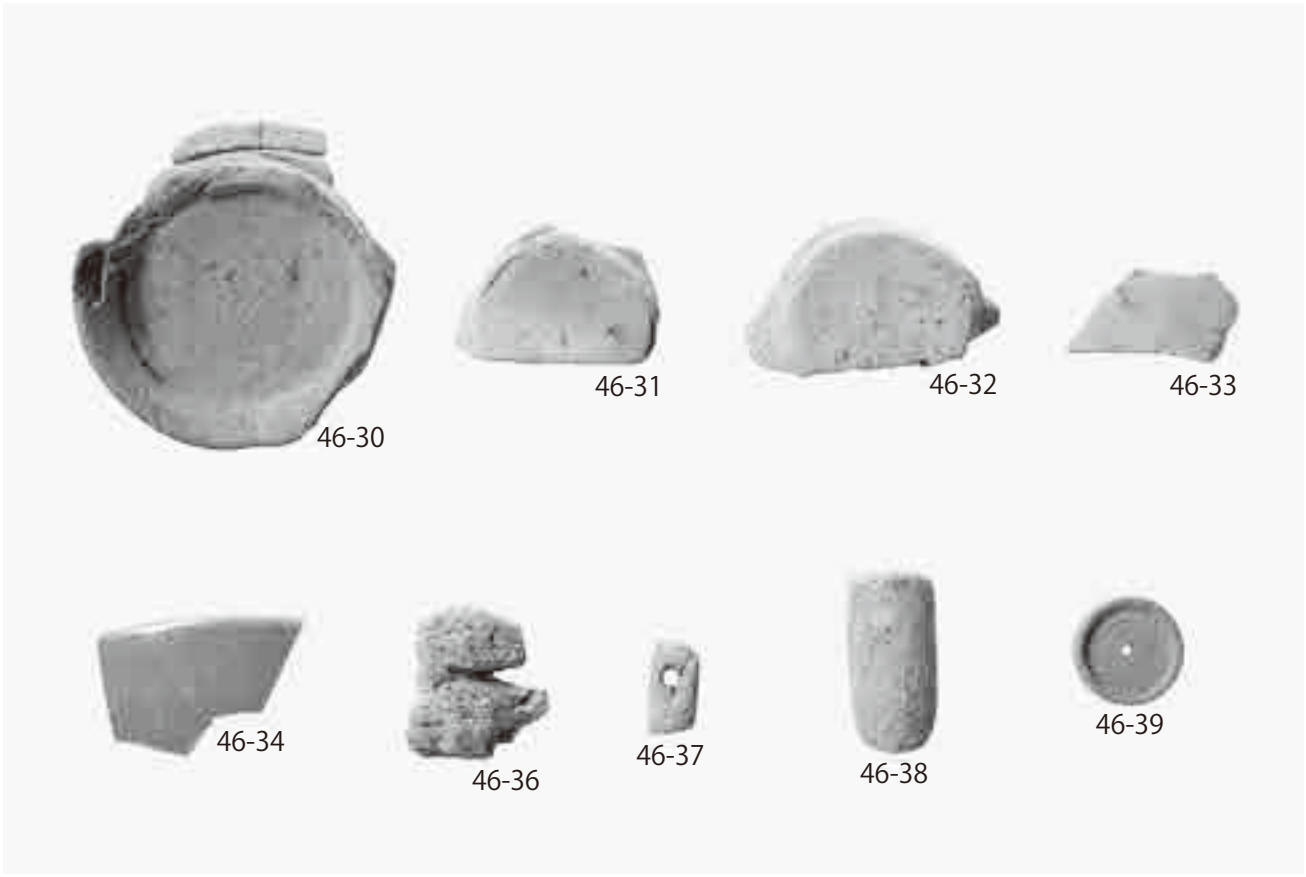


包含層出土遺物 1（第 46 図）

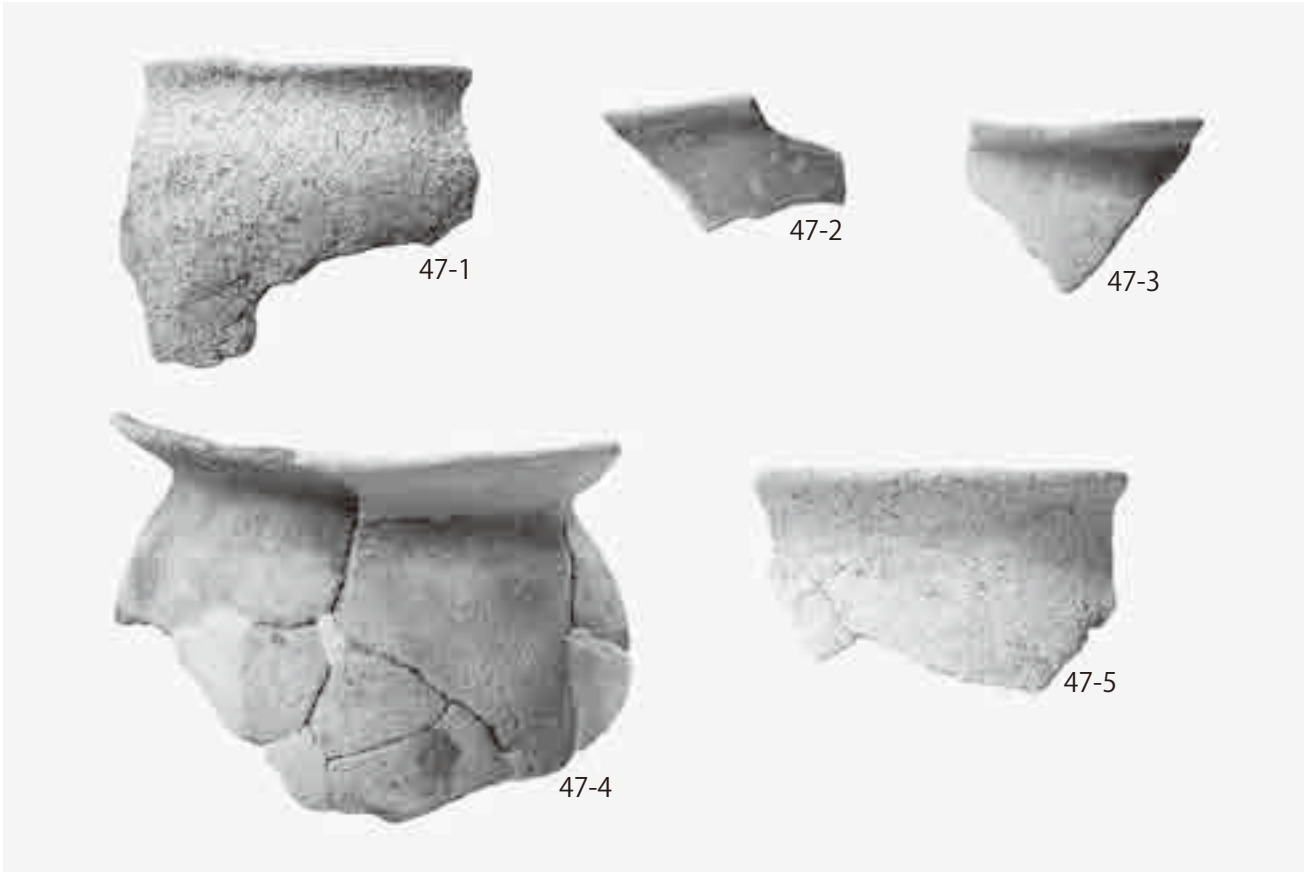


包含層出土遺物 2（第 46 図）

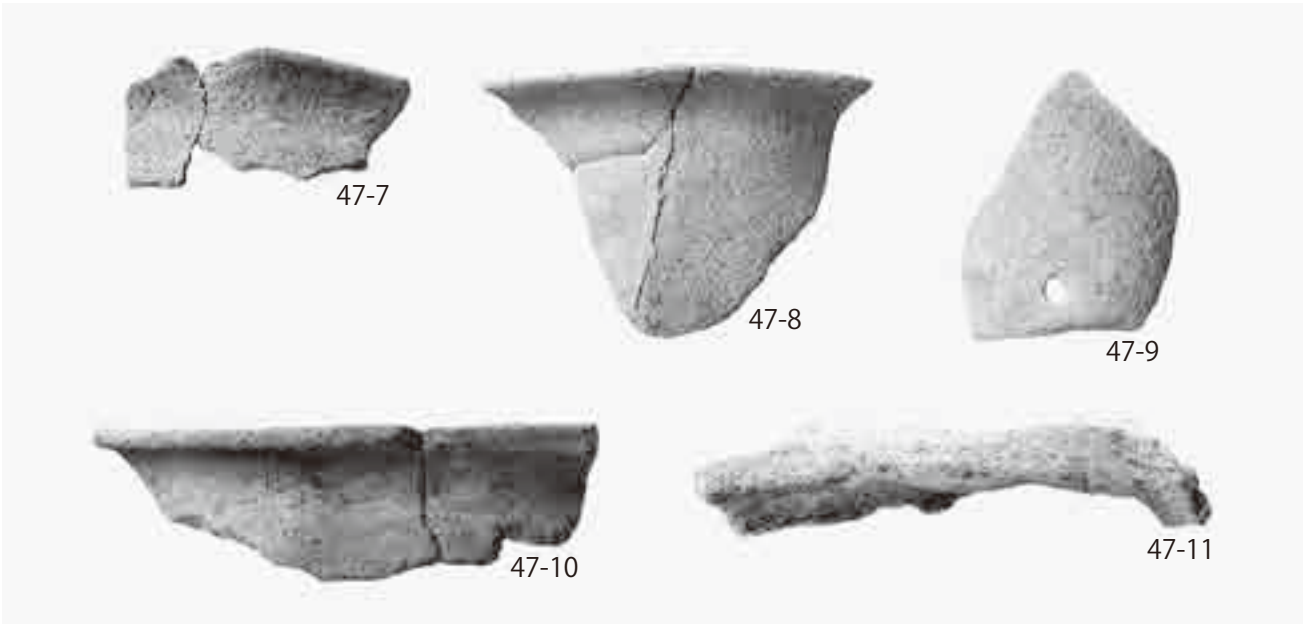
図版 36



包含層出土遺物 3（第 46 図）



包含層出土遺物 4（第 47 図）



包含層出土遺物 5（第 47 図）

包含層出土遺物 6（第 47 図）

包含層出土遺物 7（第 47 図）

図版 38

24-8

加工段 5 出土遺物

24-13

24-14

加工段 7 出土遺物

27-2

27-8

27-4

28-9

30-1

30-2

土器溜 8(DT08) 出土遺物

44-6

44-3

44-12

45-17

土器溜 2(DT02) 出土遺物

46-3

46-4

46-8

46-11

包含層出土遺物 8

図版 40

46-17

46-18

46-27

47-6

包含層出土遺物 9

加工段 7 竈構築材

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	アサガラサンイセキ
書　　名	浅柄Ⅲ遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	4
編 著 者 名	守岡正司
編 集 機 関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒690-0131　島根県松江市打出町 33 番地　TEL：0852-36-8608　FAX：0852-36-8025 E-mail：maibun@pref.shimane.lg.jp　http：//www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
発 行 年 月 日	2017(平成 29) 年 12 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
あさがらさんいせき 浅柄Ⅲ遺跡	しまねけんいずもしちいみやちょう 島根県出雲市知井宮町	32203	W270	35° 19′ 37″	132° 43′ 01″	2016 0714 ～ 2016 1216	1300	道路建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浅柄Ⅲ遺跡	集落	弥生時代後期 から 中近世	加工段 土器溜まり	須恵器、土師器、土製品、 鉄製品、陶磁器、石器	7 世紀後半の加工段に伴う 造り付け竈を検出

要　約

浅柄Ⅲ遺跡は、丘陵斜面から加工段や掘立柱建物跡、溝跡等を検出し、7 世紀後半の須恵器や土師器、石器等が出土し、短期間に営まれた集落である。加工段には造り付けの竈を持つものがある一方、遺跡からは移動式竈や土製支脚も出土していることから造り付け竈の系譜や広がり、竈の時期、使い分け等を検討していくうえで貴重な資料となった。

印刷仕様

紙　質	表　紙	レザック四六判　220kg
	本　文	上質紙Ａ判　57.5kg
		上質コート紙Ａ判　70.5kg
	写真図版	上質コート紙Ａ判　70.5kg
Ｄ Ｔ Ｐ	Windows　7	
	Adobe　InDesignCS5.5　PhotoShopCS5.5　IllustratorCS5.5	
画像原稿	階調画像線数　175 線 (AM スクリーン)	

浅柄Ⅲ遺跡

一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 4

発　行　2017（平成 29）年 12 月
発行者　島根県教育委員会
編　集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒 690-0131　島根県松江市打出町 33 番地
電話　0852-36-8608
印　刷　株式会社谷口印刷